
Akashic Records ~Edgar~

誠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Akashic Records ~Edgar~

【NZコード】

N4141Z

【作者名】 誠

【あらすじ】

この物語はとある墓からとある人物の死体を掘り起した一人の盗賊から始まる。

誰一人として、無関係な者はいない。

愛しい人が死んだなら、あなたなりびつするだらう。

この物語において出会っては終結に他ならない

この物語は一人の盜賊から始まる。

少年は大貴族、クロムウェル家の嫡男であり、その姿容たるや神も嫉妬する程であると謳われていた。しかし、ある日突然に少年は誘拐され、そのまま盗賊としての道を歩むことになる。華やかな幼き日も忘れて暗闇で生きることになつた少年と、”彼女”が出会つたのは、夏も終わりかけた肌寒い夜の墓地だった。

「駄目よ、死者の眠りを妨げては。」

「…用があるのは一緒に埋まっている金や銀だけだ。」

背後に彼女が立つているにも関わらず、少年は土を掘り返し続ける。淡い紅色の鰐雲が月明かりで薄ぼんやりと青黒い空を流れる、そんな、夜。

「その金も、その銀も、愛する人の死を悼む人々がその人のためだけに埋めたものよ。」

「金や銀にしてみたら、腐った死体と土の中より俺みたいな恵まれない子供に貰われたほうがよっぽどマシだろうよ。」

一見、彼女の言葉など気にしていないように見える少年だが、頭の中では考えていた。もし、女が邪魔するようであれば殺す他あるまい、と。そして、彼女は言った。

「…やめなさい。」

少年はゆっくりと立ち上がった。その手には土で塗れたナイフが

あつた。殺してしまおう、そう、少年は考えた。

「私が死んだら、その墓を暴けばいい。」

振り返りうつする足が止まり、ナイフを握る手にも変に力が入る。

「…お前が死ねば、好きにしていいんだな。」

「ええ、金銀を盗るなり、死体を刻むなり、好きになさい。ただ…

感覚的に、女との距離は2、3歩。間髪入れずに首を搔つ切る…
少年の心臓は大きく鼓動していた。

「私はこの墓地の墓守よ。死者の眠りを見守る義務がある。だから、
私の目が黒い…」

「」の血の巡りをじっくりと感じてから、少年は勢いよく振り返つ
た。そして、間髪入れずに彼女の首を…

「…墓荒らしなんて、やめなさい。」

搔つ切れなかつた。少年はナイフを強く握りしめたまま、その場
に立ち尽くしてしまつたのだ。

「あなたの綺麗なブロンドの髪や白い手から、土と血の匂いがする
のは…悲しいわ。」

吸い込まれていた。目の黒いちは、と豪語する彼女の瞳の黒い
こと、黒いこと。小さな光が闇夜に浮かぶ月のように輝いていた。
黒髪が風に靡く度、暗がりでぼんやりと発光しているかのように月
明かりに照らされた白い肌が見え隠れする。その様はまるで、消え

かけた蠅燭の火。

「…」

ゆらゆら揺らぐ、小さな光。今にも消えてしまいそうな不安感。少年の目は、彼女に釘付けになってしまった。

「…いい子ね。」

彼女は優しく微笑んだ。その笑顔に少年は身体を強張らせる。恐れ、ではない。驚きを含むそれは、明らかな安堵であつた。そして彼女は、少年を抱きしめた。

じんわりと伝わってくる温もり。少年の手元からスルリとナイフが滑り落ちる。大きく見開かれ、彼女の肩越しに墓地を漠然と眺める目からは涙が零れ落ちた。

彼女の温もりの中で、少年は思い出していた。家族に囲まれた温かく華やかな幼い日々。それが突如失われた、絶望。ほんの数年前とはいえ、少年にとつては遠い遠い過去の記憶。それまで胸の内にしまつてきた、思い出したくなかった記憶だ。思い出せば悲しみや苦しみがどつと湧き上がつてくることを、少年は幼いながらにわかつっていたのだ。それが、堰を切ったように涙となつて溢れ出す。

「…辛かつたのね、悲しかつたのね。でも、もう大丈夫よ。死者には温もりを感じる身体も、涙を流す術もないけれど、あなたは違う。生きているのだから。私が…いるのだから。」

少年は感じていた。彼女の憂が匂わす黒い影を。この温もりは決して光ではない、四方八方何も見えないばかりか、遠近感さえ鈍らせる暗がりである。そう感じていながらも、少年は彼女の背中に震える手を回した。闇に溶けてしまつても構わないから、この温もり

を手放したくないとばかりに彼女の胸に顔をうずめ、泣き叫んだ。そして、それまで直視しようとした誘拐されたという事実と向かい合つ、よつやく愛情に満ちた過去と思い出に涙ながらの別れを告げる。

幼いからこそ母性愛には貪欲で、少年だからこそ痛みに敏感。少年は彼女に甘えると共に、彼女を受け入れていたのかかもしれない。

少年の泣き声と森のざわめきだけが響く夜の墓地。ローズウッド家の墓の前で抱きしめ合つ二人は、こうして傷を舐め合つようにして出会つたのだ。それを見ていたのは墓から半分程顔を出す白骨化しかけたローズウッド夫人と、空に浮かぶ満月だけ。

二人の出会いは極めて暗く、死の匂いに包まれたものであつた。

しかし、この出会いはなんの始まりでもない。冒頭で説明した通り、この物語は一人の盗賊から始まる。一人の盗賊と、一人の死者から。そして、満月のようにただ終わりへと向かつてゆく。

「…まさか、そんな。」

そして、一人が再会したのも満月が浮かぶ夜の墓地であった。

「なんで、ミハエルが…」

青年になつた少年は驚きを隠せずにいる。それもそのはず。

「どうしてクロムウェル家の墓に、ミハエルが埋まつてるんだよ…」

少年…いや、カイザが掘り起つした墓には、幼き日に墓地で出会

つた彼女が眠っていたのだ。

カイザは思わず彼女の頬を撫でた。何故なら、その死体はあまりに綺麗で眠っているようにしか見えなかつたからだ。撫でた頬は冷たいが、柔らかい。

「…どうして。5年も前に埋められたはずなのに腐つてもいらないなんて。」

カイザが墓石に目をやると、そこには見知らぬ人物の名が刻まれていた。

「…エドガー…って、誰だよ…」

そう、ここから全ては始まるのだ。カイザがかつて嫡男であったクロムウェル家の墓を暴き、眠っているかのように死んでいるミハエルを掘り起こしたまさにこの時、月は満ちた。

…何故、プロローグに関係のない二人の出会いを語つたか。それは、物語の始まりではないが、物語の…

「…死んだのが、ミハエル。」

カイザはまだ実感が湧かないようだ。涙も出ない、言葉も出ない。カイザはミハエルを見つめてまた、立ち尽くしていた。

そして二人は果てしない思い出の輪へ還ろうとするのだ。物語の…結末へ。

首謀者はその計画を纏じたまま罪の

月が満ちる日から一ヶ月と数日前の話だ。

「カイザ、ちょっとこい。」

盗賊の一団で埋め死べられた騒がしい酒屋の一角で、男はカイザを呼びつけた。カイザは一緒に食事をしていた仲間と田配せをして、席を立つ。

「なんですか、マスター。」

「お前、明日からウェルスに向かえ。」

ウェルスは盗賊団のいる街から北へ真っ直ぐ行つたところにある港町だ。

「俺、一人ですか。」

「そうだ。」

マスターと呼ばれる男はカイザと視線を交えることなく酒瓶を手にした。カイザは普段と違う雰囲気に少し戸惑い気味だ。いつもなら豪快に笑つて仕事へ送り出してくれるはずなのに…ましてや一人で長旅に出されるのだ、カイザの心には一抹の不安が過る。危ない橋を渡らせて自分を始末するつもりなのではないか、と。

「…」

「なんだ、」

浮かない顔をするカイザに気づいたマスター。そこでやつと、二

人の目が合つ。その時、カイザは少し安堵した。マスターの目にはなんら悪意を感じなかつたからだ。こんなゴロツキの一団だ、上も下も感情剥き出しで考へてゐることが顔に出る連中ばかり。表情を見れば何を思つてゐるかがある程度わかる。

「いえ、なんでも…」

安堵はしたもの、疑問が芽生えた。マスターは何やら複雑な表情をしていたのだ。心配しているような、覚悟を決めたような、やはり今まで見たことのないマスターが、そこにはいた。

「… そうか。で、仕事の内容だが…」

「はい、」

「墓荒らしだ。」

マスターはカイザと目を合わさうとしない。カイザは、マスターから目が離せない。

この一団に置いて、盗みと墓荒らしは新人の仕事であり、決して入団して10年経つカイザに回されるような仕事ではなかつた。そのうえ、カイザはミハエルと出会つてから墓荒らしはしていない。彼女との約束を守り続けていたのだ。それが、古株になつた今になつて破綻しようとしている。

「… なんで、俺が？」

「…」

「マスター！」

マスターは酒瓶を片手に黙り込む。カイザが不満に思うのも当たり前だ。しかしこの沈黙の間、役不足だと怒る彼に対する謝罪の

言葉を選んでいたわけではない。

「… 暴く墓は、」

約束を破れと言われて動じている彼のことを面倒くさがっていたのでもない。

「クロムウェル家の墓だ。」

過去を捨てた彼のことで、悩みに悩んだほんの数秒…それが、あの沈黙だ。

カイザは荒くなる息を抑えながら、マスターを見つめる。まだ、事を把握しきれていないために少し混乱していた。

一人の長旅を強いられ、墓荒らしを任せられ、その目標がクロムウェル家の墓だと気づく。

何故、クロムウェル家の墓荒らしを自分が?

カイザはまだ落ち着きを取り戻したわけではなかつたが、頭に浮かんだ疑問を言葉にした。

「なんで…俺がしなくちゃいけないんですか。」

言葉にしてみると先程怒りのままに口にした質問と内容は変わらない。しかし、今度は意味合いが変わってくる。

「俺がクロムウェル家の間違つたってこと、わかつてて言つてるんですか。」

そう、墓荒らしという新人の雑用をクロムウェル家のカイザ

にあえてやらせようとするマスターの意図を、聞いているのだ。

マスターは眉を寄せて、重たい口を開いた。

「…わかっている。」

「だつたらなんで…！」

「その墓の下に埋められたのが、行方不明だったクロムウェル家の長男坊だつて情報が入ったんだよ！」

マスターが声を荒げると、騒がしかつた店内がしんと静まり返つた。

「行方不明の…長男…？」

「…お前だよ。」

カイザは首を小さく横に振りながら、力なく笑つた。

「そんなん…だつて、身代金を払つてもらえずに俺は捨てられたつて…」

「俺だつて、わけがわからねえんだよ。お前の墓が建てられたのは5年前。それまで行方を捜索されてたんだ、お前は。」

捨てられたわけじやなかつた。自分の家族はずつと探してくれていた。それなのにどうして、墓なんかできるんだ。それも、5年も前に。

「情報屋もクロムウェル家の話になるどじうも話が噛み合わなかつたんだ。だから、お前自身の田で見て…」

それは、一瞬の出来事だつた。注目を浴びる静まりかえつた空氣の中、カイザはマスターの心臓にナイフを突き立てた。吹き上

がる血しづきと、じよめく店内。

「カイザ！ てめえ何したかわかつてんのか！」

「マスター、マスター！」

既に死んでいるというのに、必死に呼びかける子分共を見て
カイザは笑った。

「どうして…俺をここに留めたんだよ。身代金でもなんでももらえばよかつただろ。貰えないなら、殺せばよかつただろ！ そしたら、そしたら俺は…」

マスターの死に逆上した者共が一斉にカイザへと襲いかかる。
カイザはそれをヒラリと避け、マスターが飲みかけていた酒瓶を手にしてテーブルの上に立つた。

「お前らのせいだ…お前らのせいだ俺は亡靈になつたんだ！ みんな、道連れにしてやるよ！」

カイザは酒瓶を叩き割り、そこに蠅燭を一本、落とした。その瞬間に炎は勢いよく天井まで伸びて、店内は逃げ惑う盗賊で溢れた。カイザはテーブルに並ぶ酒瓶を狂ったように放り投げる。壁や天井、逃げようとする盗賊は酒にまみれ、火は勢いをつけてゆくばかり。一つしかない出口に向かつてなだれ込み、仕舞いには順番を巡つて殺し合いが始まった。その時カイザは出口から離れたテーブルに立ち尽くし、火に取り込まれようとしているマスターの死体をじっと見つめていた。

カイザにとつて、盗賊団で過ごした十数年は常に気を張る安らぎのないものであつた。家に帰れないかもしないという恐怖と鬪う幼き日々、悪事に手を染めねば生き抜けない少年時代、いつ殺

されるかわからぬ日々に怯える青年期。炎に巻かれ、地獄絵図のような殺し合いを目の前にしてカイザはやつと、張り詰めていた糸から解放されたのだ。いや、マスターを一突きにした際、既に糸は切れていたのかもしね。

「…カイ…ザ…」

弱々しく自分を呼ぶ声に、放心していたカイザは我に返った。辺りは火の海、その中でコラユラと争う盗賊達の姿が見える。誰も、出口と反対の此方など見ていない。

「…カ…イ…ザ…」

声の主は、マスターだった。彼はまだ生きていたのだ。カイザは少し驚いたが、もう虫の息であることを察するとマスターに歩み寄つた。マスターを見下ろすその顔は何の色もない、無慈悲な笑顔。

「…なんですか、マスター。苦しいんですか？」

「カイ…ザ…」

「楽にしてあげますよ、」

カイザがナイフを振り上げると、マスターは血を吐きながら言った。

「マザー…クリストフに…会え。リノア鉱山を仕切つて…山賊の…」

「だから、なんで、俺が？」

カイザは鼻で笑つた。そんなカイザを真つ直ぐに見つめて、

マスターは静かに涙を流した。

「行けば……お前の力に……」

「俺の力って、今更何をしてくれるっていうんですか。俺はね、死ぬんだ。あんたと一緒に。」

マスターの涙を見ても、カイザは煙で濁つた目をして口元だけで笑うばかり。それでもマスターはカイザに語りかけた。段々と細くなる声。彼の命の火は徐々に小さくなつてゆく中、二人を覆う炎は勢いを増してゆく。

「お前の両親は……お前を、捨てた。」

「さつきと話が違うじゃないですか。」

「真実を……その、手で……その田で……」

真実……カイザにとつて、それはもう興味の無い物だ。盜賊になつた頃から、真実などどうでもよかつたのだ。むしろ、知りたくなかつたのだ。カイザの顔から、笑顔が消えた。

「どうしていいのか……迷つたんだ。馬鹿な俺でも……」

「……」

「すまない、カイザ頼りない、マスター……で。」

「やめてください……」

涙でぐしゃぐしゃのマスターの顔を、カイザは泣きそうになるのを堪えて睨んだ。何故、泣きそうなのか……彼自身、理解できなっていた。

「生きる……カイ……」

「やめろー……」

カイザは、ナイフでマスターの喉を突き刺した。震える手で、深く、突き刺した。固く瞑つた目をそっと開きマスターを見ると…光を失つた目は、悲しそうにカイザを見つめていた。

「そんな、顔をされたら…恨むのを躊躇つてしまふじゃないですか。マスター…」

カイザは涙目になりながら、悲しそうな笑顔を浮かべた。

もう、出口もない。周りは赤一色に染め上げられた。カイザは崩れ落ちようとしている店内を見渡して、立ち上がった。

「…誘拐したこと、恨みます。育ててくれたこと、感謝します。俺は…もう少し、生きてみます。」

何故、泣き出しそうなのか。何故、こんな言葉が口から出たのか。何故…マスターに言われるがままに生きてみようと思つたのか。カイザはわからない。

燃え盛る炎の中、夢中で外へ飛び出した。服に燃え移つた火を地面で叩き消し、ふと、顔をあげた。

暗闇で空高く燃え上がる。火の粉がキラキラと散つて、煙が空を赤黒く染める。マスターを、燃やしてゆく。

「…カイザ！」
「生きてやがった！」

火事で騒々しい店前にいた残党が、カイザを捕らえようと向かってくる。

カイザは人混みに紛れてその場をやり過ごした。

「この火事つて…あの盗賊団がやつたのか。」

「酷いことするよ、あのゴロツキ共。」

「この際だ、兵隊さん達に頼んでみるか。盗賊を根絶やしてく
ださい、つてよ。」

住民達の怒りの声を聞きながら、カイザは街を出た。

生き残ったところで、クロムウェル家には戻れない。行くあ
てもない。人々に忌み嫌われる盗賊なんて。

カイザは、とぼとぼと森を歩きながら決意した。何も失う物
のない自分だ、せめて…自分の墓とやらくらい、拝ませてもらおう。
両親が自分を愛してくれていたという証を日に焼き付けて…死のう、
と。

そして彼は、ミハエルと再会するのである。クロムウェル家
の自分の墓で、エドガーと名付けられて埋葬された彼女と。結局、
カイザはマスターの言っていた通りに真実を探すことになる。暗闇
の中、手探りで手繩り寄せるそれが一本に繋がっているとも知らず
に…追憶の彼女を追いかけ、生きると言われた意味を探す。意味な
んてものに固執して運命に踊らされるカイザが、マスターの言葉の
意味を知るのはもう少し後。それまではただ、冷たくなったミハエ
ルと…無言の道中。

足りないピースは時として人を導く

「なあ、なんで墓守なんてしてるんだよ。」

時刻は夕暮れ。空が赤く染まり、森の影が大きくなつて暗闇になろうとしている、そんな時刻。カイザはローズウッド家の墓に腰掛け、墓地の手入れをするミハエルを眺めていた。

「なんであつて…私を拾ってくれた人が墓守だつたからよ。」

「その人は？」

「ずっと前に、死んだわ。」

ミハエルは立ち上がり、空を見上げた。森の影の中にポツカリと六があいたかのように墓地の真上には空が広がる。

「その人も、先代の墓守に拾われたのよ。みんな、寂しかったのね。」

「…ミハエルは、寂しくないのか？」

ミハエルは心配そうに見つめるカイザを見て、微笑んだ。

「寂しくないわ。死に困わたこの場所だつて、一歩外へ出れば生命で溢れてる。でも…」

ミハエルは笑顔を曇らせ、墓を見下ろした。

「こうして他人の眠りを見守り続けても、私が死んだ時、私の眠りを見守ってくれる人がいないのかと思うと…少し、寂しいわ。」

「…寂しいんじゃないかな。」

「さうね、私も先代達と同じね。」

ミハエルは”寂しい”と言いながら笑う。寂しくないと言葉にするくらいだ、自虐的なわけでもない。ただ彼女は純粹に、”違うと思つたけど同じだった”という結論に対し微笑んだのだ。彼女を好いているカイザには、それがひどく、寂しげに見えてしまう。慈悲深く、孤独なミハエル。彼女が発する不思議な温もりと不安定な憂にカイザは惹かれていた。初恋、というよりは姉への愛情に近いかもしない。その気持ちは次第に、彼女の死を見守りたいという思いに変わつてゆく。聞こえが悪いが、つまり、ずっと一緒にいたい、ということだ。

「…まあ、ミハエル…」

ウェルスを出て数日。カイザはクロムウェル家の墓を暴き、彼女をそのまま連れ出していた。

山間の河原でミハエルを岩に寄りかからせ、その隣に腰掛け
るカイザ。

「その…なんだ、」

カイザは信じられずにいた。透き通るよつて白い肌も、黒々とした艶のある髪も、ましてや容姿さえ昔と全く変わらない彼女が、死んでるなんて。眠るように柔らかく目を瞑る彼女を目の前して、墓地に埋め直してはいけない気がしたのだ。しかし…

「…久しぶり、だな。」

本当は、彼女に会えて嬉しくてたまらないのだ。せっかく再会できたのにまた埋めてしまうのは忍びない…それこそ、本心だった。

脈拍もなく、呼吸もしていない彼女に向かつて少し緊張気味に言葉をかけるカイザ。

川向かいの林からは小鳥の轡が聞こえる。細かく波打つ川の水面には、一人の影が揺らめいている。一見、一組の男女にしか見えない「一人だが…死体と話す自分の姿は、カイザの目にどう映つているのだろう。

「なんで、クロムウェル家の墓に入つてたんだよ。俺の墓なんかに…」

川上から流れてくる心地よく冷たい風が、彼女の髪をサラサラと撫でる。

「それに、エドガート誰なんだ…？」

寝息が聞こえてきそうな安らかな寝顔は、まるで夢でも見ているようだ。

「…本当に、死んでいるのか？」

ミハエルは何も応えない。

わかつていた。わかりきっていたことなのだ。どんなに話しかけても彼女の瞼が開くことはないと。しかし、カイザは心のどこかで腐りもせずに姿を留める彼女が突然目を覚まし、また昔のように優しく微笑んでくれることを期待していた。それこそ、夢のようなことを。

カイザは小さく溜息をついて立ち上がった。この場を離れ、目的地へ向かおうとしている。

彼女に白い布を被せて背中におぶり、紐で自分の身体に縛り付けた。ウェルスで調達した旅の荷物も手にして、カイザは山道を歩き出す。

目的地とはマスターが死んだ酒屋のある街とウェルスのちょうど間に位置する華の京、カトリーナだ。そこに向かう理由は、ただ一つ。

「…絶対に取り戻してやるからな。ミハエルの死を悼む人々がミハエルのためだけに埋めた…宝物。」

窃盗品のほとんどが流れ込んでくる、別名野犬の京、カトリーナ。

ミハエルが入った棺には丁寧に宝物箱が用意されていたが、中は空っぽだった。大きな輪のようなものが埋め込まれた跡があり何かがそこに収まっていたことは明白であつたため、カイザが掘り起こした時、既に墓は荒らされていたと考えたのだ。その奪われた何かを取り戻すために、カイザはカトリーナへ向かっていた。

二人が出会いて一ヶ月経つか経たないかの頃。カイザはミハエルといつものように森の中にある墓場で会っていた。

「ミハエルはどこに住んでるの？」

会いに来ているからこそ、疑問に思つたことをそのままに聞いてみた。

「…」からすぐ、ノースに家はあるわ。」

ノースは墓場からも近い、小さな田舎町だ。

「そつか…俺は今ハウルに宿をとつてる。」

その頃、カイザが属する盗賊団はノースのすぐ隣の町にいた。それもあって二人は出会ったわけだが、カイザは盗賊団の移動と共に町を離れなければならない。この時、彼はミハエルが自分を止めてくれることを望んでいた。

「そう、すぐ隣ね。」

彼女は雑草を抜きながらカイザに微笑みかけた。

「いつでも遊びにいらつしやい…とは言つても、遊べるものなんて家にはないけれど、手料理くらいなら」馳走するわ。」

期待していた言葉ではなかつたが、嬉しかつた。盗賊団ではろくな食事も与えて貰えず、いつも市場の品を盗んではひつそりと1人で食事していたからだ。そして、彼女の近くにいけると思うと心が弾んだ。

「ぜ、絶対な！」

「ええ、あまりいいものは出せないけれど、精一杯もてなすわ。カイザは私の大事な友人だもの。」

彼女の言葉に、カイザの頬も緩む。秋も盛りの、木枯らしが吹く墓地で。

「一泊で頼む。」

山を出てすぐに位置する寂れた田舎町にカイザはいた。一日歩き通してその日は宿をとることにしたのだ。

「…お姉さん、その背負つているのは？」

死体だ。葬儀する場所まで運ばなければならぬ。

宿の主人は怪訝な顔をしてカイザの背中におぶさるそれを見つめた。

な。」

しかし、他に宿はない

「町外れの西瓜畑にある。そこならきっと受け入れてくれるだろう

「…わかつた。」

カイザがその場を去りうつとすると、店主は右手を差し出して

七
一〇

「お客さん、情報料は1000ペルーだ。」

ニヤニヤと笑う店主を、彼は睨んだ。

「こは情報屋の町アイダだぜ？モノを聞いたらそれに見合ったペ
ルーを払わないこと…」

「情報屋の町…ここがか?」「
はい、2000ペルー。」

カイザはカウンターを叩いて店主と真っ正面に向かい合つ。

「…町の話はあんたが勝手に話しだけだ。」

「そうだ。」

「だつたらペルーを払う必要はないだろ?」

「違う違う。アイダについての情報はサービスだよ、お密さん。」

店主は睨むカイザに顔を寄せて、囁いた。

「聞きたいこと、あるんだろ?」

「…」

「そんな顔してるぜ?探し物してますって顔。」

店主はカイザをカモにするつもりらしい。彼もそれをわかっていた。暫く睨みつけた後、カイザは一万ペルーをカウンターに叩きつけた。

「釣りはいらない。」

「…毎度あり。」

真っ暗な町でポツンと佇む一軒の酒場。中は狭く、カウンターの席が10席程しかない。そこで、1人の男が店のマスターと話をしながら酒を飲んでいた。

「…いらっしゃい。旅の方?」

店のベルが鳴り、マスターが挨拶をした。男はマスターの視線を辿つて入口を見た。

「久しぶりだな、フィオール。」

男は入口に立つカイザを見て酒を吹き出した。

「あれ、二人はお知り合い？」

マスターが二人を交互に見つめた。フィオールはカイザに背を向け、げほげほと咳き込む。カイザはフィオールの一いつ隣の席に座り、酒を注文した。

「…呑気に酒なんて飲んでる場合かよ。盗賊団のお尋ね者が。」

フィオールはマスターの背中を気にしながらヒソヒソと話す。カイザは彼に少し肩を寄せて、鼻で笑った。

「やつぱり、既に話は回っていたか。」

「やばいぞ…バンティが残党束ねてお前を探している。俺が身を置けるところを紹介してやるから、さっさと逃げろ。」

「そんなことはどうでもいい。聞きたいことがある。」

マスターがカイザの目の前に酒を置いた。

「クロムウェル家に、こいつが埋められていた。」

カイザは自分とフィオールの間の席にミハエルを座らせ、布をとった。フィオールは何がなんだかわかつておらず、彼女をまじまじと見つめている。

「…人形、か？見事だな。」

「…死体だ。」

「死体なわけあるか！あの墓は5年前に建てられたんだぞ。死体だつたら今頃腐つて…」

カイザはミハエルの手を取り、フィオールの頬を撫でた。フィオールは驚いた顔をして固まってしまった。

「…人の、感触。」

フィオールは撫でられた頬を触りながら、グラスに視線を落とす。

「俺の前に墓を暴いた奴がいる。そいつを追っているんだ。」

カイザは酒を一口飲んで、煙草に火をつけた。

「知らないか？」

「…悪いが、知らない。それに、お前も知つての通り俺はお前が殺した男とマザー・クリストフ専属の情報屋だ。おいそれとネタを垂れ流すことはできない。」

フィオールは眉を寄せてグラスを手にした。この男とカイザは盗賊團にいた頃より仲が良かつた。フィオールが盗賊團に顔を出しに来る度、カイザに土産を渡していたのだ。何故、自分によくしてくれていたかはカイザ自身わかつていなかつたが。

「…お前が頼りなんだ、なんでもいい。クロムウェル家に関することを教えてくれ。」

「だから、駄目だ。」

「金なら幾らでも払う。」

「そういう問題じゃねえんだよ。」

悔しそうに俯くカイザを見て、フィオールは小さく溜息をついた。

「…そんなに知りたいなら、マザーから聞いたりだ。」

「マザー・クリストフ。鉱山を牛耳る山賊の頭。カイザが属していた盗賊団と並ぶ勢力を持つ。マスターが死に際に口にしていた名前だ。」

「…クロムウェル家について、何が知っているのか?」

「少なくとも俺の情報は余すことなく盗賊と山賊に提供してきた。お前の殺したマスターと、鉱山のマザーにな。」

「じゃあ、もしかしたら墓を暴いたやつのことかも…」

「ああ、知っているかもしれない。」

カイザは勢いよく立ち上がり、ミハエルを抱きかかえる。そんな彼をフィオールは心配そうに見つめていた。

「おい、本気で…マザーのところへ行くのか。」

「当たり前だろ。」

カイザは煙草をねじ消し、ペルーをテーブルに置いた。

「マザーの話を出しておいてこんなことを言つのもなんだが、お前は今追われる身なんだ。鉱山に行つても無事でいられるか…」

「…その時は、その時だ。」

カイザは踵を翻し、戸に手をかけた。

「お客さん、」

ベルが小さく音をたてる。カイザが振り返ると、マスターがグラスを洗いながら言った。

「私からも一つ、ひとつおきの情報がござります。」

「…いくらだ。」

カイザは一先ず戸を開めて、マスターに向き直った。

「お代は結構。なんの根拠もない、昔話ですか？」

マスターはエプロンで手を拭いて、カイザを見た。薄暗く、蠅燭の灯りが揺らめく店内。マスターは、ゆっくりと口を開いた。

「4人の美女が神の寵愛を受け、使徒より世にも奇妙な贈り物を賜る。と、いう伝説なんですがね。」

「…聞いたことがある。使徒とは4人の精霊のことだろう。」

マスターは天井の角を見つめて、霸氣なく話を続ける。

「この話は東の国よりやつてきた一人の旅人が伝承したと言われています。その伝承の中に、神の寵愛を受けた者の一人に贈られたのは、死しても腐らず、永遠にその姿を留めることができるものだと、いつ話があるのですよ。」

ミハエルを抱きかかる腕に、力が入る。フィオールはまた

咳き込んでいた。

「嫉妬に狂う女神の目をかいぐるため、その者たちは男の名前を冠するそうで。北の魔女ダンテ、東の女王ヤヒコ、南の聖母クリストフ、そして…」

クロムウェル家の墓でミハエルを掘り起した夜を、カイザは思い出していた。満月に照らされる墓石に刻まれた、知らない男の名前。

「西の巫女、エドガー。」

「…」

カイザは微動だにせず、真っ直ぐにマスターを見つめる。静かな店内で、カイザの心臓だけは大きく鼓動していた。まさか、まさかミハエルが…

「な、なあ…」

フィオールが恐る恐る、固まっているカイザに話しかけた。

「その死体、名前は？」

「…」

フィオールは仮にも情報屋。ミハエルの事を話したとしてどこへ繋がっていくかわからない。クロムウェル家に彼女を連れ出したことを知られるのも、まずい気がした。

「…彼女の名前はミハエルだ。じゃあ、失礼する。」

ベルが鳴り響き、カイザは店から去つて行つた。店内に残された二人は何を話すわけでもない。ただ、先程目の前にした死体について、考えていた。

「…マスター、どう思つ。」

フィオールは酒を一口飲んで、マスターに問いかけた。マスターは煙草に火をつけ、怪しげに笑う。

「ありやあ、十中八九、エドガーですよ。」

「でもあいつはミハエルだと言つていたじゃないか。」

「あの男性の顔、私の話に心当たりがあるようでしたよ？ミハエルと言つ名前はハッタリで、墓石にはきっとエドガーと書かれていたんでしょう。」

マスターは煙を吐きながら、クックッと喉元で笑つた。フィオールには何が面白いのかさっぱりわからない。

「クロムウェル家の墓に、エドガーがねえ。こりやあ近々、大きな嵐がくるやもしれません。」

「…その伝承について、詳しく教えてくれないか。」

フィオールは身体を乗り出し、マスターに真剣な眼差しを向ける。

「東襖神話ですか？今じゃ殆ど知つている人もいない寂れた民間伝承だ。知つたところで…」

「頼む。」

フィオールもまた、決意していた。クロムウェル家から誘拐

された盗賊力イザ、彼のものと思われた墓に埋められていた謎の美女。情報屋の自分でも知らない、未知の世界がそこに広がっているような気がしてならなかつたのだ。これを追わずして、アイダ一の情報屋は語れ無い。それに…

「…あなたもお人好しだ。あの男性がそんなに心配ですか。」

マスターはカウンターを出て、店の前に出してある看板を下げた。

「あいつがどう思つているかは知らねえが…俺にどつては弟みたいなもんなんだよ。」

フィオールはふつと小さく鼻で笑い、酒を煽る。マスターは酒瓶片手にフィオールの隣に座つた。

「店終いもしましたし、ゆづくりお聞かせしましょうかねえ。」

「…ありがと。」

「ただし、ここからは有料。この情報は高くつきますよ?」

マスターがそう言つと、フィオールは鞄から札束を取り出し、カウンターに置いた。

「釣りはいらねえ。」

夜は更けた。音楽一つ流れない煙たいカウンターで一人は视线を交え、堪らずに笑いだした。

「…毎度。」

思い出といつ枕で恋といつ夢を見る

それは2人が出会つてから一年経つた日の事。

「…あら、今日は遅かったじゃない、」

夜空を見上げるミハエルが、森から現れたカイザに気が付いた。カイザは何やら浮かない顔をしている。

「どうかしたの？」

ミハエルはカイザに歩み寄り、田の前にしゃがんだ。

「…今日、ハウルの街を出る。」

カイザは俯いたまま、ボソリと呟いた。ミハエルが彼の手を握ると、彼はポロポロと静かに涙を流した。

「…寂しくなるわね。」

「ミハエル…俺に、ミハエルの死を見守らせでよ。」

「…」

「俺も墓守になりたいんだよ。お願い。」

「こんな事を言つても…

「駄目よ。」

と、断られるわとわかつていた。カイザは嗚咽して彼女に抱き

ついた。彼女も優しく、彼を両腕で包み込む。

「あなたはもつと光で溢れたところに住みなさい。沢山の仲間に囲まれて、笑顔と、優しさに満たされて…」

「盗賊の俺が光で溢れるとこになんか行けないよー。」ミハエルがいれば、もう何もいらないのに…」

彼女は身体を離して両手で顔を覆つて泣く彼をじっと見つめた。

「行けるわ、あなたは。カイザ、」

「…行きたくないよ、ミハエルが、いないのなら…」

聞き分けの悪いことは自覚していた。彼女を困らせてしまうこと。それでも、溢れる涙は止まらないのだ。

ミハエルはネックレスを外してカイザの首にかけた。カイザがそれに気付いて顔を上げると、彼女はいつものように微笑んでいた。

「…」

「…」

「でも、これ大事な鍵だつて言つてたじやないか。」

カイザは我儘を言い過ぎたかと後悔し始めた。ミハエルは目を細くして鍵を握り締めた。

「実はね、もう一つ鍵は存在するの。私の家に大事に保管してあるわ。これからは、このお揃いの鍵が私とあなたを繋ぐ絆になる。」

「…絆？」

「そうよ。だから、いつか必ずまた会える。私達は繋がっているの

だから。」

カイザは唇を噛み締めてミハエルを見つめた。彼女はにっこり笑つて、鍵からスルリと手を離す。

「…カイザ？ どんなに離れても、時を経ても、私はあなたを愛してる。」

カイザは驚いた。

「あなたは、一人じゃないからね？」

優しい笑顔を浮かべるミハエルの頬を、煌めく雲が伝つていたから。

カイザは再び彼女に抱きついて泣いた。彼女も、彼をきつく抱きしめた。

自分も愛している、と、言葉にできないままに、夜の墓地で出会った二人は夜の墓地で別れたのだ。またいつか、必ず会おうと約束をして。

カイザはアイダの町を出てカトリーへ向かっていた。マザー・クリストフがいるリノア鉱山はカトリーへより遙か東南に位置する。行きしなに立ち寄り、盗まれた宝物を探そうというのだ。宝物を見つけられなかつたとしても、食料も底を尽きかけている。カトリーへに寄りあがるを得なかつた。

ミハエルを連れ出して約二週間。当たり前だが、彼女は一度たりとも目を覚まさない。食事もしない。一緒にいればいる程、力

イザはその背中の重みをもつて彼女の死をひしひしと感じていた。彼女の声も、笑顔も、温もりも、思い出になってしまったことは悲しい。しかし彼の心は仄かに満たされていた。彼女がいる、それだけで。もしかしたら、彼女が腐り果てていっても彼は彼女を抱きしめて離さなかつたかもしれない。彼女の墓を暴くという約束、いつか必ず再会しようという約束。考えていたものとは違っていても、全てがあの夜に果たされたのだから。

そんな彼の中で一抹の不安が頭を過る。酒場で聞いた美女の伝説のことだ。もし本当なら、ミハエルは神の寵愛を受けた一人だということになる。

——私はあなたを愛してる……

あの言葉を神とやらにも囁いていたのかと思うと、腑が煮え繰り返りそうになる。カイザは考えるのを止めた。そんな昔話の真偽など、気にしたところで確かめようもないと思ったからだ。

不安と喜びが入り混じる道中を、彼は目的のため一向に歩き続けていた。そんな時……

「ちょっと待ちなー！そこの若造！」

見渡す限り灰色の岩が転がる傾斜の激しい山道で、カイザは呼び止められた。振り返ると、そこには一人の少女がいた。艶やかな褐色の肌に生意気そうに釣り上がる黄金色の瞳の目。ミハエルの柔らかな黒髪とは違う印象を持つ、肩まで伸びた芯の強い漆黒の髪。

「…どう見ても、お前の方が若そうだが？」

「山賊に出てくわして悲鳴も上げないなんて、生意気なガキだな。」

少女は不機嫌そうにカイザを睨む。

「そりゃ、その装束：鉱山の。」

「そりゃ、あたしはマザー・クリストフ率いる山賊の一昧！第一区監査官ローザだ！」

金のプレスレットに金の首飾り。南国を思わせる衣服が褐色の肌によく映える。

「その背中にしようってんのは死体だろ？だつたら一緒に埋める供え物も持つてるだろ？命が惜しけりやさつと渡しな。」

「悪いが、そんなものはない。ついでに、お前に構っている暇もない。」

カイザはローザと名乗る少女に背を向けた。

「宝物の有無はあたしが確かめるんだ。お前に選択の余地などない。」

「

背を向けたはづが、何時の間にか少女は目の前で刃物をカイザに突き付けている。鉱山の監査官の名も、だてではないらしい。カイザは大きく飛躍して後退し、ミハエルを降ろした。そして、ナイフを手にする。

「お？ やる気か小僧ー。」

「用があるのはマザー・クリストフだけだ。用のない奴は邪魔なだけだからな。」

ローザは不思議そうな顔をした。

「マザーに用事？死体運びのお前が？」

「話す義理はない。」

「一味のあたしに何かあれば、マザーも黙つてないぞ?」「バレなければいい話だ、バレなければ。」

カイザは一瞬で終わらすつもりだった。しかし、

「ローザさん…ここにいたんですか!」

振り返ると、男が数人、息を切らしながら立っていた。そのうち先頭に立つ一人の男はローザと同じ装束、同じ黒髪、同じ瞳をしていた。

「ガトー、こいつ狩るぞ。」

加勢…カイザは舌打ちをしてナイフをしまい、ミハエルを抱き起こした。

「あ、待て!」

カイザが逃げると、ローザは後を追いかけてきた。

少女一人ならまだしも、多勢を相手にして一人でも始末し損ねればマザーとの対面も叶わなくなる。面倒を起こすわけにはいかなかつた。

「待てって言つてるだろ!」

背後からローザに蹴り飛ばされ、カイザはつんのめる。転倒したが、身を呈してミハエルを庇つた。刃物をクルクルと回しながらローザが一人に歩み寄る。

「そんなに大事か、その死体。」

「…」

カイザは再びナイフを構えた。

「そんな大事な死体ならさぞかし価値のあるお宝が…」

ローザは、歩み寄る足を止めた。表情も固まり、一点を凝視している。カイザはその様子に気付いた。

「…お前、そのナイフ。」

ローザはゆっくりと、一步踏み出した。

「ローザさん！」

追いつかれた。もう、やるしかない。カイザはナイフを握り、ローザを睨んだ。

「大丈夫ですか？」

「こいつは俺たちが始末しておきますから、ガトースさんと先に…」

「いや、いい。」

ローザは刃物をしまい、カイザの目の前にビックリと胡座をかいだ。カイザはミハエルをきつく抱き寄せ、ナイフをローザに向けた。ローザは、真っ直ぐにカイザを見据える。

「お前、ギールんとの盗賊だな？」

カイザはその言葉にはっとして自分が握るナイフに目をやった。

た。ギールとは、カイザが殺したマスターの名だ。そして、このナイフは…

「それ、ギールのナイフだよな。」

盗賊になつて数年経つた頃にマスターから譲り受けたものだつた。

「…

「ふーん、そういうこと。」

一人で何か納得している少女をよそに、カイザはナイフを見つめていた。鋭く輝く鉛色の刃、盗賊団の象徴であつた鷹の刺繡が施された柄に埋め込まれた、黒光りする宝玉。このナイフがなんだというのだ… そう言わんばかりに彼の表情は疑問に満ちていた。

「…お前、カイザか。」

カイザは名前を呼ばれ、ローザを見た。先程までの幼さはどこへやら、異様な威圧感を発しながら彼を見つめている。

「カイザって…ギールを殺した？！」
「バンディが探してるっていう…」

話を聞いていた男達が武器を手にしてカイザを睨む。

「やめてください…ほら、しまつて！」

ガトーがおりおりと宥めようとす。

「やめんなさい。」

ローザの一言で、男達は硬直して顔を見合せた。そして次々武器をしまった。

「…確かに前、マザーに用があるんだつたな。あたしが謁見を取り持つてやるよ。」

ローザはそう言つてニヤリと笑つた。カイザはまだ、ナイフを突き付けていた。

「…何を考えている。」

カイザの問いかけにローザは答えようつとしない。ローザは振り返つて男達に言つた。

「こいつには手を出すなよ。」ことによつちやあマザーがヒステリー起こすかもしれないからな。」

ローザは立ち上がり、カイザに手を差し伸べた。

「ほら、行こう。リノアへ向かってるんだろう？」

「…」

カイザは少し眉を寄せてナイフをしまい、ローザの手をとつた。小さくまだ幼さが残る手をした少女だが、山賊の中ではかなりの有権者 のようだ。少女が何を思つて刃を収めたのかはわからないが…目的のために敵にするより、味方にした方が得策だと考えた。

「そういうことだ、お前ら、わかつたな？」

ガトーという男以外は何やら不満そうだ。”そういうことだ”と言わても、その場にいた何人が話を理解できただろう。いや、少女以外何一つ流れを掴めずにいた。

盗賊に追われる身の、死体を背負った一人の男。何かを知っている風な、山賊幹部の少女。

「改めまして……だな、あたしはローザ。」

少女は顎をツンと上に向けて見下すように生意氣な笑顔を浮かべた。

「…カイザだ。」

カイザは視線を外して小さく挨拶をした。まだ、この少女を信用できないようだ。

「さて…その死体は何処に運ぶんだ？さつさと荷をおろしてリノアへ行くぞ。」

ローザがミハエルをじっと見つめる。カイザは思わず彼女を背中に隠した。

「ミ…彼女は…リノアの向こうの…」

「は？！リノアの向こう？…こんな真夏にか？！」

ローザは驚いた顔をして声を荒げた。

「お前…殺した人間をせめて故郷に戻してやりたいってんだろうが…それは幾らなんでも無理だろ。腐っちゃう。」

「別に、俺が殺したわけじゃない。」

「そういうえば、彼女は何故死んだのだろう……ミハエルを背負いながら、カイザはふと疑問に思った。

「そういう問題じゃなくてだな……ったく、おい、誰か背負つの代わつてやれ。」

「いや、いい。」

「なんで。」

ローザは既に面倒くさそうだ。

なんと言えばいいのか、カイザは必死に考えていた。彼女を誰にも触らせたくない、なんて言えない。

「…」

気が付くと、ローザが布からはみ出たミハエルの腕を見つめている。カイザは慌ててそれを隠した。

「…それに、同行は不要だ。俺はカトリーナにも用がある。先にリノアへ行ってマザーに俺の事を伝えておいてくれないか？」

「カトリーナって、お前、本当に腐っちゃうぞ、”それ”。」

腐らないから大丈夫、とも言えない。言葉を詰まらせる彼に、ローザはすっかり飽きれ果てている。

「我儘な奴だな…わかつたよ。カトリーナに寄ればいい。だが、あたしとガトーも同行する。」

「いや、それは…」

「勘違いするなよ。」

ローザがきつく手を吊り上げて、ずいっとカイザに顔を近付けた。カイザは驚いて軽く身を引いてしまう。

「別に仲良しこよししようつてわけじゃない。盜賊共はお前の首に多額の賞金をかけてる。リノアでマザーが手土産の封を開けた時、お前の運命は決まるんだ。」

ローザがカイザの胸元に人差し指を突き立てる。

「…手土産か、俺が。」

「そうだ。つまり、あたしとガトーはお前がちゃんとリノアへ行きつくように見張るんだよ。せっかく獲た手土産が逃げたり、とつて食われたりしたら癪だからな。」

ローザに釘を刺され、カイザは笑った。

「だつたら最初からそいつ言えよ。」

「…？」

ローザはカイザを睨む。

「そう言われた方が、まだお前を信用できる。」

何を考えているかわからない無償の善意より、利を優先した悪意で人を測る。カイザはそういう場所で生きてきた。そんな彼にとって、今背負っている彼女は夢の中の存在に近い。彼女以外が彼の現実であり、それは悪意の駆け引きで成り立っているのだ。

「…寂しい奴だな、お前。」

ローザの哀れんだ瞳にカイザは全く気付かない。いや、興味を示さない。彼はミハエルを掘り起こしたその瞬間から、夢の為だけに現実を生きると決意していたのだ。死ぬまでの束の間を、彼女の為だけに。

傍観者である少女はまだ何も語らない

「いい加減、話したりじりじりだ。」

カトリーの宿屋の一室で、不機嫌そうに机に頬杖をつぐローザ。ローザはと黙り、ミハエルに白い布を被せて出かける準備をしていた。

「カトリーに着いてもう5日だといつて……腐りもしない、臭いもしない。」

「…」

「田覚める」ともないのに、硬直もしていない。」

カイザの手がピクリと止まる。ローザは口を尖らせて窓の外を見下ろしていた。

「…触ったのか、ミハエルに。」

「ミハエルっていうのか、その女。」

カイザもわかつていた。いつまでも隠し通せるわけがない、と。

「…お前には話さない。」

「マザーには話すのか。」

カイザはミハエルを背負い、立ち上がる。窓際のローザを横目に見て、言った。

「お前こそ、なんのつもつだ。」

ローザは煙管を取り出して机に広げて、カイザには目もくれない。

「思えば、マザーへの手土産にしたいのなら力強くでも連れていくばよかつただろ。」

「だーかーらー、勘違いすんなつて。」

朝の日差しが差し込む六畳程の狭い部屋。外からは賑やかな市のぞわめきが聞こえてくる。

「お前の遭遇はマザーが決める。お前がマザーに気に入られた時のために保険だ、保険。」

「噂じや、マザーは高慢知口な金の亡者らしきじゃないか。だつたら気に入られる心配なんて、する必要はなさそうだけどな。」

ローザは首だけで振り向き、カイザを睨んだ。そして、はあ、と疲弊感漂う溜息をついた。

「余ったこともないくせに、よく言ひづ。」

ローザは煙管に火を焚き、大きく煙を吸い上げた。

「聞いた話を鵜呑みにするより、自分の目で見て物事を見極めろ。お前はどうも耳や頭に頼り切っているようだ。」

「…わかった風な口をきくな。」

カイザはローザに背を向け、部屋を出た。

「…ここまでカトリーナに留まるおつもりですか？」

「あいつの気が済むまでだ。」

ローザは外に向かつて煙を吐いた。窓の外では煙を払う手がパタパタと動く。

「死体のこと、調べておきましょうか。」「いや、いい。」

窓から灰皿を持つ手が伸びる。ローザはそれに煙管を軽く叩きつけた。

「手土産の封を切るのは、マザーの奥宮に入つてからでも遅くないだろ。それよりあいつのこと、見張つておけよ?」「はい。」

窓から顔を出し、ガトーは軽く頭を下げた。そして、机に灰皿を置いて屋根伝いに去つて行つた。

「…腐らないなら、急ぐ必要もないわけだ。」

ローザは一人、晴れ渡る空へ消えゆく煙を見つめながら笑つた。

「…なあ、エドガー。」

煙は窓枠をするする抜けて、立ち昇る。

「クロムウール家の墓から掘り出された一品?」

「そうだ、ここへ流れてないか。」

ざわめく市場から外れた、日当たらない細い路地。ひんやりとした空気が石の壁をさらて冷たくする。

「そんなもん流れてきたら噂にもなるだろ。他所からも買い手が力トリーに集まって、即日売だらうけだな。」

「… そうか。」

怪しげな硝子瓶を棚に並べる店主は、カイザの背負つミハエルに目をやった。

「なあ、死体運んでんのか兄ちゃん。」

「だつたらよ、セヒの角曲がつたところにある薬屋に行きな。」

「…」

「髪やなんかが高値で売れるぞ?」

カイザは返事もせずに、店を出た。こじはそういう場所だ。誰かの物を売つて、金にする。日に映る商品の陰には、必ず泣いている者がいる。活気ある華やかなこの街は、誰かの涙なくして存在できない。ミハエルを背負つ今になつて、カイザはこの街が憎たらしくて仕方ない。思い出すら金に変わるこの街で、自分が幾度となく金を手にした過去も、情けなくて仕方ない。炎天下の市場も、涼しい路地裏も… 何処にいても、不愉快だった。

「予定変更です。」

俯く顔をあげると、目の前にガトーがいた。

「…お前、今まで何処にいたんだ。」

「俺の事は気にならさらないでください。用事は済みましたか？」

ローザと同じ黄金色の瞳がカイザを見つめる。容姿は似ているが、ガトーは物腰柔らかな青年だ。

「…そうだな。済んだよ。」

これだけ粘つても見つからないのなら、売りに出されていいのだろうと、カイザは見切りをつけた。

「そうですか、では…」

ガトーはカイザの腕を掴み、走り出した。人混みを勢いよく縫つて駆け抜ける一人。

「な、なんだよ…」

ガトーは何も答えない。気が付くと、カトリーナの門まで来ていた。そこには馬に乗るローザがいた。

「急げ！」

「どうしたんだよ…」

ローザは馬から飛び降りてカイザからミハエルを強引に引き剥がした。

「なつ……」

「捨てたりしねえよ！お前はガトーの後ろに乗れ！」

ローザはミハエルを自分の前に跨らせ、身体を紐で縛り付け
る。

「早くしろ！」

「…絶対に落とすなよ。」

カイザは言われるがまま渋々ガトーの後ろに乗った。そして、
3人…いや4人は慌ただしくカトリー・ナを出発した。

「ローザさん、死体なら俺が…」

岩山を駆け抜けながら、ガトーが申し訳なさそうに言った。

「いいんだよ。カイザだって、男のお前より女のあたしの方が安心
だらうよ。」

ローザの言葉に、カイザの身体が一気に熱を帯びた。弁解し
ようとしたが、不敵に笑うローザを見て、言葉は引っ込んでしまう。

「…それより、何があつたんだよ。」

耳まで広がる熱をそのままに、カイザは話を変えた。いや、
これこそ本題だったわけだが。ローザは真剣な面持ちで前に向き直
った。

「バンディがカトリー・ナに来たそ�だ。」

「まさか、俺のことを追つて…？」

「…あつてるようがあつてないような。」
「なんだよ、それ。」

カイザは腑に落ちない様子でローザを見つめるが、少女は真っ直ぐに前を見据えたまま。

寝る前も惜しんで馬を走らせ、約5田。炎天下の中、四人はリノア鉱山へ辿り着いた。山間から高々と伸びる煙突からは黒い煙が立ち上り、空は灰色に染まっている。巨大な鉄の門の前で、四人は馬から降りた。

「ほりよ、」

ローザはカイザにミハエルを手渡す。カイザは彼女を受け取り、門を見上げた。

「…でかいな。」

「国一番の山賊が牛耳る発掘場だからな。中も城の要塞みたいなもんだ。」

見上げていると、門が重々しい音をたてながらゆっくりと開き始めた。

「ようこそ、リノア鉱山へ。」

この時、カイザは初めて少女を恐ろしいと思った。開こうとする門の前でこちらを振り返り、黄金色の目でこちらを見据えて笑いかけるローザ。黒い山を背負つ少女と、死体を背負う自分の差を思い知ってしまった。少女の言つとおり、彼は自分の目で事を見極

め、恐怖したのだ。

「何度言わせるんだー！」に死体運びの男が来る！俺はそいつの知り合いだ！

聞き覚えのある声に、カイザはやつと門の中へ目を向いた。ローザも眉をひそめて声の方を見る。

「どうかしましたか？」

ガトーが声を聞きつけ、歩み寄る。

「あー、ガトーー！お前じやねえと話にならねえよー！なんとか言つてくれー！」

門が開きると、中の様子がよく見えた。発掘した鉱石を運ぶための馬小屋に、トロッコ。その少し向こうに並ぶ平屋の黒い屋敷と白い屋敷、その向こうにそびえるリノア鉱山。そして、門番に足止めされている見覚えある後姿。

「… フィオール？」

カイザが近付くと、後姿の主は勢いよく振り向いた。

「カイザ！ほら、こいつだよー！」

フィオールはカイザのウヂを掴んで引き寄せ、門番に訴えかける。

「相変わらず騒がしいな。」

ローザがうんざりした顔をしながらフィオールに言った。

「ローザ！お前からも頼んでくれないか！カイザと俺を、マザー・クリストフに会わせてくれって！」

フィオールの言葉に皆が驚いた顔をする。

「ふざけるな！マザーがいらっしゃる白の屋敷は男子禁制だ！」

「それ以前に、マザーの御姿を見ることは何人たりとも許されない！」

門番の二人がフィオールに喰いかかる。しかし、フィオールは引き下がらない。

「俺はローザに頼んでんだ！てめえらはすつこんでろ！」

フィオールはローザに向き直り、細い肩を力強く掴んだ。

「頼む！ローザ！」

真剣な眼差しでローザに向けるフィオール。少女の肩を掴む手は、微かに震えていた。カイザはそれを呆然として見ていた。何故、彼がここにいるのか。何故、こんなにも必死なのか。わからなかつたからだ。

ミハエルの死因、クロムウェル家の墓に入っていた理由、盗まれた宝物の行方、エドガーの謎：積る疑問が一つ解消されないまま、何かが大きくうねりながら動いている気がした。そして、自分がそのうねりに取り残されているような。

「……こいだらう。お前ら一人、マザーハ会わせてやる。」

「ローザ！」

門番がローザを怒鳴りつけた。

「勝手にそんな口約束をするなー。いくらお前が監査官でも許されない。こんな下賤な奴らを謁見させるなんて、マザーへの侮辱だ！」

「黙れ！」

ローザが門番の胸倉を掴んで捻り上げた。少女とは思えない剣幕と、腕力。カイザとフイオールは驚きのあまり声が出ない。

「お前にこいつらの何がわかる。」

首が締まり、苦しそうにする門番。

「ローザさん、そのくらいで…」

ガトーに止められ、ローザは不満気に門番を離した。門番はその場に蹲り、ゲホゲホと咳き込んだ。

「…まあ、あたしもよくわからないんだけどな。」

片眉を吊り上げて門番を見下ろし、ローザは白い屋敷に向かって歩き出した。

「ガトー、とりあえずあたしはマザーのところに行へから後はようじぐ。」

白い屋敷へ向かって去つてゆく少女。彼女が何故自分をマザ

ーと会わせようとしてくれるのか、マザー・クリストフとは何者なのか…少女の背中は、何も語らない。

善意と悪意の計りは壊れやすい

東の国からやつてきた一人の旅人がいた。彼は諸国行脚し、伝説を語り広めた。雲の上にて気まぐれに開かれる宴に男の名を冠する四人の美女が招かれた、と。

北の魔女ダンテ、煙の塔に住まうその愛らしさをもつて神の酌子を担う。溢れる愛が目に見えるようにと、心が見える目を授かる。

東の女王ヤヒコ、国を統べるその知力をもつて神の声を聞く。穏やかな愛の囁きが聞こえるようにと、未来を聴く耳を授かる。

南の聖母クリストフ、人々に畏れられるその力をもつて神と快樂を共有する。激しい愛をその身で感じられるようにと、思いのままに動く手足を授かる。

西の巫女エドガー、俗世を捨てたその清き美しさをもつて神に癒しを与える。切ない愛をその心に留めておけるようにと、永遠に朽ちぬ身体を授かる。

地上へ降りる際、四人はそれぞれ鍵を賜る。その鍵は天の宴を開く。そして、四人に一つの鍵を賜る。それは美女達のために神が用意した一室へ繋がっている。

純粹なダンテが開けば思い描くものを湧き出す泉がある部屋へ出る。気高きヤヒコが開けば世界の真実を語る花が咲く部屋へ出る。寛大なクリストフが開けば富を絶やさぬ宝石が眠る部屋へ出る。

しかし、謙虚なエドガーの望みだけは神であれど察することができず、望みに叶う部屋を用意できなかつた。そこで、望みができた時いつでもそれを手にできるよう、彼女の部屋には望みを一つだけ叶える木が植えられた。

美女の一人が死せる時、鍵を巡りて世は乱れる。世界の秩序は崩壊し、終結したらば裏と表が一つに溶け合つ。

伝説を語る旅人は正体も明らかにならぬままに行方をくらました。

「…」これが、伝説の内容だ。」

黒い石造りの客室で、フィオールが資料を読み明かした。力イザは目を泳がせている。

窓際で茶を飲みながら二人は向かい合つ。

「俺が何でここへ来たのか、だけどな…」

フィオールは資料をテーブルに置いて茶が入ったカップを手にした。

「マザーが伝説のクリストフなのかを確かめるためだ。」「マザーが？」

アイダの酒場で聞いた伝説にクリストフの名があつたことにカイザは気付いていた。しかし、それがリノア鉱山のマザーであるとは心中にも思つていなかつた。伝説自体、信じきれずにいたのだから当然と言えば当然だ。そんな困惑しているカイザに、フィオールはカップを見つめたまま頷いた。

「80歳の婆さんで、醜い金の亡者だつて聞いたぞ。美女だなんて

話は…」

「噂だろ。俺達は実際に見たわけじゃない。この世で彼女の姿を目にしたことがあるのは、お前が一緒にいた二人だけなんだからな。」

「…ローザとガトーカ。」

「それより、お前が背負つてた死体…エドガーなんだろ。」

伝説が本当なら、きっとミハエルはそのエドガーという人物にあたるのだろう。腐らない身体、墓石の名前、思い出の鍵…怖いくらいに当たる。それでもまだ信じられずにいたのは、本当は信じたくなかったからなのだ。ミハエルが誰かに愛され、それに応えていたなんて。引っ掛かっていた不安が、現実としてカイザに迫りつつしていた。カイザは、口を一文字にして黙り込んでしまう。

「…答えられない、か。」

答えたくなかっただけだ。カイザはアイダ一の情報屋フィオールが提示する情報から、田を背けた。

「まあいい。マザーと話せば全て明らかになるはずだ。」

「…でも、何で根拠もない昔話のことなんて調べてるんだよ。」

「…」

フィオールは再び俯いた。

「…まさか、ミハエルを見てエドガーだと確信したから…鍵を狙つてんのか？」

カイザの言葉に、フィオールは顔を上げた。カイザは眉をひそめて睨みつけている。

「望みを一つだけ叶える木がある部屋に繋がる鍵…それ、狙つてんのか。」

「違う!」

フィオールは声を荒げてテーブルを叩いた。カイザは表情も変えずに、睨んだまま。フィオールは握った拳を震わせて、舌打ちをした。

「鍵には興味ない。ただ…」

フィオールは寝床に横たわるミハエルを見た。遠くから見れば、ますます眠っているようにしか見えない、安らかな寝顔。カイザの疑いの眼差しに、フィオールは悲しそうな顔をして俯いた。

「…お前のためだ。」

フィオールは額を抑えて溜息をついた。

「ギール…お前のマスターにも頼まれてたんだ。カイザに何かあつたら、力になるよつに。」

フィオールの手は、やはり震えている。カイザは彼の気持ちがわからない。いや、これまでも他人の気持ちを知ろうとしたことなどない。唯一、理解したいと思えた相手がミハエルだった。幼少から仲良くしていったとはいえ、カイザにとってフィオールは盗賊の一団となんら変わりない、悪意の駆け引き相手でしかなかった。フ

「お前が盗賊に追われているくらいなら、別によかった。身を隠す

「…俺には、弟がいたんだ。」

震えが止み、声は落ち着きを取り戻す。

「賢くて、素直ないい弟だつたよ。」

「…死んだ、のか。」

人の気持ちに鈍感なカイザだが、痛みには敏感だ。俯くフィオールを見つめる最中、脳裏を疑いと哀れみが交差する。

「殺された。俺に恨みを持つ奴に目をつけられたらしくてな…」

フィオールは涙目で薄く笑つた。

「無力な自分を憎んだよ。第一人守れない…そんな俺に、ギールは言つたのさ。クロムウェル家からさらつてきた餓鬼に、よくしてやつてくれ、つてな。盗賊のボスに言われて仕方なしに会つてみれば…死んだ弟と同い年の生意氣そうな餓鬼ときた。」

「…弟と俺を重ねているのか。」

「…悪いかよ。お前の成長を見るのが楽しみになつて、お前が危険に晒されれば心配になつて。悪いかよ。」

フィオールは自嘲するような笑みを浮かべる。カイザは、自分を弟のように思つてくれていたことを嬉しくも思つたが…やはり、心のどこかでは彼を疑つていた。今は心配してくれていても、いつか、裏切られるのではないか、と。

なら俺のツテでなんとでもなるからな。でも、エドガーに関わるつていうなら話は別だ。混乱をもたらす美女…そんなのにお前を関わらせたくないんだが…」

フィオールは俯いたまま、カイザを見た。

「その様子からして、死体を手放す気はないんだろう？」

カイザはフィオールの眼差しを、しつかりと受け止めて頷いた。

「そりだらうと思つて、根拠のない昔話でも一応調べておいたんだが…お前も鍵が目的つてわけじやなさそつだ。確か、墓荒らしを探している…だつたな？」

「…」

何と言つていいかわからず困つてているカイザを、フィオールは容赦なく見つめる。

「何故だ。」

「…」

「何故墓荒らしを探している。」

「…」

「お前は、その死体とどう関係があるんだ。」

伝説、鍵、混沌…どれもカイザにとつてはどうでもよかつた。彼はただミハエルのために、盗まれた宝物を探しているだけだったのだから。

「…やむを得ない理由があるなら俺だつて力になる。そのために俺

はお前を追つてきたんだ。だから話してくれないか。」

「フィオールの真剣な眼差しは、切望する弱々しい眼差しに変わった。カイザは、重たい口を開いた。

「伝説とか、まだ信じられないし：彼女がエドガーだろうがなんだろうが、どうでもいいんだ、そんなこと。ただ…俺は、盗まれた宝物を探しているだけだ。」

突き付けられる、エドガーとミハエルの共通点にカイザはまだ強がっていた。しかしそれは、眞偽がどうあれ目的は果たそうとする開き直りにも似た覚悟の表れだったのだ。

「ミハエルの死を悼む人々が彼女のためだけに埋めた宝物を…取り戻したいだけなんだ。」

カイザは、目の前のカップに視線を落とした。そこには言葉に詰まる情けない顔をした自分が映っている。

苦しかった。ミハエルのこともそうだが、フィオールの善意さえ素直に受けられないことが苦しくて、胸が痛かった。嬉しいのに、心がそれを抑制してしまう。そんな自分が弟と重ねられて優しくされてきたことも、申し訳なく思えてならない。フィオールの眼差しが、心苦しかった。

「失礼します。」

扉の向こうから、ガトーの声がした。フィオールは少し慌て氣味に返事をする。ガトーは部屋に入り、軽く頭を下げた。

「謁見の御用意が整いました。」

「おー！さすがローザとガトー！」

フィオールは素早く立ち上がり、カイザの腕を引いた。カイザが見上げたフィオールは、いつものように笑っていた。

「怪しげな死体から手を引いて欲しいのは山々だけどな、お前が突き進むつてんなら俺も付き合つ。」

「…フィオール、」

「ほら、情けない顔するな！まずはマザーから情報収集だ。」

さつきまで泣きそつな顔をしてカイザを見つめていたはずなのに、今度は急かすようにカイザの腕を引くフィオール。

「…盗まれた宝物を見つけたら、必ず手を引くから。」

「わかつたよ。」

幼少の頃、暗く荒んだカイザにいつも明るく笑いかけてくれていたフィオール。その頃は、彼の優しさにも、存在の大きさにも気付けなかつた。

「…ありがとう。」

心苦しさに苛まれながらも、やつと口にできた感謝の言葉。フィオールに聞こえたかさえ怪しい声量だったが、確かに彼は感じていたのだ。人の善意と、優しさを。

二人はガトーに案内され、白い屋敷に足を踏み入れていた。平屋ののっぺりとした外觀とは違い中は薄暗く、薄い石で作られた行灯が連なり異様な空氣を醸し出していた。そんな屋敷の奥にある

地下へ続く階段をくだる。広く、長い、終わりも見えない階段を一向に。

カイザもフィオールも何やら落ち着かない様子だ。何故なら、中は見渡す限り女、女、女…わかつていたこととはいえ、男ばかりに囲まれて生活してきた一人には未知の世界だ。

「ほ、本当に女ばかりで…なんか、怖いな。」

耐えきれず、フィオールが思つていたことをポロリと口に出した。ガトーは穏やかな笑みを浮かべて言った。

「…」は本来、マザーの身の回りの世話をする侍女達だけが集められた男子禁制の聖域ですから。彼女達にしてみたら男のあなた方のほうが物珍しいと思いますよ。」「…じゃあお前はもしかして…」

カイザの驚く声に、ガトーは首を傾げる。カイザはガトーの首飾りだけが輝く上半身を凝視した。しかし、そこにはカイザが思つているようなものは見当たらない。

「…俺は出入りが許されてるってだけで、男です。女ではありません。」

「そ、そうだよな…」「何考えてんだよ、お前。」

フィオールがカイザの頭を小突いた。ガトーは肩を震わせてクスクスと笑つている。

穏やかで物腰柔らかな口調とは不釣り合aina、スラリと伸びた身長に筋肉質な上半身。行灯に照らされた褐色の広くたくましい背中は、男の色氣で艶めいている。こんな奴が女だったら、自分は男

をやめたくなる… そう、カイザは考えていた。

「ガトーが女だったら、俺は男やめるね。」

フィオールも同じことを考えていた。

暫く歩いていると、階段が終わり広い場所へ出た。そこには大きな扉以外、何も見当たらない。

「こゝは、俺だけが立ちいることを許された一室…」

ガトーはその扉をゆっくりと開く。

「奥宮です。」

薄暗く、広い室内には香の煙が立ち込めていた。その向こうの御簾には、人影が揺らめいていた。怪しげな雰囲気の部屋の前で、二人は立ち尽くす。

「あれが、マザー・クリストフ…」

フィオールが小さく呟いて目の前の影を改めて認識する。カイザは「クリトリ」と唾を飲み込み、影を見据えていた。

「どうぞ、お入りください。」

ガトーに促され、二人は部屋に足を踏み入れた。緊張氣味に奥へ進み、御簾の前に並べられた台座に腰をかける。カイザはミハエルをおろし、隣に座らせた。

「…おい、カイザ。お前聞きたいことあんだろ。」

「フィオールが小声で話しかけた。カイザはフィオールを横目に睨んだ。

「フィオールだつて…」

「お前が先に聞けよ！」

二人が言い争つていると、御簾の向こうから笑い声がした。
一人はピタリと言い合いを止め、笑つて震える影を見つめた。

「どつちだつていいだろ、待つのは嫌いなんだ。」

ゆつくりと、褐色の細い指が御簾を捲り上げる。艶かしく台座に伸びる足、曲線美を描くくびれた腰、首飾りが谷間に埋まる豊かな胸、そして…

「…は？」

御簾が上がりきり、フィオールはガトーを見た。ガトーはにつっこりと笑つている。カイザは開いた口が塞がらない。

「あたしが、マザー・クリストフだ。」

芯の強い漆黒の髪に、強気そうに吊り上がる黄金色の瞳をした目。

「…ローザが、マザー？」

フィオールが震える指で台座に座るローザを指差す。少女は驚く一人を楽しそうに見つめて扇を広げた。

「さて……手土産の封を、破ろうか。」

擦り合せれば一本の糸になる

朝。鳥達が目覚めの挨拶を交わし、木漏れ日が足元を白く照らし出す森の中。暇ができたカイザはミハエルを訪ねて墓地へ走っていた。まだ、カイザがハウルを離れる前のこと。

墓地に出ると、カイザは彼女の姿を探した。日の光を反射してキラキラと光る墓石。枯れかけた花が秋の訪れを感じさせる。いつもなら、それらを摘み取つているミハエルがいるはずなのだが：彼女の姿はない。彼は少し予感はしていたのだ。普段夜中に墓の手入れをしている彼女だ、朝や昼はノースの家にいるのではないか、と。仕方がなく、帰ることにした。

「カイザ！」

振り返ると、膝に手をついて荒い息を整えるミハエルがいた。

「…ミハエル、」

「今日は、早くから会いにきてくれたのね。」

肩で息をしながら、優しく笑う彼女。カイザはいてもたつてもいられなくなり、彼女に駆け寄つて抱きついた。

「「めんね…夜しか墓場へ来ないものだから。待った？」

ミハエルは彼の頭を撫でた。

「今、来たといふ。でもなんで朝なのに墓地へ？」

見上げると、彼女は少し困った笑顔で言った。

「…あなたが、いると思ったから。」

「ううしてそう思つたのか、気にならなかつたわけではない。
しかし、カイザは彼女がわざわざ来てくれたことが嬉しくて堪らなかつた。彼女の服を握る小さな手が、ぎゅうと丸くなる。

「今日はずっと暇なの？」

「夜から、少し用事がある。」

「そう、じゃあそれまでうちでゆっくりして行くといいわ。ノースの町も案内してあげる。」

「…俺、」

カイザは俯きながら、ボソボソと呟く。

「ミハエルの料理。食べたい…」

いつかの夜に交わした約束。幼くして家族を失つた彼にとつては、すでに憧れに近い約束になつていた。一度でいいから家族と食事を…そんな、ささやかな願い。

「…もういえば、『駆走する約束してたわね。』

ミハエルはカイザの手を取り、歩き出した。

「じゃあ今日は…ノースの町を案内するついでに買出しして、夕方には一緒に『はん食べましょつか。』

「…」

「ね?」

ミハエルと共に過ごす白昼。日の下で会うのも初めて、一緒に墓地以外へ行くのも初めて。カイザのさやかな願いが大きな喜びとなつて現実となる。

「最初はどこに行こうかしら…」

「俺、ノースのおつきい橋見たい！」

「カリオス橋？見るだけじゃなくつて渡れるわよ？」

「本当に？！」

手を繋いで墓地を去る二人。どこからどう見ても仲睦まじい姉弟であつた。そんな二人は、ただ互いの心の隙間を埋め合つ。時間を共有し、失つた物を取り戻そうとしたのだ。爽やかな朝の、帰り道に。

「で？聞きたいことがあつたんだろ？」

鼻で笑いながらクリストフは扇を仰ぐ。そんな少女をあつけるかんとして見つめるフィオール。その隣で、カイザは膝の上に置いた拳を強く握り締める。

「…俺が運んでいる死体と一緒に埋められたはずの宝物が盗まれた。それを探している。」

「へえー、」

クリストフの顔から笑顔が消えた。

「彼女は5年前に建てられたクロムウェル家の墓に入つていた。クロムウェル家の財宝なら噂になつてもいいところだが…フィオール

知らない、カトリー・ナにもないとなると、まだ墓荒らしが所有している可能性が高い。」

「そいつの行方を知りたくてここへ来た…と。」

クリストフの表情は至って真剣。カイザは少女の言葉に頷いてみせた。

「…クロムウェル家の情報は全て握っていると聞く。頼む、何でもいい。ささいなことでもいいから…教えてくれ。」

カイザは深々とクリストフに頭を下げた。クリストフは鼻から大きく息を吐き、扇を置んだ。

「お前、何か大変なことに首を突つ込もうとしてないか？」

カイザが顔を上げると、クリストフは眉をひそめて煙管に手を伸ばしていた。フィオールはその開けっ放しだった口を閉じ、真剣な表情で二人の話に耳を傾ける。

「手掛けがない…わけでもない。」

煙を吐き出しながらクリストフは言った。カイザは身を乗り出し、目を輝かせた。墓荒らしの尻尾を掴んだ、と。

「本当か?!」

「その盗まれた宝物つてのは、人の首の太さ程ある金の輪じやなかつたか?」

カイザの脳裏で、輪が收まっていたと思われる跡が残つた宝物箱の記憶が鮮明に蘇つた。

「……って、聞いてもわかるわけないか。それに、何でお前の墓なんかに入つてたんだかも…」

「何で、そのことを…」

カイザの表情が一変する。口から煙を吐き出しながら歎ましげに頭を搔く少女。

「墓に入つていた宝物のことばかりか、墓が俺の物だと…俺が、クロムウェル家の人間だと…！何故知つている…」

この瞬間、カイザは奥宮にいる人間全てを疑っていた。

「…言つておくが、あたしは盗んでないぞ。」

声を荒げるカイザにしれっとした態度をとるクリストフ。カイザはフィオールを睨んだ。

「お前…俺のこと、こいつに売つたのか。」「ち、違う！俺は言つてない！」

激しく首を横に振るフィオール。カイザは黒い屋敷で話していたことを思い出した。フィオールは、自分を心配してここまで来てくれた。そんなこと、するはずがない。いや、していたとしても5年も前にクロムウェル家から見放された餓鬼の話など、大した金額にもなりそうにない。クリストフにしてもそうだ。盗んだ本人なら、宝物と埋まっていた死体を背負う男に関わらうとするだろ？

「…悪い、熱くなつて…」

カイザが落ち着きを取り戻し、フィオールはホッと肩を撫で下ろした。

「…必死みたいだけどな、少し頭を冷やせ。ガトー、ここに何か飲み物を。」

面倒臭そうな顔をしながらも、クリストフはガトーに言いつけた。ガトーは軽く頭を下げ、部屋から出て行つた。

「少し混乱してたみたいだ。」

カイザは額を抑えて小さく頭を横に振る。

「俺なんかまだ混乱しつ放しだ。マザー・クリストフがまさかローザだつたなんて。」

フィオールは俯いて、はあ、と深く息を吐いた。二人共、妙な緊張感に疲れ果てている。

「そもそも、噂なんぞに惑わされるお前たちが悪い。」

クリストフは呆れたように言い放つた。

「カイザはまだしも、俺は10年来の付き合いなんだ、驚きもある。」

フィオールは肩を竦めて大きく息を吐いた。彼女がの告白がいかに堪えたかを物語るには充分な反応だった。

「…驚かすつもりなんて、なかつた。正体を明かすつもりもな。」

少女の目が床を這い、カイザにもたれかかるミハエルを捕まえる。

「だが、カイザ。お前には全てを知る権利がある。いや、義務があるんだよ。ギールを殺し、その死体と関係を持つお前は。」

マザー・クリストフは、ミハエルのことを知っている。

カイザが顔を上げると、少女はカイザを見据えていた。ふと目が合い、カイザは思考がぴたりと止まってしまった。

「今はまだ情報がぐぢやぐぢやして混乱するのも仕方ない。それも、あたしやフィオール、しいてはお前自身の知り得ることを繋ぎ合わせれば多少なりとも整理されるだろ?」

墓荒らしを探し出すことに集中するつもりが、気になつていった疑問がぽつりぽつりとカイザの中で湧き上がってきた。

マスターが死ぬ直前に言つていた言葉の意味、クロムウェル家の墓に入つていたミハエルの死体の謎、宝物の行方、伝説の真偽…これらが繋がるという、少女の正体。

「お前が知るべきことは3つだ。お前自身のこと、その死体のこと、そして…これから起るること。」

クリストフは燭台を三本並べて、灯る火を見つめた。カイザとフィオールは静かに少女の声に耳を傾ける。

「様々な事情が絡んで、もう後戻りができないところまで来てしまつたお前が3つの真実を手にした時…」

少女はふっと蠟燭の火を吹き消した。

「乱世は、終る。」

暗闇で響く、深みのある少女の声。二人の男が不安で固まってしまう程、それは低く、低く、煙の匂いで満たされた一室を漂う。クリストフの言葉の真意は全く掴めない。ただ、カイザはそれを知ることを恐れた。乱世が終ると言うのに、何故か…この部屋のような暗闇に包まれてしまふ気がしたのだ。全てが、終ってしまうような。

「…俺は、」

ビリビリといい。そう、聞こじとした時だった。

「マザー…」

カイザとフィオールの背後で扉が勢いよく開き、ガトーの声が外の明かりと共に部屋を貫いた。三人が何事かとガトーに目をやると、彼は扉を荒々しく閉めて鍵をかけた。

「何があつた。」

暗闇の中でクリストフのいる台座に駆け寄り、ガトーは御簾を下ろした。

「マザー、とにかく今は外へ…」

カイザとフィオールは何も見えない暗闇で聞こえるガトーの声色で異常な事態が起きているのだと理解した。カイザは直様ミハ

エルを背負い、フィオールも立ち上がり、カイザの肩に触れた。死線を潜り抜けてきた盗賊と情報屋だ、二人は何も話さずとも互いのすべきことをわかり合っているのだ。しかし、ガトーが来た時にはもう、遅かった。

扉が爆発し、激しい爆風に一人は吹き飛ばされた。

「いつ……て……」

フィオールはクリストフの台座にぶつけた後頭部を抑え、蹲る。

「大丈夫か、フィオール。」

カイザはミハエルを抱き上げ、ヨロヨロと立ち上がった。ミハエルを庇つたために被爆し、頭から血を流している。

外の明かりが煙の間を縫つて部屋に差し込む。ボヤけた視界が鮮明になってゆくと、カイザの目の前には破れた御簾と、クリストフの前に立ちはだかり、槍を構えて扉の向こうを睨みつけるガトーガイア。カイザは、ガトーの視線を追つた。

「駄目だろマザー、下手人を匿つたりしちゃあ…」

煙の中に沢山の黒い人影が浮かび上がる。逆光で顔は見えなかつたが、カイザはその声の主が誰なのか、わかつた。そして、ゆっくりとナイフを取り出した。

「しょうがねえからお迎えに来てやつたんだ。」

煙が晴れ、僅かな光で影の姿が照らされる。切れ長の目、赤い短髪にもみあげの白髪、悪戯に釣り上がる口角。

「バンディイ…」

フィオールが目を見開いて小さく呟いた。盗賊を引き連れたバンディはニヤリと笑うと、部屋に足を踏み入れた。

「フィオールもいたのか。まあ、用事があるのはそこの下手人とマザーだけだからよ、引っ込んでる。」

「何が下手人だ、目的はカイザが持つギールのナイフだろ。」

ガトーの後ろでクリストフが言い放つ。カイザが振り返ると、クリストフは立ち上がった。

「…聞き覚えのある声だ。誰だっけな…」

バンディは足を止めて眉をひそめた。

「ここのナイフは、一体…」

カイザが聞くと、クリストフは横目にカイザを見て、言った。

「…盗賊の頭が後継者に持たせるナイフだ。盗賊団を引き継いだ時の顔見せではマスターになつた証となる。」

カイザは握るナイフを見つめた。その手は、小さく震えていた。

「ブラックメリー…お前んとこの盗賊団の名を冠した、世界に一つのナイフだ。」

小さな震えは激しくなり、カイザはがっくりと膝を折つてしまつた。

「やまあねえな。」

バンディは鼻で笑い、カイザを見下ろす。

「でもまあ、感謝してるぜ？マスターも死んで、後継者のお前も頭殺しの賞金首。おかげで今や俺が盗賊のトップだ。馬鹿なお前のおかげでな！」

カイザの手から、ナイフが滑り落ちた。バンディの高笑いが地下の一室で木靈する。クリストフとガトーはそんなバンディを睨みつけ、フィオールは…頭を抱えて震えるカイザを、辛そうな表情で見つめていた。

「と、いうわけで、ブラックメリーハーを手に入れるだけで俺は盗賊団を引き継げる。罪悪感でもう握ることもできないようだし、わかってくれるよな？カイザ。」

バンディがカイザに歩み寄る。すると、フィオールがバンディの目の前に立ちはだかった。

「…邪魔だ。」

バンディはフィオールの頬を爆弾で軽く叩いた。しかし、フィオールはバンディをきつく睨みつけ、動かない。

「…はあ、お前はカイザの味方か。仲良しだったもんなあ。」

カイザは俯く頭をゆっくりと上げた。

「フィオール…」

バンディは溜息をついて頭を搔いた。

「じゃあ、じょうづ。カイザの命だけは取らずにおいてやるから、そのナイフ、取ってくれよ。お前みたいな優秀な情報屋を殺したくない。それでいいだろ? マザーの言う通り、俺の目的はブラックメリーだ。」

バンディはフィオールの肩に手を置いた。カイザは微動だにしないその後ろ姿を、ただ見つめていた。

「…カイザ、」

後ろ姿は語る。

「そのナイフは何があっても手放しちゃならない。」

フィオールの広く、大きな後ろ姿は語る。

「マスターの思いが詰まったそのナイフは、直接受け取ったお前以外が手にすることは許されない。殺したことを悔いるなら、ブラックメリーを守り抜け。罪も、悲しみも、マスターの思いも…全てを背負つて生きてゆけ。」

フィオールの肩に置くバンディの手に力が入つてゆく。

「ブラックメリーを取れ、カイザ。」

カイザは涙を流しながら、震える手をナイフに伸ばす。頭を過るのは、マスターの死顔。あの時の悲しみが生々しく、鮮明に蘇る。

「取れ！カイザ！」

フィオールがバンディを殴り飛ばした瞬間、カイザは勢いよくナイフを拾い上げ、立ち上がる。涙を流しながら前を見据えるその表情は、覚悟に満ちていた。全てを背負い、真実と向かい合う覚悟。罪や、心の痛み、人の思いを一生抱えて生きる…カイザはその時やっと立ち上がり、そして、前を見たのだ。ミハエルの死体を、抱いて。

真実の奥には更なる真実が息を潜める

「てめえら伏せろ！」

クリストフが叫ぶと、フィオールはミハエルを抱いている力イザに覆い被さった。手下に抱き起こされるバンディがはっと顔をあげる。クリストフはガトーの背後から飛び上がり、轟音と共に石畳の床に拳を沈めた。石が飛び散り、粉々になつた石の埃が空を舞う。

「げほっ…逃がすな！ ブラックメリーと鍵は…逃がすんじゃねえ！」

石の礫で田を負傷しながらも、バンディは叫ぶ。

「鍵…？」

バンディの言葉に、カイザは固まってしまった。

「ボケつとすんな！ 行くぞ！」

クリストフがカイザ達の服を掴み、立ち上がらせた。

「…お前、伝説のクリストフなのか？」

カイザを中心に、時が止まる。クリストフもフィオールも、何も言わずに彼を見つめる。

奥宮で会つて、薄々とわかつていた。わかつてはいたが…カイザは、改めて聞いた。クリストフは笑いもせず、困りもせず、穏らかな声で答えた。

「…そうだ。」

ガトーの槍に貫かれる盜賊の断末魔が交差する。カイザとクリストフの視線が交差する。カイザはその時やつと、背負った物の重みを知った。伝説が真実なら、ミハエルもまた、受け入れたくなかった事実が無理矢理カイザの中に入り込んでくる。湧き上がってくるのは恐怖でも驚きでもなく…嫉妬だった。

「…詳しい話は後だ。」

クリストフは呆然とするカイザの視線を断ち切つて座つて、大きな石の台座を細い腕で持ち上げた。今すぐにでも問い合わせしたい気持ちでいっぱいだが、カイザは言葉を飲み込んで目の前のこと集中した。今はとにかく、逃げなくてはならない。

「隠し通路だ。お前ら先に降りろ。」「でも、ガトーが！」

フィオールが指を差す方へカイザが目をやると、石埃の中で一人、襲いかかってくる盗賊を相手にしているガトーの姿があつた。

「こつちは大丈夫です！」

ガトーが槍を豪快に振り回しながら、心配そうに自分を見つめるフィオールとカイザに微笑む。確かに、ガトーはかなり腕がつつようだが…一人の足は、動かない。

「あいつなら心配ない！あたしの息子だからな！」

クリストフの言葉にカイザとフィオールは固まつた。

「だから…早く降りろ…」

クリストフに怒鳴られ二人は我に返り、言われるがまま隠し通路を降りる。

「行かすかよ！」

最後にクリストフが降りようとした時、バンディが爆弾を投げつけてきた。

「しまった！」

ガトーの頭上をすり抜け、爆弾がクリストフ目掛けて飛んでくる。

「ローザ！」

爆弾が視界に入り、カイザが叫ぶ。すると、クリストフは扇を開き、爆弾に向かつて飛び上がった。

「ガトー！」

名前を呼ばれ、ガトーは隠し通路に向かつて大きく飛び上がる。そして、クリストフは爆弾を扇で叩き落とした。導線が短くなつた爆弾はバンディのもとへ勢いよく戻つてゆく。

「なつ…！」

響き渡る爆音。盗賊の悲鳴と肉片が激しく飛び交った。

暫くして、爆風と天井や壁の崩れがおさまった。煙と石埃が淀めき、白く華やかだった部屋は真っ赤な血と黒い焦げ跡で染め上げられている。

「…くそつ、」

血と火薬の臭いが溢れかえる部屋の片隅で、掘んでいた死体を放り投げバンディはヨロヨロと立ち上がった。彼は手下を盾にしてなんとかやり過ごしたのだ。

「まさか、ローザがあのマザー・クリストフだったとはな…」

立ち上がったかと思うと足元の死体を踏みつけ、喉元で怪しく笑った。

「逃がさねえ…ブラックメリーも…美女の鍵も…」

、 焦点が合っていない目で通路の入り口を見ながら、バンディは死体を激しく踏みつける。血が飛び散り、骨が折れる音がした。

「バンディ…」

血が滴る頭を抑える一人の男がバンディに歩み寄る。

「サイ、生きてたのか。」

乱れた黒い髪を整えながら、サイは言った。

「追わないのか？」

バンティは鼻で笑い、通路に背を向けた。

「マザーとガトーは予想以上の手練れだ。駒も随分と減らされちまつたし、追つたところで返り討ちに合つのがオチだろ。」
「俺なら勝てた。今回は駒が多くて逆に邪魔だつたんだ。」

「まあ焦んなつて。ここも墮としたし、鍵集めも始まつたばかりだ。そう遠くないうちに必ず追い詰めてやるよ。」

バンティは出口へと歩き出す。

「行くぞ、西の巫女が住んでたつていうノースへ。」

「そのことなんだが……」

バンティが振り返ると、サイは無表情で彼を見つめていた。
真つ黒な瞳が、虚ろに彼を捉える。

「カイザの奴、死体を大事そうに持つていただろ。」

「…それが？」

「あれ、エドガーじゃないか？」

「…」

「もしそうなら、あの気難しいマザーが奥宮にカイザを入れたことにも納得がいく。何でいつがエドガーの死体を持ち歩いてるのかはわからないが。」

「…」

サイがそう言つと、バンティは再び喉元で怪しく笑い始めた。
そして、石の壁に響く程に大きな高笑いした。サイはそれを、やはり無表情の冷めた瞳で見つめるばかり。

「面白くなつてきたじゃねえかーあいつも鍵を狙つてんのかー！」

サイに背を向け、肩を震わせるバンティ。

「これだよ、これこそ俺が求めていた乱世だーそしてこの戦いを制した奴こそ…神の業輪に選ばれるー！」

いきなり叫んだかと思つと、震えも止まつてぴたりと静かになつた。

「カイザ…運命には逆らえない。俺が選ばれるといつ…運命にはな

」

こつして、リノア鉱山陥落により暗い地下の奥宮で開戦の狼煙は上がつた。歪な運命の歯車はゆっくつと、軋みながら動きだす。

「島子つて、どうこうことだよ。」

カイザ達は冷んやりとした薄暗く入り組んだ地下道を歩いていた。フィオールの問いかけに、先頭を歩くクリストフが振り返る。

「どうこう」とつて、どうこうことだよ。」

「お前、どう見てもガトーより年下じゃねえか！－というより、ローザが伝説のクリストフならお前らは何歳なんだ？！」

隣で混乱しているフィオールと全く同じことを考えていた力

イザ。黙つてはいたが、気になつて仕方がなかつた。

「…年は答えないぞ。」

「一〇〇歳はゆうに越えてる怪力ババアが女ぶつてんじゃねえ！」

混乱し過ぎて興奮し始めたフィオールはクリストフのゲンコツを喰らつて大人しくなつた。頭を抑えるフィオールを見て呆れるカイザと、苦笑するガトー。

「…今のはお前が悪い。」

「すいません、麗しきマザー…」

カイザが注意すると、フィオールは涙目で小さく謝つた。

「伝説を知つてゐるなら疑問に思つこともないだろ？。あたしは宴で神と寝所を共にするのが役目なんだ。その時懷妊し、地上に戻つてから産んだのがガトーなんだよ。」

不機嫌そうにしながらも質問に答えるクリストフ。

「じゃあガトーは…神の子供？！」

「はいはい、そうだ。」

驚くフィオールを面倒臭そうにあしらつクリストフ。

「だからあんなに強いのか…」

フィオールが先程の戦いぶりを振り返り一人で納得していると、クリストフは得意げに笑つて見せた。

「あたしが賜つた不老の身体と思いのままに動く手足…つまり、圧倒的な”力”だ。それを見事に受け継いだからな。当然だ。」

親馬鹿なクリストフのすぐ横で、ガトーは少し照れ臭そうに笑う。

「…なあ、ローザ、
「クリストフだ。」

ひしゃりと言い放たれ、一瞬口をつぐむカイザ。少し間をあけて、おずおずとその名前を呼ぶ。

「…クリストフ、リノア鉱山は…どうなる。
「…今は盗賊の手の内だが、心配はいらない。一日あればまた取り返せる。」

「でも、俺のせいだ…」

カイザが俯くと、クリストフは立ち止まつた。カイザが見た少女の顔は、

「気にするな。」

慈愛に満ちていた。

「バンディーの目的はブラックメリーラーとあたしが持つ鍵だったようだし、お前がいてもいなくても、こうなつっていたよ。」

「その、鍵は大丈夫なのか？」

「…」

笑顔が曇り、少女はカイザに背を向けた。

「あたしの鍵は、もう使ったから手に入れたところで意味はない。」

「…？」

「鍵を使って開いた扉が、お前達も通ったあのリノア鉱山大門だ。」

地道の行灯が、クリストフの背中を寂しげに照らし出す。カイザはそれを、じつと見つめた。少女が手放したあの場所は、聖母が神から賜つた愛の証だったのだ。立ち止まって向けたあの慈愛に満ちた笑顔は、自分を気遣つて無理をしたものなのだと、カイザは気付いた。

「リノア鉱山こそ、富を絶やさぬ宝石。あの門の向こうこそ、神があたしのために用意した一室…」

「…クリストフ、俺、」

「それを開くためには二つの鍵が必要だった。」

カイザの言葉を遮り振り返るクリストフは真剣な眼差しでカイザを見た。

「一つは、あたし達がそれぞれに与えられた天界に繋がる扉を開く鍵。そして、あたし達が代わる代わる手にしなくてはならない金の輪…」

カイザの心臓が、大きく音をたてる。

「”業輪”、と呼んでいる。…カイザ、おそらくお前が探しているモノだ。」

クリストフの金の瞳がてらてらと火の光を反射する。その視線は、真っ直ぐカイザの瞳を射る。

「お前が探しているのは乱世の核となるもので、お前が背負っているのはその業輪を最後に所持していた女…」

「…」

「エドガーだ。」

満月が傾く夜の墓地。嗚咽もおさまり、大人しくなつてぐずぐずと涙を拭く少年。そんな少年の頭を優しく撫でる彼女。二人は墓地の隅にある丸太に腰をかけていた。

「名前は？」

「カイザ。」

「カイザ…いい名前ね。」

少年は、この名前が嫌いだった。

“神に選ばれし戦士”…この名前をつけてくれた人はとても高名な方なんでしょうね。」「

彼女はにっこりと笑う。しかし、少年はどこか浮かない顔をしていた。彼女はその様子を見て、首を傾げる。

「…嫌なの？」

「…だって、俺は捨てられたんだ。」

「…」

「それなのにこんな名前…」

腫れた目に再び涙が溜まってゆく。彼女は愛おしそうに微笑

んで少年を抱きしめた。

「私は素敵だと思うわ。だって、私とあなたがこうして出来たのも神のお導きなんだもの。」

彼女の言ひ、お導き。少年は幼い頭でそれを運命といつものなか、考えた。

「あなたは、名前の通り神様に選ばれているのよ。」

不思議な温もりに包まれ、呪っていた運命を少しでも受け入れることができるれば、自分の名前も好きになれるのではないか。

「…名前、なんていつの？」

「私はミハエル。」

ミハエルがいれば、運命もまた素敵なものになるのではないか、そう、考へた。

「涙を拭う妖精の名前だ。」

「そうよ。よく知ってるわね。」

優しく笑う彼女にぴったりだ。少年は思わず頬が緩む。

「でもね、もう一つ他の意味があるのよ。」

彼女は空を見上げて微笑む。少年も、つられて夜空に目を向けた。そこには沈みかけた満月と、その反対で散り散りに輝く星があつた。

「闇に囚われてしまった”カイザ”的手を引く天使”神の遣い”。」

」

少年が彼女を見ると、彼女もまた、少年を見つめていた。

「…ね？ 神様は誰も捨てたりなんかしないわ。私達はちゃんと見守
られている。」

ヴィエラ神話に出てくる神に選ばれし戦士は、戦いの途中で
闇に囚われてしまう。そんな彼の手を引いて光ある世界に導いたの
が、神の遣い。

これを運命と言わず、何というのか。少年はこの時、自分
の名前がカイザでよかつたと心から思えた。心臓の鼓動が、彼女の
微笑みが、少年の心を熱くする。

「…俺、名前気に入った。」「
「私もよ。カイザにあって、もっと好きになつたわ。」

赤い目を細めて嬉しそうに笑う少年。大人になつて、神話の
ような戦士になれたら… そう、幼い夢を思い描いた。

死すらも一人を別つことはできない

真っ暗な部屋で、カイザはベッドに横になっていた。隣にはミハエルを寄り添わせ、ボーッと天井を見ていた。

——馬鹿なお前のおかげでな……

——エドガーだ……

カイザは横を向いて、ミハエルを見つめる。長い睫毛も、闇にぼんやりと浮かび上がる白い肌も、やはり、昔と変わらない。変わらないのに……

「……なあ、」

呼びかけても、答えない。カイザは彼女の身体をゆっくりと自分に向けさせた。その顔を暫く見つめて、考える。こんなに彼女を愛おしく想うのはやはり、彼女を一人の女性として見ているからなのか、と。幼い頃はただ一緒にいたいだけだったが、彼女と釣り合つ年齢になつてその想いは何時の間にやら愛情に変わっていたのだ。

カイザは眠るように目を瞑る彼女に顔を寄せ、そつと唇を重ねてみる。死体に口づけする程に狂おしく愛しているのに、甘く冷たいカイザの恋心はミハエルの柔らかな唇に吸い込まれるばかりの一方通行。顔を離したカイザは、彼女を見つめて静かに涙を流した。

「……起きてくれよ、ミハエル……」

幼い自分を抱き締めてくれた身体はそのままなのに、声も聞けない、笑顔も見れない。わかつてはいたが、激しい環境の変化がカイザを限界まで苦しめていたのだ。嫉妬なんてしないから、彼女を生き返させてくれ……なんて都合のいい神頼みをさせるまでに。

誘拐された惨めな自分を救い出してくれたのは彼女だった。離れてからも再会の約束と揃いの鍵が彼を支えていた。マスターを殺して自暴自棄になつていた彼に生きる目的を与えたのも、死んでいたとはいえ、彼女だった。

育ての親を殺してしまった罪悪感、ミハエルが伝説のエドガーであると知つた衝撃……それらに押し潰されてしまいそうな彼は、彼女無しではもう、正気すら保てそうになかった。

真実から田を背けないと決めたからこそ、今度はることを恐れ始めるカイザ。子供のように、ミハエルの死体を抱き締めて泣いていた。

「俺は、どうしたらしいんだ…」

彼女にしか苦しみや悲しみを曝け出せなくなつっていたカイザは、そのまま泣き疲れて眠つてしまつた。冷たく、暗い夢の淵へ。

「…まだ寝てやがった。」「放つておいてやれ。カトリー・ナを出てからまともに寝てなかつたからな。」

煙管を咥えて窓際に陣取るクリストフ。ガトーは部屋の真ん中のテーブルの近くで槍の手入れをしていた。

ここはリノアから少し北東にあるダリの町。鉱山を出てから

この町で宿を取り、身を隠していた。もう時刻は昼。フィオールはクリストフとガトーの部屋に入るなり、困惑した表情でガトーの向かいに座り込んだ。

「あいつ、エドガーの死体を抱き締めて寝てたぞ。」

「…放つておいてやれ。」

フィオールは頭を抱えて深く溜息をつく。それを見兼ねてガトーが立ち上がった。どうやら茶を淹れるらしい。

「あ、あたしにもー。」

ソファーにだらしなく座るクリストフがポットを手にするガトーに向かってそれまだらしなく手を振った。

「東の国のか無いの？なんだっけ…」

「緑茶ですか？」

「それそれ！美味かつたよなー。ヤビコからもつと貰つてくれればよかつた。」

「…おい！」

フィオールがテーブルを叩いて叫んだ。

「あいつとエドガーは、どうこう関係なんだよー！」

フィオールの怒鳴り声が部屋に響く。しかし、ガトーは何事もなかつたかのように湯を沸かし始めた。クリストフも眉を寄せて面倒臭そうにしている。この山賊親子は怖気づくことを知らない。その様子にフィオールの怒りは増してゆく。

「お前らな、そんな呑氣にしてる場合じゃねえだろーこれから鍵を巡る戦いが始まるんだろー！世は乱れるんだろー！当事者がそんな態度でいいのかよ！」

クリストフはそっぽを向いて鼻からもやもやと煙を吐き出す。

「そんなあたふたしたつてどうしようもないだろ。もう一人の当事者があの調子じゃあな。」

クリストフはソファーに首までもたれかかって天井を仰いだ。

「もう一人は死んでんだろー！生きてるお前らがどうにかしろよー。」

「違うつて。カイザの事だ。」

「…カイザ？」

フィオールの声が急に小さくなる。

「やつぱりあいつ、エドガーと何か関係があるのか？お前らみたいに。」

「知らねえよ。でも、どう考へても知り合いだ。ミハエル、なんて呼んでたし。それにあの雰囲気…恋仲だったのかもな。」

クリストフはフィオールを見降ろして意地悪く笑って見せた。少女はわかつっていた。彼がこの争いにカイザが巻き込まれることを恐れている。フィオールは言葉を詰まらせ、苦しげに俯く。ミハエルに執着する様子ばかりか、彼女を抱き締めて眠るカイザを見ていたために、返す言葉もなかつたのだ。

「カイザのやつ、顔だけは良いしな。クロムウェル家にいた頃、その容姿に神も嫉妬する、なーんて言われてたつけ。神に愛された女

と神に嫉妬される男…お似合いじゃないか。」

「ふざけるな。」

「あたしはいつでも真面目だ。」

クリストフは灰を落として、ふう、と息をついた。その顔からは笑顔が消え、少女は何やら複雑な顔をしている。

「エドガーとカイザが赤の他人だつたとしても、あいつはこの争いに巻き込まれる運命だつた。」

「なんでだよ。エドガーがいなければカイザは盗まれた業輪を探そうとはしなかつたはずだ。」

「そのエドガーと業輪が埋められてたのは何処だ。」

フィオールは悔しそうに黙り込む。

「…あたしだって、認めたくない。お前と同じくギールにあいつの行末を託されてたんだからな。しかし、エドガーと業輪がカイザの墓から出てきた以上、クロムウェル家も鍵戦争に加わると考えていいだろう。むしろ…クロムウェル家が発端、かもしだれない。」

フィオールは唇を噛み締めてテーブルを叩いた。

「…カイザは、クロムウェル家に生まれた時からこうなる運命だつたんだ。」

ガトーが俯くフィオールの前に静かに茶を置いた。クリストフもガトーからカップを受け取る。

「…俺は、どうしたらしい。」

湯気が上がるカップを田の前に、フィオールは呟いた。

「そんなの自分で決める。お前はあたしゃカイザと違つて、無関係にもなるんだからな。」

「…」

クリストフは茶を啜りながら窓の外を見つめる。ガトーは槍の手入れを再開している。フィオールは黙つて考え込んでいた。

「…雨の匂いがするな。」

クリストフの独り言を最後に、部屋は沈黙で包まれた。

声がした。カイザを呼ぶ優しい声。

「カイザ？」

田を覚ますと、カイザはベッドの上で冷汗をかいて横たわっていた。

「大丈夫？」

田の前には心配そうに少年を見下ろすミハエルがいた。

「驚かれてたわよ？怖い夢でも見たの？」

カイザはミハエルの服を掴んで、荒い息を整えた。目からは

涙が滲み、息を整えるはずが逆に嗚咽で乱れてゆく。ミハエルは悲しげな笑みを浮かべて少年の頭を撫でた。

「…そんなに怖かったの、可哀想に。」

ミハエルはベッドに横になつてカイザを抱き締める。まだ彼女が起きるには早すぎる時間。眠いだろ？に彼女は少年の頭を優しく撫で続ける。

「…俺、真っ暗な墓の中に入つてたんだ。たぶん死んでしまったかう。」

少年は彼女の胸の中で話しかけ始めた。

「そしたら…棺の蓋や墓石が透けて見えた。そこには墓の前で悲しそうに泣いてるミハエルがいて…俺、叫んだんだ。ここにいるって。死んでも心はここにあるって。」

しだいに声量が大きくなり、涙声になつてゆく。彼女は頭を撫でる手を止めて、少年の話を聞きていく。

「どんなに叫んでも声は伝わらなくて…俺…」

少年の涙が彼女の服に滲む。彼女はそんな彼から身体を離し、ゆっくりと起き上がつた。少年はそんな彼女をじっと見つめて、また顔が歪み始める。彼女が何処かへ行つてしまつ、と思ったのだ。しかし、彼女は振り向いてにっこりと微笑んだ。

「…おいで？」

少年は彼女に連れ出され、墓地までやつてきた。外は夕暮れ。すれ違う人々は自宅へ帰るが寝支度するにはまだ早い時間。二人は橙の空の下、ある墓の前で立ち止まつた。

「覚えてる？」

彼女は墓石の前でしゃがみ込み、愛おしそうにそれに触れた。

「ローズウッド夫人も、あなたが可哀想だつて。」

少年は驚いて涙が止まる。彼女はまだ話し続けた。

「夢は決して現実ではない。だから涙を拭いて、笑いなさい……」「ミハエル、死者の声が聞こえるのか？」

驚く少年に、彼女は優しく微笑んだ。

「聞こえないわ。」

「…出鱈目言つてただけかよ。」

落胆する少年を見て、彼女はクスクスと肩を震わす。そして、ローズウッド夫人の墓に向き直つた。

「出鱈目でもないわ。夫人は生前、とても温厚で優しい方だつたの。ローズウッド夫人の墓に向き直つた。

彼女は少年の手を握つて自分の隣にしゃがませた。

「こ下に、夢の中のあなた同様夫人は眠つてゐる。」

「…」

「何か聞こえる？」

「…聞こえない。」

「死者はね、身体を失うばかりが伝える術さえ失くしてしまつ。完全に私達の生きる世界から隔離されてしまうのよ。」

少年は墓石を見つめて先程の夢を思い出す。そして、驚きで引っ込んでいた悲しみが舞い戻ってきた。泣き出しそうな顔をする少年の肩を、彼女はそっと抱き寄せる。

「カイザ…あなたは夢でなんと叫んだ？」

「…ここにいる、心はここにある…って。」

「ローズウッド夫人もね、今ここにいて、心はここにあるのよ。」

カイザは呆然と墓石を見つめた。そして、重たい口を開いた。

「…！」の前は、「めんなさい。」

ミハエルに出会つた夜、夫人の墓を荒らしたことが心から申し訳なく思えたのだ。すると、カイザの目に見たこともない優しげな夫人の顔が透けて浮かび上がつた。

「許してくれるって。」

「俺も…聞こえた。…よつた気がする。」

彼女は嬉しそうに微笑む。

「本当は何を言つてゐるかなんて、わかるはずがない。でもね、それでも向かい合つて。土の下の死者の言葉と。私はずっと、そうしてきました。」

カイザは夢を思い出そうとするが、もう思い出せなくなっていた。死んだ彼を見下ろす彼女は優しく微笑んでいるだろうとしか、考えつかなくなっていたからだ。

「…墓守つて、凄いな。」

カイザがミハエルを見ると、彼女はやはり、微笑んでいた。

手を繋いでノースの家に帰る二人。そして、抱き合ひながら再びベッドに入った。

「…俺が死んでも、ミハエルは側にいて声を聞いてくれるんだ。」

「ちゃんと聞き取れている保証はできないけどね。」

「それでもいい。」

彼女の笑顔が、そこにあるなら。少年はそう考えていた。

「私も…平和な世の中であなたが笑つて…幸せそうにしていれば…」
それで…」

少年の髪をこそばゆく撫ぜる彼女の吐息。それが静かな寝息に変わると、少年もまた、深い眠りについていた。彼女の腕の中で温もりを感じ、安堵しながら。

瞼を開かねば見えるものも見えないまま

目が覚めると、もう外は真っ暗だった。カイザはミハエルを抱き締めたまま眠りに落ちたことに気付く。彼は仰向けになつて、大きく息を吐いた。

「夢…」

懐かしい夢だつた。彼女の言葉も顔も鮮明に映し出された古い記憶。カイザは隣で横たわるミハエルを見た。記憶のままの寝顔。違つのは、寝息が聞こえないということだけ。

「あ、やつと起きてきたな。寝坊助。」

食卓を囲む二人にツカツカと歩み寄るカイザ。

「自分の分は自分で…」

クリストフの言葉を遮り、カイザはテーブルに右手を叩きつけた。顔を背けていたフィオールも、驚いてカイザを見つめた。ガトーは落ちそうになつた皿をテーブルに戻し、クリストフはフォークを片手にカイザを睨んだ。

「…何のつもりだ。」

クリストフが聞くと、カイザは握っていた右手を緩める。すると、そのにいる三人が言葉を失い、固まつた。

「…やつぱり、これがエドガーの鍵なんだな。」

緩めた拳から出てきたのは、カイザがミハエルから受け取った揃いの鍵。皆それを凝視していた。

「クリストフ、」

名前を呼ばれ、少女は顔を上げた。

「俺は俺の目的を果たす。業輪を探し出し、この手でミハエルに捧げたい。」

威嚇にも似た鋭い視線で少女を貫くカイザ。この時ばかりは、少女もあまりの威圧感に思わず笑ってしまった。

「…どうやら、覚悟ができたようだな。」

「覚悟はしていたよ。昨日は、少し疲れていただけだ。」

少女の生意気な笑顔に、カイザも強気な笑顔で返す。そんな一人のやり取りを面白く思わなかつたのが、

「待てよ、カイザ。」

フィオールだつた。

「盗品を見つけたらエドガーから手を引くつて約束は、お前を争いに巻き込まないためのものだ。」

「…わかつてゐる。」

カイザは辛そうな顔をして、テーブルの鍵に視線を落とした。

貰つた時よりくすんで黒くなっているが、きめ細やかな装飾は欠けていない。

「わかつていて争いの元になる業輪を探すのか！お前は、死んでる人間と生きてる自分、どっちが大事なんだよ！」

「…」

「生きてる俺の言つ事を、聞いてくれよ！」

俯くカイザに切願するフィオール。張り詰めた沈黙を破つたのは、カイザだった。

「…前の俺なら、フィオールの言つことなんてどうとも思わなかつたのに…」

辛そうな顔で、小さく笑うカイザ。それをフィオールは真つ直ぐに見つめる。

「フィオールはリノアまで追いかけて来て、バンディからも守つてくれた。あの時、お前がいなかつたらと思うと…ぞつとする。」

カイザはフィオールを見て、言った。

「やつと氣付いたんだ、お前は俺にとつてかけがえのない大事な友人だと。」

「だつたら…」

「でも、ミハエルもお前と同じくらいに大事な存在なんだよ。」

互いの気持ちをぶつけ合つ一人だが、どちらも譲る気はない。それは、当人達もわかりきっていた。フィオールは視線を外して立ち上がつた。そして、カイザに背中を向ける。

「…」めん。」

「…」

沈む空氣の中、クリストフが冷めきった表情で煙管に火をつ
けながら言った。

「フィオール、もう諦めろよ。こいつがどんな思いで決意したと思
つてんだ。」

「わかつてゐ！そんなこと！」

フィオールが声を張り上げた。そして、少し間を置いて振り
返る。カイザは目が合うとさつと下を向いてしまった。誰かを友人
だと認めることが自体初めてだというのにその友人の言葉に逆らおう
というのだ、どんな顔をしたらしいのか、わからなかつた。

「…探し物なら、情報屋が必要だろ。」

「…フィオール、」

「あー、つたく！」

頭を激しく搔き鳴りながら、フィオールは席についた。

「付き合つてやるよ！乱世の結末まで！」

自棄になるフィオールを見てクリストフはヘラヘラと笑う。

「お前はカイザに甘いよな。」

「つるせえ！」

クリストフにからかわれるフィオールを見て、カイザは複雑

な笑顔を浮かべる。

本当は、彼が何処かへ逃げてくれることを望んでいた。自分の目的のために危険に巻き込みたくなかつたのだ。しかしそう思う反面、明るく真っ直ぐな性格でカイザを支えてくれた彼が離れてしまうのも不安だつた。彼の決断はよかつたような、よくなかつたような。

どちらにせよ、リノアを出て塞ぎ込んでいたカイザは笑みを取り戻すことができた。それは彼がいたからに他ならない。

「ガトーに甘々なクセしてよく言つな！」

「息子なんだから当たり前だろ。」

「だいたい、お前ら親子が視界に入るだけでこつちは混乱すんだよ！」

熱くなつてゆく言い合いに、カイザの笑顔がだんだんと苦笑になつてゆく。

「不老の身体は成長が止まる歳が決まつてゐわけじゃないんだぞ？
お前は馬鹿か。」

「それ以前に！お前みたいな糞生意氣で可愛げのない奴がこんなできた息子を生むなんて…逆立ちでもして分娩したんだろ！そつだろ！」

クリストフはフィオールの額にフォークを刺した。フィオールが悲鳴を上げて額を抑える。カイザはすっかり呆れていた。

「あの…」

一部始終を大人しく見守つていたガトーが恐る恐るクリストフに話しかけた。

「なんだ？ できた息子。」

「ひりりと笑うクリストフに、ガトーは困ったような笑顔を返す。

「皆さんも結束したよつですし、俺は一足先に…」

「ああ、そつだつたな。」

ガトーは立ち上がり、一礼すると、サッサと部屋から出て行ってしまった。

「…なんだよ、ガトーの奴。」

フィオールは額を抑えながら、ガトーが出て行った扉を訝しげに見つめた。

「あいつには逃げ延びた山賊のところへ行つてもうつた。これからこのことを伝えるためにな。」

クリストフはフィオールを刺したフォークを端に寄せ、ガトーのフォークを手に取つた。カイザはふと、鍵を見た。もう、戦いは始まっているのだと自分に言い聞かせながら。

「…残つた俺たちは、他にやるべき事があるんだな。」

「カイザは話が早くて助かるよ、そこの馬鹿と違つて。」

フィオールがクリストフを横目で睨んだ。少女は鼻で笑うと、フォークをぐるぐる回しながら言った。

「まず、北の魔女ダンテを探すぞ。もしかしたら既にあいつが業輪を持つている可能性もある。」

「…リノアで言っていた手掛けりって、ダンテのことだったのか。じゃあ墓を荒らしたのも…」

身を乗り出して話すカイザの口に、クリストフは人差し指を当てた。

「最後まで聞け。そんな単純な話じゃないんだよ。」

渋々と大人しく首を縦に振るカイザ。少女は笑顔で人差し指を引っ込め、話を続けた。

「リノアで確かにあたしは、手掛けがないわけじゃないと言った。だが、それはとても不確かな手掛けだ。」

カイザもフィオールも、じつと聞いていた。

「…業輪は人を選ぶんだよ。そして、必ずどんな形でもあたし達四人のうちの誰かの手におさまる。不思議なことにな。」

「だから、今度はダンテの手に?」

「さあ…ヤヒコもいるしなあ。まだ業輪は何処かを巡り巡ってる最中かもしれないし、ふとしたことであたしの手に転がり込んでくるかもしれない。とにかく、最初に掘り起こした奴がずっと持ち続けるなんてことは不可能なんだ。」

馬鹿と言われて黙り込んでいたフィオールが口を開いた。

「いいな！業輪！この戦争は勝ったも当然じゃねえか。エドガーの鍵はカイザが持ってるし、お前らの誰かが手にしたらエドガーに供

えてやりやあいい。そしたらカイザも満足だろ?「

カイザは「くんと頷くが…どこか不安そうな顔をしている。
それだけでは、何も解決しないような気がしたのだ。

「…優位な立場なのは確かだけどな、恐らくそりゃ上手くはない
だろ?」

クリストフはフォークで芋を刻み始めた。

「なんでだよ。お前らはそれぞれ部屋も鍵もあるし、エドガーに業
輪を供えることに異論はないだろ?」

「ないよ。問題はそこじゃないんだ。」

溜息をついて芋を刻み続ける少女。見ているカイザは、何處
となく不安が大きくなつてゆく。

「…伝説の伝わり方は曖昧で地域や国によつても違つんだが、まる
であたし達を見ていたんじやないかつてくらいに詳しく、正しく言
い伝えている民がいる。」

クリストフはフォークを持つ手を止めて、言った。

「東の国の連中だ。そして、伝説を広めたのも東から来た正体不明
の旅人…」

「それがなんだよ。俺に伝説の話をしてくれた奴も東の国に行つて
聞いたらしいし、東禊神話なんて言つくらいなんだから当たり前だ
ろ。」

「その旅人が生きていた時代がおかしいんだよ。あたしやヤヒコが
生まれる前だぞ。」

フィオールは首を傾げる。カイザは俯いたまま動かない。クリストフの言おうとすることが、薄々わかつていたからだ。そこから導き出される答えも。

「それに、伝説では美女の一人が死せる時、それを巡つて大きな争いが起きるとある。おかしいとは思つていたが、エドガー背負ったカイザを見て確信した。」

カイザは、顔を上げた。

「これは伝説や言い伝えなんかじゃなくて…」

「これから起きることを予言したもの…だろ。」

言葉を遮られた少女が驚いた顔でカイザを見た。その表情は、極めて険しい。

「…本当に、話が早くて助かるよ。」

無表情のクリストフ。一言発して黙り込むカイザ。そして、何かに気付いて表情を曇らせるフィオール。

「…待てよ、じゃあ、何だ？予言だって言うなら、世界の秩序が乱れるとか裏と表が一つに溶け合つとか…そんなんも避けようのない現実になるつてのかよ！」

フィオールはテーブルを叩いた。クリストフはフィオールを睨んで、フォークを思い切り肉に突き刺した。

「それをどうにかしようってんでこれから動くんだろうが！あたしでさえ何が起こるかわからねえのにてめえが騒ぐな！」

「どうにかつてどうすんだよー。業輪見つけてどうにかなんのか?ー。」

テーブルをバンバン叩くフィオールと肉をぐせぐせ突き刺すクリストフを横目に、カイザは話を切り出した。

「…で、何で北の魔女を探すんだ。業輪の有無を確かめに行くだけじゃないんだろ?」

睨み合っていた二人はピタリと落ち着きを取り戻して互いに顔を背ける。

「エドガーが死んだことを伝える。そしたらうちの手助けをしてくれるだろうし。それに…」

少女の声が、沈んでゆく。

「…クロムウール家も近い。」

カイザの表情が引き攣る。どんな真実からも逃げないと覚悟をした彼だが…最後まで、知ることを恐れていたのが自分自身のことであった。

「この際だから話しておこう。…カイザ、ギールはお前のことでも悩んでいたよ。どうしたものか、ど。」

カイザは膝下のナイフを握り締め、俯く。マスターのことを思つと泣きたくなつてしまつ。

「あいつは確かにクズ盗賊だったが、少し捨くれてたんだろうな。盗賊になりきれない正義漢だった。お前のことも身代金が入つたら

早々に返してやるつもりだつたらしい。「

フィオールは遠い目をして眉を顰めている。彼はこの話に心当たりがあるようだ。

「クロムウェル家の主人はもう乱心寸前で、國中がお前の搜索で大騒ぎだつた。」

「それなのにマスターは…両親が俺を捨てたなんて言つて俺に嘘をついた。あの人は、何がしたかったんだ…」

ナイフをきつつく握り締めるカイザ。憎しみや罪悪感が入り混じるマスターへの感情が溢れてくる。そんな彼を見て、少女は優しく訴えかけるような声で言つた。

「…何かしたかったわけじゃない。さつきも言つただらう。ギールはな、どうしていいかわからなかつたんだ。」

クリストフは悲しそうな顔でカイザを見つめる。

「身代金を要求しても、クロムウェル家は払わないの一点張り。しかし搜索は続けていた。だからもう一度、身代金を要求したら…」

突然、フィオールが立ち上がつた。驚いたカイザが彼を見上げると、彼は目を泳がせて何か言おうとしていた。

「…クリストフ、それは、ギールが…」「マスターが、なんだよ。」

カイザが聞くと、フィオールは何も答えずに窓際に向かって歩いてゆく。クリストフは一息ついて、言つた。

「もう、いいだろ。こいつもガキじゃないんだ。」

「…」

フィオールは窓の縁に手を置いてじっと立ち尽くす。カイザは一人が何を言おうとしているのか、全くわからない。聞いたら絶望してしまうようなことなのかと、少し身構えた。

「ギールがもう一度身代金を要求したら今度は…殺してしまっても構わない、と言われたそうだ。」

カイザは呆然とクリストフを見つめる。フィオールはまだ窓の外を向いたまま。

「身代金は払わない、殺しても構ないと言いながら、お前を捜索するクロムウェル家にギールは困惑していた。もし見つかってしまつたら、カイザは殺されるんじゃないか、ってな。」

「だから、だから何だつて言つんだ。殺せばよかつただろ！」

「…まだわからないのか。ギールはお前を救つたんだよ。」

わかつっていた。ブラックメリーのことを知った時から。わかつてはいたが：

「…あいつはお前を哀れんで匿つたようだが、こいつは賢いし器量もいいから、ブラックメリー史上最高のマスターになるかもしれないと自慢ばかりして…」

「やめてくれ…！」

カイザは俯きながら怒鳴り声を上げた。声は、しん、と部屋を響いて壁に吸い込まれる。残つたのは悲しい静けさと、クリスト

フの溜息。

「…話は逸れたが、クロムウェル家の動向はおかしい。ついにはお前の墓まで建てる始末だ。その墓に入っていたのがよりによつて…」
「…ミハエルだった。」

ボソリと、カイザは言葉を返す。

「そうだ。だからまずは北へ行く。クロムウェル家がこの争いに大きく関わってくるかもしれないからな。」

カイザは、頷くので精一杯だった。そんな彼を見つめながら、煙管を咥えるクリストフ。フィオールはまだ、背を向けていた。

マスターは何一つ嘘をついていなかつた。唯一の隠し事も、幼いカイザを気遣つてのものだつた。知れば知る程、カイザの中で何かが大きく音を立てて崩れてゆく。勘織つたり、疑つたり、誰かを犠牲にしたり。盜賊としては当然の生きる術。フィオールの存在で小さな亀裂が入つていたそれらが、マスターを殺した罪悪感でガタガタと壊れゆく。頭に浮かんだのは、ミハエルの言葉だった。

——あなたはもっと光で溢れたところに住みなさい。沢山の仲間に囲まれて、笑顔と、優しさに満たされて……

掃き溜めのような暗い場所でも、温かな光はあつた。心配してくれる友人に、幼い命を拾い上げてくれた育ての親、光を今まで閉ざしてきたのは、自分だったのだ。

涙の匂いついで掴めたならば一度と手放してはならぬ

朝日が射し込む部屋に散乱する酒瓶。テーブルの上に食い散らかされたツマミ。そして…

「…おはよう、」

「…あやあ！」

驚いたフィオールが隣で寝ているカイザの頭に肘を打ち付ける。

「ひてつー。」

カイザは頭を抑えながらしょぼしょぼする目をゆっくりと開いた。目の前にはミハエルが穏やかな寝顔で横たわっている。振り返ると、フィオールが起き上がって何やら慌てている。

「なななな、な…」

フィオールの隣には、肘をついてベッドに寝そべるクリストフがいた。

「そんな驚くことないだろ。」

「おまつ…何時の間に?…」

寝起きでまだ意識がはつきりせず状況がよくわかつていないうちに。とりあえづ、一つのベッドに四人も寝ていたなんて…どうりで狭いはずだ、とぼんやり思った。

三人で北へ向かう話をした後、後悔に苛まれたカイザは自室へ戻つてミハエルが横たわるベッドに腰掛けた。肩越しに彼女を見つめ、幼い頃を思い出す。墓地で優しく抱き締めてくれた彼女、土産を手に他国の話をしてくれたフィオール、笑顔でブラックメリーを譲ってくれたマスター…猜疑心という色眼鏡を外して見ると、どれも懐かしくて温かい。大切にされたからこそ大切にしなければならなかつたものを、カイザは自ら終わらせた。彼は頭を抱えて、大きく息を吐き出す。

「…カイザ、」

部屋で一本だけ灯る蠅燭の火が照らす扉の向こう。フィオールの声がした。カイザは返事をするのを少し躊躇つたが、小さく返事をした。

「…なんだ？」

「起きてんのか、入るぞ。」

フィオールは覗き込むようにして部屋に入ってきた。そして、手に持つ酒瓶とツマミを見せつけ、笑つた。

「アイダではゆつくり飲めなかつたからな。ダリの酒は上手いと聞くし…久々にどうだ。」

「…そうだな。」

カイザは無理矢理な笑顔を作つて、フィオールがツマミを広げるテーブルに歩み寄つた。

二人は昔の思い出話を酒の肴に、穏やかな時間を過ごした。カイザが8歳の頃に、ヴィッツ土産のビッククリ箱に驚き過ぎて泣いた事や、11歳の頃に土産の魚を腐らせた料理を食べさせられて吐いた事。18歳の頃に幸運を呼ぶお守りだと気持ち悪い人形を渡された事。

「あの入形高かつたのに、その場で火に焼べやがつて…」「よく考えたらろくな物貰つてないな、俺。」

カイザがボソッと呟くと、フィオールは懐かしそうに笑つた。その笑顔が少しづつ曇つてゆくのをカイザは見逃さなかつた。

「…俺はあの頃楽しかつたけど、お前はきっと違つたよな。ギールも言つてたよ。泣き言一つ言わずに毎日を必死で生きてるけど、本当は心底辛いだらうつて。」

カイザは酒が注がれたグラスに視線を落とした。

「…違う、と言えば嘘になる。でも今思えばそう悪くない日常だったよ。マスターも…よく、してくれた…のに、」

見つめていたグラスに、一滴の涙が落ちた。酔いで血流が良くなると共に涙腺も緩くなってしまったカイザ。額に手を当て、静かに泣いた。フィオールも涙目になつて自分のグラスを見つめる。

「…クロムウェル家と身代金の交渉をしていたのは、俺なんだ。」

弱々しく、語るフィオール。カイザは小さく首を横に振つた。

「さつきクリストフがしていた話も、全部知つてた。知つて黙つてた。」

「…いい、何も言つな。」

「そのせいでお前を苦しめていたなら、俺もギールと同罪だ。」

「…頼むよ、謝らないでくれ。」

カイザがそう言つと、フィオールは言葉を飲み込んだ。

「…マスターの死顔が、頭を離れない。燃え盛る火の海で死にかけているのに、俺を恨むどころか泣きながら謝つてきて…事もあるうがマスターからもりつたナイフで刺したのに。」

嗚咽混じりにたどたどしくカイザは言つた。

「俺は取り返しのつかないことをした。お前が謝ることも…マスターが謝ることもない。無知な俺が、全ての元凶なんだよ。」

カイザは顔を上げて、涙を拭つた。

「お前、バンディから俺を庇つた時に言つたよな。全てを背負つて生きていけって…」

「…ああ。」

「あの時、ちゃんと覚悟したんだ。したんだけど…重過ぎて、潰れてしまいそうになる。」

涙を堪え、唇を震わせるカイザ。フィオールはグラスから手を離した。

「…その重みと寄り添い生きていくことが、背負つてことだ。」

「…」

「許されよつと思つちゃいけない。許されるはずなんて、ないんだからな。ずっとその苦しみを胸に刻みつけて忘れないことが唯一できる償いなんだ。」

許されたと思った時、それは罪を忘れた時であつて償いを終えた時ではない。

「お前は盜賊、俺は情報屋…罪を重ねて生き延びるしかない俺達にとつて苦行に他ならない。だが、それができないと死ぬしかない。」

「…」

「…俺はお前になんて言った。」

「…生きろと。」

「ギールはお前になんて言った。」

「…」

——生きろ…カイ……

カイザは、声を上げて泣いた。昨晩から泣き続けても枯れな
い涙。目からボロボロと溢れ出してはグラスに落ちて、酒に波紋を
生んでゆく。フィオールはカイザの頭を優しく撫でた。

「…ギールはお前に苦しんで欲しいなんて思つちやいないだろ？が、
忘れるな。重みに耐えきれなくなつても、俺がいる。」

「…ミハエル…マスター…」

「生きろ、カイザ。」

「…フィオール…」

気付いた時には、もう遅いこともある。しかし、やり直しの
きかないことなんてない。どんなに躍起になつても失つたものは取
り戻せないが、そんな狭い世界でも見えるものはある。生きていく

道はある。

涙を拭い、何やら一人で笑い出すカイザをフィオールは不思議そうに見つめた。

「…頭おかしくなったか？」

「いや…だてに年取つてないなと思つて…」

「なんだよ！5つしか違わないのに年寄り扱いか？！」

カイザは、そんなに離れてたっけ、なんて戯けながら涙が沈むグラスを手に取つた。すっかりご立腹なフィオールをからかい、再び笑顔で酒を交わす。

夜は更けた。甘美な思い出…とは言えないが、どこか微笑ましい懐かしさを胸に、少しそうっぽい酒を飲む。これからもこうしていけたなら…

——私も…平和な世の中であなたが笑つて…幸せそうにしていれば…それで…――

ミハエルの望みだつて、叶えてあげられる。カイザはその片鱗を視野に入れながら、久々に安心して酔いしれた。

「…で、これはどういう状況？」

昨晚のこと振り返りながらカイザが聞くと、フィオールが振り返つた。

「「」のまま川の字に寝るかーって言つて… 本当は壁側で寝たかったけどミハエルさんの隣は遠慮するとかフィオールが言つて… 仕方なく俺が真ん中に…」

「それは覚えてるー記憶にねえのはこいつだよーこいつー」

フィオールは隣でへラへラ笑うクリストフを指差した。

「もー…覚えてないのか? フィオール。」

妖艶な目つきでフィオールを見つめるクリストフ。カイザはミハエルを抱き起にしてベッドから離れた。

「お前ら、俺とミハエルの隣でそんな…」

顔を引き攣らせて軽蔑の眼差しを向けるカイザにフィオールは慌てて首を横に振る。

「無理! 無理だからー! こいつに手出したら絶対天罰下る!」

「そんな寂しいこと言つなよ、一緒に寝た仲だろー。5分くらい。

カイザとフィオールの首が同時にぐりんとクリストフの方へ向くと、クリストフは楽しそうに笑つて立ち上がった。フィオールは口をパクパクさせている。

「ほら、さつあと改度しろ。もうダリを出て北に向つんだから。」

クリストフに急かされ、一人はのそのそと立ち上がる。

「俺、低血圧なんだよ…」

フラフラと着替えるカイザ。

「俺もだけど…誰かのせいでバッヂリ日が覚めた。」

げつそりして部屋を出て行くフィオール。爽やかな朝に調子が悪そうな二人。

「なんか、顔が違うな。」

空の酒瓶を眺めてクリストフが言った。

「あー…結構飲んだし、浮腫んでるかも。」

「違うつて。なんか、憑き物が落ちたような顔してる。」

シャツに袖を通してクリストフを見ると、少女は酒瓶を朝日に透かして笑っていた。

「鍵持つて辛い思いで決断を述べたあの時より、いい顔だ。」

「バレてたか。」

カイザは鼻で笑って、ボタンを締める。自分でも気付いていた。追い詰められた今になつて一人でないことを教えられ、恐れを抱えた覚悟すら、搖るぎない決意へと変貌していたことに。何でも一人で抱え込んできたカイザをファイオールが変えたのだ。

「ところで…」

クリストフがベッドのミハエルをじっと見つめる。

「お前、エドガーのこと抱いて寝てるんだろう?」

ルークタイをポロリと落として赤面するカイザ。

「な、なんでそれを……」

クリストフは小さく唸りながらハエルを見つめるばかり。

「や、でもいつもはちゃんと椅子に座らせてるんだー。この前は、ちよつといひ……」

「お前、ちゃんと洗つてるか?」

慌てふためくカイザに拍子抜けな質問。

「… わすがに、俺は男だし… 身体洗うとかは… してない。」

カイザが自信なさ氣に答えると、クリストフはきつく目を釣り上げて振り返った。

「肝のちっちは男だな！死体つていつてもお前が毎度ベタベタ触つてんだから洗つてやらないと可哀想だろー！」

「そんなこと言われても…」

カイザは肩を窄めてルークタイを拾い上げた。

「仕方ねえ、あたしが洗つてやるよ。」

「…」

「フィオールにでもやらせるか？」

「クリストフ、綺麗にしてやつてくれ。」

クリストフは得意げに笑つてカイザに歩み寄る。じつと見つ

めてくる少女。カイザは田を泳がせる。

「あとな、まだ言いたいことはある。」

聞きたくない。カイザは反射的に思った。

「お前の格好も気に食わない。」

笑顔で堂々と傷つくことを言い放つクリストフに、カイザは唖然と立ち尽くす。

「まず上からな。」

「上から下までいくのかよ。」

「なんでシャツにベスト着てルーツタイなんかしてるんだ。お前は貴族か。」

カイザのルーツタイを掴んでクリストフは啖呵をきる。

「これはマスターが…」

「それなのによく下にはベストと揃いのスーツで…なんだ、それ、シャツスカ?」

カイザの言葉を遮つて更に突っ込んでくるクリストフ。

「…まあ、そんな感じだな。」

「カウボーイ気取りか。肝はちつちええくせして下は暴れん坊気取りか。」

「これもマスターが…」

さすがのカイザも、しだいに胸がチクチクと痛み始める。

「その上、右腕には盗賊のアーマーして、貴族、暴れん坊、盗賊の三人が同居してるぞお前一人に。」

さすがのカイザも我慢の限界だった。

「全部マスターが選んだんだよ！生まれた時から自分で服を選んだことなんてない俺に、格好がどうの言われても困る！」

「…盗賊のアーマーも、外す気はないのか？」

クリストフの真面目な表情に、カイザは固まつた。

「もう盗賊でもなんでもないんだ。それに、これからあたし達は追われる立場になる。目立つ物は身につけない方がいい。」

「…」

カイザはアーマーの腕章に触れた。

「…無理だ。外せない。」

「ギールのことを忘れろと言つてるわけじゃない。」

カイザは静かに首を横に振つた。

「わかつてゐる。でも、ブラックメリーを受け継いだ以上、俺は盗賊の後継者だから…」

「…まさかとは思うが、盗賊団を継ぐつもりか？」

「無理だろ。頭殺しは大罪だ。でも…それでも俺がマスターから譲り受けたことには変わりない。いつか、本当に継ぐ資格のある奴が現れたら俺を殺してこれを奪い、そいつが新しいマスターとなるだろうから…それまでは、俺が。」

「一生、そのナイフ一本のために追われる身でこよつといつのか。」

クリストフは眉を顰める。そんな少女に、カイザはふっと、笑いかけた。

「俺は、盗賊だからな。」

「…」

不意打ちの笑みに驚く少女。少し不満げな顔をして、ぷいつとわっぽを向いてしまった。そんな少女の様子に、カイザは首を傾げる。

「…だったらルークタイヒシャップスやめる。」

「いや、だからこれはマスターが…」

カイザが身につける全てがマスターからの貰い物。クリストフに毒づかれてそのことを思い出したカイザは、身体を包むそれらに悲しさや懐かしさを感じた。これもファイオールの言つていた重みなのだろうか、と考えながらブラックメリーを腰に携える。盗賊である自分は決して誇れる存在ではない。それでもカイザは迷いなく言つた。いや、言つていた。自分が何者であるのかを。

「盗賊なら追い剥ぎも朝飯前だろつて、なんでエドガーは…」

「もう勘弁してくれ、」

ズバズバとものを言つクリストフに困り果てるカイザ。

誇りも何もない。ただ生きるために、目的のために、彼は盗賊であり続ける。誰かの思いと、自分の心をぎこちなく重ね合わせながら。

女の屁理屈と変貌に男は弱い

ダリを出た三人は大きな街を避けて東へ迂回し、妖精の里ノーラクラウンの宿にいた。

「もう疲れた。」

「俺も…今日明日はゆっくり休もう。」

ベッドに勢いよく倒れ込むフィオール。部屋のソファーにもたれかかるカイザもぐつたりとしながら労わりの言葉をかける。

「あのババア…人をこき使いやがって。」

「俺も今なら言える、ババアって罵れる。」

二人はそれぞれクリストフに言いつけられ、街に寄る度に与えられた…もとい、押し付けられた仕事をこなしていた。フィオールは伝説や鍵に関する情報を攪乱させるための操作と、争いに動き出している者達の情報収集。カイザはフィオールの護衛と、旅の資金調達で盗賊業。ろくに休まず馬で走り、宿をとった夜は街に出て仕事。そんな日々が一週間程続いていたのだ。

「つたくよー！お前は何するんだって聞けば、『あたし？あたしはエドガーの護衛。』って…要するに何もしねえんだろ！」

枕に顔を埋めて足をバタバタさせるフィオール。

「マフィアに追っかけられて死に物狂いで宿に戻つたら、あいつ酒飲んで寝てやがつた。あの時は本当に窓から放り投げてやりたくないつたよ。」

カイザがある晩のクリストフを思い出して額に手を当てた。フィオールは哀れみの目を向けて、大変だつたな、と一言。そして、身体をのそりと起こし、つねだれるカイザを見つめた。その視線に気付くカイザ。

「…何、」

「…お前、何でマフィアや同業者しか狙わねえんだ?」

カイザは言葉を詰まらせ、ふっと視線を逸らす。

「確かにお前の腕は一流だ。スリも盗みも開錠も…お前の技を見てギールが認めるのにも納得した。でもな、さすがに狙いを間違えば命だつて危つい。」

フィオールの言葉に、カイザは表情を滲らせる。

「今危ない橋を渡ることもないだろ?」

カイザは、なんと言つていいかわからない自分の心境を、ゆっくりと言葉にした。

「…〃ハエルを掘り出して業輪が盗まれていると氣付いてから、なんか、盗むつてことに嫌悪感が湧いて…」

困りながら話すカイザを、呆れたよつに笑いながらフィオールは見つめていた。

「相手がマフィアだろうが同業者だろうが、盗むことには変わりないんだが…せめて、誰かの思い出を盗まずに済むなら俺みたいなク

ズを相手にしようつて…」

「何言つてんだよ、」

フィオールはベッドから立ち上がり、カイザの隣に座つて彼の肩を抱いた。

「お前はクズなんかじゃない、どうじょもつない馬鹿だけどな。…貶してるんだよな、それ。」

煙草に火をつけながら疑いの眼差しを向けるカイザ。フィオールはそんな彼を見て笑つた。

「やつぱりお前はギールの後継者だよー」

フィオールに肩を叩かれながらカイザは首を傾げて煙草を吸つた。さつきまで自分の身を案じて怒つていると思わせる雰囲気だつたのに…隣で嬉しそうにしているフィオールが不思議でならなかつた。

そんな疑問を抱かせた当人、フィオールは、マスターを殺して罪悪感に苛まれていたカイザが無意識のうちにマスターに似てきているのが嬉しくてたまらなかつたのだ。

ここでは語られないが、大盗賊ギール・パールマンは知る人ぞ知る英雄だった。それもほんの一時のこと。国を追われて盗賊に成り下がつた彼の英雄伝は、また後程。

「今日の収穫はどうだつた?」

扉の方を見ると、クリストフが顔を出して覗き込んでいた。

「どうちもぼちぼちつてここだな。」

煙を吐き出しながらカイザが答えると、眉を顰めたフィオールがクリストフに歩み寄る。

「収穫どうこう聞く前にお前も働け！」

「あたしだって、いつも遊んでばかりいるわけじゃないぞ。」

相変わらず悪意もなく生意氣そうに笑うクリストフ。少女は一人の前から姿を消したかと思つと…

「どうだ。可愛いだろ？」

扉から現れたのは、ノーラクラウン土産の服を着せられたミハエルだった。黒い髪に映える淡い赤色の花飾りに、それと揃いの花が散りばめられ、刺繡も施された白い膝丈のドレス。フワフワとした妖精の羽を思わせるパニエから伸びる足の先には、白いビロードの靴。

フィオールは綺麗に着飾られたミハエルを見て、わなわなと震えている。クリストフはそんな彼など知らんふりでミハエルをせつせと椅子に座らせ足を組ませたり、ポーズと取らせたりして楽しんでいた。

「やつぱり可愛いな。あたしの見立ては間違つてなかつた！」

「おいババア！何が遊んでばかりいるわけじゃないんだぞ、だ！完全に遊び尽くしてるだろ？が！」

フィオールが形相を変えてクリストフに怒鳴りかかる。クリストフはケロつとして振り返った。

「だつて、いつも死装束じやあ可哀想だろ。」

「死人なんだから当たり前だ！それにその金はカイザが汗水垂らして手に入れた金だ！」

「そのカイザは満更でもなさそつだが？」

フィオールがクリストフの視線の先を見ると、俯いたまま動かないカイザがいた。

「おい？ カイザ？」

フィオールが彼の顔を覗き込むと、カイザは赤くなつた顔を隠すようにそっぽを向いた。その様子にフィオールは呆然と立ち尽くす。クリストフは得意気にカイザに話しかける。

「カイザ、どうだ？」

「…良いと思づ。」

照れ臭そうにボソリと感想を述べるカイザ。それを見てニヤニヤするクリストフと、呆れ顔のフィオール。

「数日はここで休むから妖精エドガーを抱いて寝れるぞー。」

「いや、それは…」

からかうクリストフと赤面するカイザを見て、フィオールは言つた。

「お前ら…これが死体だつてこと忘れてないか？」

クリストフとカイザが一斉にフィオールを睨んだ。その威圧感に顔を引き攣らせて後退りするフィオール。

「これとか言つなよ、ミハエルに。」

カイザが煙草をねじ消して言った。すると、クリストフがそれに便乗する。

「そうだ、謝れ。ついでにあたしをババア呼ばわりしたこととも謝れ。」

「そうだそうだ。聖母クリストフになんてことを…」

「カイザてめえー! さつきお前、今ならババアって罵るとか言ってただろ!」

フィオールとクリストフの言い争いが煩い宿の一室。なんだかんだで三人…いや、四人の旅路も形になってきていた。妖精の服を着て椅子に座っているミハエルも微笑んでいる…ように見える。

「あ、そうだ。まだ買わなきゃいけない物があつたんだ。」

クリストフが思い出したかのように言った。

「もうすぐ北に入るから防寒着買うぞ。」

フィオールがカイザの首を締める手を止めた。

「なんだよ、昼間市に出たんなら買つとけばよかつただろ…」

「あたしが選んでもいいのか? お前らが着るのに。」

「…」

カイザがフィオールの腕を小刻みに叩くが、彼は黙り込んだまま動かない。

「よし、行くぞ、フィオール。」

「は？！」

やつと放されてカイザは首元を抑え、咳き込んだ。フィオールは嫌そうな顔をしてソファーに立ち上がる。

「今からか？！」

「早くしないと店が閉まる。」

「なんで！カイザは？！」

「留守番。」

カイザは苦しそうに笑った。

「所謂…荷物持ちだな…」

げほげほと咳き込みながら減らず口を叩くカイザ。それを憎らしそうに見つめるフィオールは首根っこを掴まれて夜の町へと引きずられて行つた。

「あ、売つてそうだな。」

夜の市場でクリストフは人並みを搔き分けながら一軒の服屋に足を踏み入れた。フィオールは面倒臭そうにその後を追う。羽織物を物色する少女に、フィオールはブツクサと文句を垂れた。

「何で俺が…」

「お前も見ただろ？」

クリストフは一着の羽織を手に取つて鏡を見た。

「嬉しそうだつたじやないか、カイザ。」

「…」

フィオールはミハエルとカイザを思い出していた。旅をするようになつても未だに彼の気持ちがわからない。死体の彼女に怖いくらい執着するカイザ。ミハエルが死体にしか見えないフィオールには理解し難い光景だ。フィオールが考え込んでいると、クリストフがくるりと振り返つた。

「どうだ?」

白い暖かそうな羽織。裾に黒い火のような模様がついている。

「…ふーん。」

「…意見の一つも言えないのか、お前は。」

目を釣り上げて感想を求めるクリストフ。正直、フィオールはどうでもよかつた。そんな彼の視界にある物が飛び込んできた。

「…似合つ似合つ。でもお前、そんな寒そうな格好の上にそれ一枚だけ羽織るのか?」

フィオールは二タ二タしながらクリストフを見つめた。その様子に、少女は怪訝な顔をして羽織をフィオールに投げつけた。

「いやらしい目で見るな、変態。」

「ぱつ…そんなんじやねえよ。」

慌てて頭に投げつけられた羽織をズリ下げたフィオールは叫んだ。

「だいたい！そんな下着みたいな格好して谷間見せつけておきながら見るなと言う方がおかしい！」

「これは立派な服だ。うちの国の伝統衣装だ。」

クリストフはぱこつとわっぽを向いて反論する。フィオールも負けじと言い返す。

「そんなの見てくれ襲ってくれと言つてるようなもんだろー。」

「はっ！伝統衣装や流行り物を着てる女を、男は誘惑していると思っているのか。単純だな。勘違いも甚だしい。」

フィオールはぐつと言葉を飲み込んだ。

「何度も言ひ。これは列記とした衣服だ。お前達を発情させるために着ているわけじゃない。」

不敵な笑みを浮かべて言い放つクリストフ。フィオールの中で何ががブチ切れた。

「寒そりだから心配してやつたんだよーお前にそいやらしく目で見られたとか、自意識過剰なんじゃないのか？！」

「実際にさつき怪しげに笑いながらあたしの身体を上から下まで舐るように見回してただろつ。」

フィオールは先程視界に入った物を手に取つて、クリストフに見せつけた。

「俺はなー寒くなるからこいつのを着たらいいんじゃないかと思つたんだ！」

フィオールが差し出す服を見て、クリストフは言葉を失つた。
確かに、暖かそうだ。暖かそうだが…

「…」こんなブリブリの服、着れるか。」

クリストフが唖然とするのも当然。フィオールが手にしていたのはミハエルが着ていた物の型違いだつたのだ。

「俺は思つたよ、あのミハエルさんよりお前の方が似合つて。」「は？！」

クリストフの奇声が店内に響くと、店員が足早に駆けつけてきた。

「あ、コレ。こいつに試着をせてやつて。」

フィオールは服を店員に手渡し、クリストフの頭を抑えつけながら試着室に少女をねじ込んだ。

「おー！絶対着ねえぞ！」

「こいつこんなこと言つてるけど照れてるだけだから。力尽くでも着せてやつてくれ。」

店員は困惑しながら何故か必死に頷いていた。騒ぐ程嫌がるクリストフと無表情のフィオールに何か唯ならぬ空気を感じたようだ。少女と店員はカーテンの奥に消えた。

ギヤーギヤーと騒がしい試着室を横目に、フィオールはニヤ

ニヤしながら自分とカイザの羽織を物色していた。彼は普段の鬱憤を晴らすため、少女に似合いそうにもない服を着せて大笑いしてやろうと考えていたのだ。ミハエルとは対極的なクリストフにミハエルが着こなした服の型違いなんて似合うはずがない、と。

「触るな！それくらい自分でできる！」

「しかし、恋人を喜ばせるには外した方が…」

「恋人じゃねえ！」

試着室の会話に、フィオールは固まってしまった。店員にあらぬ誤解を招いてしまったようだ。

「あとは、この靴を履けば旦那様も…」

「旦那じゃねえよー勝手に話進めんなー！」

フィオール選んだ羽織で顔を隠し、しゃがみ込んでしまった。少女を辱めるつもりが、自分まで恥ずかしくなつてしまふなんて…。フィオールはバクバクと音をたてる心臓が落ち着きを取り戻すのをじっと待つた。

「…あーもう！それだけは嫌だつて！」

少女の叫びと共に、カーテンが勢いよく開いた。驚いたフィオールがしゃがんだまま顔を上げると、そこには頬を赤らめ、困ったようにカーテンを握るクリストフがいた。威圧感を放つ金のアクセサリーを外し、フワフワしたドレスを身に纏つた姿は聖母ではなく、まさしく少女であつた。

フィオールはすっかり忘れていたが、外見年齢だけならば16、7で誰もが振り返る容姿のクリストフ。似合わないはずが、なかつたのだ。フィオールは口を開けて少女を見つめていた。色白なミハ

エルのしつとりとした雰囲気とは違い、クリストフの、ドレスから覗く褐色の肌は無邪気な印象を与える。しかし、カーテンにしがみついて恥らう少女の姿に、フィオールは…

「…負けた。」

「なつ…あたしがエドガーに勝てるわけねえだろ！何考えてんだ！」

怒鳴る少女から皿を逸らして羽織に顔を埋め、首を小さく横に振るフィオール。

「…似合つてゐる。」

「…は？…なつ、何言つて…」

「可愛い…」

うなだれるフィオールの言葉に、少女は顔を真っ赤にしてカーテンを閉めた。

「ね？旦那様も似合つてるとおしゃつて…」

「だから、旦那じやねえつて言つてんだり…」

フィオールは皿だけ出して試着室の方を見た。そして、また下を向いた。

「…くそつ。ババアのくせに…あれ着たらただのガキにしか見えねえ…」

立ち上がって、少女が放り投げた羽織を拾った。

「…待てよ？そんなガキにときめくなんて…俺…」

フィオールははっと顔を上げた。

「まさか、変態…？」

「誰が変態なんだよ。」

突然背後から声をかけられ、跳ね上がり驚くフィオール。振り返ると、不機嫌そうなクリストフがじっと睨んでいた。いつも露出度の高い服、派手な金のアクセサリー、黄金色の瞳が埋まる、鋭い吊り目。

「あ、いや…」

「…選んだか。」

フィオールが頷くと、少女は彼が持っていた羽織を受け取つて背を向けた。

「次、あたしの靴買いに行くからな。」

そう言って少女は金を払いに店員のところへ歩いて行つた。その背中を見つめた後、カーテンが開かれた試着室に目を移すフィオール。そこには、脱ぎ散らかされたドレスがあつた。

「…」

女であれば可愛らしい格好にも憧れるだろうにクリストフからはそういう雰囲気は微塵も感じられない。せっかく似合うのに、どこか勿体無いような気がした。少女は、女としての喜びやなんかを諦めてしまったのだろうか…

フィオールは深く息を吐いて、精算するクリストフの小さな背中を見つめていた。

「また、旦那様どっこい来店ください。」

「…もう一度とこねえよ。」

眉をヒクつかせてクリストフは言った。もつ弁解するのは諦めたようだ。

その様子を見ていたフィオールは考えていた。美女の一人であるミハエルが生きていたとして、カイザと結ばれることはあったのか…仮にクリストフと自分が結ばれたとして上手くいくのか…考えても仕方のないことだとわかつていながらも、頭をぐるぐると回る。不思議な不安が、ぐるぐると。

そして男は年齢問わず英雄になれる

ノーラクラウンを訪れて三日目の夜。明日には町を出ようとしていた三人は繁華街の酒場で夕食にしていた。久々の酒に唄りを上げるフィオール。カイザも思わず頬を緩めた。

「カイザ本当にありがとう！クリストフに有り金全部奪り取られてもう駄目かと思ったが…お前が稼いでくれるからこんな美味しい酒にありつけた！」

「気にするな、俺もお前がいて助かってる。」

机に突っ伏して泣きながら喜ぶフィオールの肩を、カイザが優しく叩いた。そんな二人を横目に睨む人物が一人。

「おい、あたしにも感謝しろよ。」

「出たな、金の亡者クリストフ。」

肉をつまみながらフィオールが不満気なクリストフを笑う。

「金の亡者って言つたな！お前ら男はそういうのに疎いから、あたしが管理してやつてんどうが！」

グラスをテーブルに叩きつけるクリストフ。すると、カイザが顎に指を当てて考えだした。

「そういえば俺、アイダでフィオールの居所を聞いて1万ペルー払つたな…結局、角曲がつてすぐのとこの酒場で後悔した。」

「あー、俺も。伝説の話聞いて100万ペルー払つた。釣りはいらねえ！って言つて。」

札束を叩きつける素振りをして話すフィオール。それを見てクリストフは勢いよく吹き出した。霧吹状になつた酒は真正面にいたフィオールの顔面と、その隣のカイザの顔右半分に思いきり吹きかかる。

「お前ら……本当に何呆だな！」

信じられないと言わんばかりに目を見開いて怒鳴るクリストフ。カイザとフィオールは目を瞑つて眉を顰めている。

「そんな使い方してるからいつまでもその日暮らしなんだよ！」
「そんなこと言って、お前だつてカイザが稼いだ金で酒飲んだり死体に服買つたり、無駄遣いしてんじゃねえか！」

フィオールが顔を拭きながら言い返す。隣のカイザはうんざりした顔で濡れた部分に布巾を撫でつけていた。

「あれは無駄遣いじゃねえ！そつだよな、カイザ！」

着飾るミハエルを思い出し、また赤面して額に手を当てるカイザ。

「……いい仕事したよ、クリストフ。」

「お前はどうちの味方なんだよ！」

フィオールがテーブルに頭を叩きつけて叫んだ。勝つた…と小さく呟いて鼻で笑うクリストフ。カイザは申し訳なさそうにふてくされるフィオールを見つめる。

「とにかくわたしに任せとけばいいんだよ。たまにはいつしても贅沢もさせてやるんだから。」

グラスの酒を一気に飲み干すクリストフを睨んでフィオールは言った。

「カイザはもう屈服してるみたいだがな、俺はずつと抗議し続ける！」

激しく言い争う二人にカイザは迷惑そうにしながら言った。

「屈服なんかしてない。でもミハエルの死装束以外の姿が見れて、その…嬉しくて。」

恥ずかしそうにするカイザを見て、堪らず彼の頭を撫でるフィオール。

「そういう素直なところ…可愛いな。」

「…酔ってるだろお前。」

冷たい眼差しでフィオールを見つめ、カイザは酒を口にした。

「でもカイザはエドガーと恋仲だったんだろ？」

クリストフの言葉にカイザは酒を吹き出した。至近距離で顔面に吹きかけられたフィオールは、そのまま固まってしまった。

「だったら、他にもいろんな服着てるところ見れただろ。しかも生きてる時に。」

カイザは表情を曇らせつつ口元を拭く。フィオールもカイザを睨みながら顔を拭いていた。

「…そんな関係じゃない。」

「じゃあ、どんな関係だったんだよ。」

突き詰めてくるクリストフ。言葉を濁らせるカイザ。そこで、顔を拭き終えたフィオールがグラスを手にして言った。

「俺も気になつてたんだ、もう教えてくれてもいいんじゃないのか？」

こんな優しく問いかける彼だが、内心、何処かで二人に酒をぶつかけてやるうつと思つていたのだ。そうとも知らず、カイザは重たい口を開いた。

「俺が」ノースの近くにある墓地へ墓荒らしに行つた時、ミハエルと出会つたんだ。」

少しずつ明かされるミハエルとの思い出。出会つた満月の夜、怖い夢を見た日、初めて一人で出掛けたこと、鍵を受け取つた別の夜：言葉にすると短いが、カイザの中では永遠のように長く、幸せな日々。

「…俺はミハエルが着飾つたところなんて見たことないんだ。墓守だからか知らないけれど、いつも喪服だつたから。」

カイザが話しあると、フィオールは口に含んでいた酒を一口クリと飲み込んで涙を流した。

「よかつたなー! ミハエルさんの晴れ姿を見れて…本当によかつたなー!」

「…お前やつぱり酔つてるだろ。」

抱きついて泣くフィオールを引き剥がそうとするカイザ。クリストフはしんみりして呟いた。

「お揃いの鍵、ねえ…それってお前が持つてる鍵と業輪のことだよな。」「…だと思つ。」「…

そう、盗まれたのはただの宝物ではなく、二人を繋いでいた絆の鍵だったのだとカイザは気付いた。カイザは悲しそうに俯く。

「そりゃあ、余計に探し出さないとな。お揃いなんだから。」

クリストフが優しく笑いかける。カイザも微笑み、ああ、と言つて頷いた。

「俺も手伝つからな?」「ありがとう、離れる。」

酔っ払つて絡んでくるフィオールがうざつたくて仕方ないカイザは片手で遠ざけながら酒を飲む。それを見てクリストフは笑つていた。そんな時、

「見つけたぞ!」「捕らえろ!」

騒がしくなる外。クリストフはピクリと眉を動かして窓から

顔を出した。

「なんだ？うるせーな。」

フィオールも窓を開けた。カイザも身を捩らせてひょっこり外を覗き込む。三階からでは少し遠いが、通りが何やら騒がしい。すると、三人が顔を出す窓の下で人混みから飛び出してきた女が一人派手に転んだ。

「おーい、どうしたー？」

下に向かつて叫ぶクリストフ。女が三人に気付いて顔を上げた。その姿に、カイザとフィオールは驚いた。

真っ赤な髪に真っ赤な瞳。何より、闇に艶めく真っ赤な唇：情熱的な風貌とは裏腹に小動物のように瞳を潤ませる可愛らしい顔立ち。

「び、美人！なんで！あんな子がいるのになんでクリストフが神の寵愛を…」

クリストフはフィオールの頭を鷲掴みにして窓の縁に押し付けた。

「いてえ！」

「…あの子、何だ？」

クリストフは何も答えない。赤い女ははつと振り返り、慌て立ち上がる。女の視線の先には十人程の兵士がいた。兵士は女にずりずりと寄つてゆく。後退りする女の前に、小さな少年が飛び出してきて大きく両手を広げた。ざわめく人並みに、増える野次馬。

「ア！」をどけー。」

兵士を率いていると思われる男が少年に剣を突きつけるが、少年は動じない。

「坊や、逃げてー。」

女の言葉も聞き入れようとはしない。

「おい……やばいんじゃないか？」

苦しそうにフイオールがそつまつと、クリストフは手を離した。

「あの女、森に食われてる。」

「森に？」

クリストフの喉にカイザが問いかけるが、やはり少女は下をじっと見つめるばかり。

「邪魔をするなら」の場で切り捨てるー。」

兵士がそう叫ぶと、人混みがどよめいた。少年はそれでも兵士を睨み続け、言った。

「お前らが……お前らが悪いんだ！みんな知ってるんだぞ！領主が何をしたか！」

少年が叫ぶと、急に静かになった。

「妖精を虐めたから、森の恵も受けられなくなつた！姫様が死んだのも、お前らのせいだ！領主のせいだ！」

「黙れ！」

兵士が剣を振り上げた。悲鳴が上がり、見ている者達が息を飲む。カイザとフィオールが窓から飛び降りようと身を乗り出したが、身体が窓に引っかかつてしまつた。二人は互いを邪魔だといがみ合つう。

「やめて！」

女の声に一人が視線を窓の外に向けると、女が少年を庇つて抱き締めている。剣が振り下ろされ、血が噴き上garのを皆が覚悟した。フィオールは、目を瞑つて顔を背けた。

沈黙。フィオールがゆっくり瞼を開くと、隣には口を開けて驚いているカイザがいた。その視線の先には…

「女の尻追っかけて餓鬼に手をかけるなんて…」この兵士は山賊以下だな。」

「…は？え？クリストフ？！」

少女がいたはずの席を一度見して驚くフィオール。兵士の剣先を人差し指と中指で挟みつけて笑うクリストフに、カイザは言葉を失つっている。

「なんだお前は！邪魔をするならお前も…」「あたしを？どうするの？」

クリストフは指先で剣を真つ一つにへし折った。それを見て再びどよめく人混み。更に口が開いてゆくカイザとフィオール。

「なつ…」

「臭い尻尾巻いて逃げたらどうだ? 兵士さん?」

クリストフの挑発的な態度に顔を赤くして怒り始める兵士。

「この女も捕らえろ! 邪魔をする奴は皆、反逆罪だ!」

折れた剣を振りかざす兵士。後ろで群れていた兵士達がクリストフへと向かつてゆく。それを見てカイザとフィオールは再び窓の外に身を乗り出した…が、今度は引っかかることなく、窓枠ごと下に落ちてゆく。二人の叫び声に気付いたクリストフが女と少年を抱いて退くと、一人は見事に兵士達の上に着地…いや、落下した。

「いっ…てえ…」

「あ、取れたぞ、窓枠。」

下側のフィオールは腰を抑えながらヨロヨロと立ち上がる。うまい事上になつたカイザはピンピンしていた。そんな二人の周りには、伸びた数人の兵士と木つ端微塵になつた窓枠。クリストフは腹を抱えて笑っていたが、女と少年は畳然として一人を見つめていた。

「格好悪い登場だな!」

「うるせーー窓が狭いのが悪いんだよーついでに抜け駆けしたお前もな!」

フィオールが痛みと恥ずかしさのあまり爆笑するクリストフ

に八つ当たりする。その後では兵士の一人が剣を振り上げていた。
女がそれに気付いた。

「危ない！」

フィオールは振り返り様に持っていた荷物で兵士を殴りつけた。

「てめえはすつこんでろー！」

情報屋フィオールの荷物は殆どが商売のための資料。分厚く硬いそれを脳天に喰らつた兵士はばつたりと倒れて動かなくなつた。その向こうではナイフ一本で兵士数人と応戦するカイザがいた。

「やつちまえ！」

「くたばれ兵士共！」

しだいに里の住民達はカイザ達を支援し始める。兵士を次々と片付けてゆくカイザとフィオール。酒瓶片手に高みの見物をするクリストフ。四面楚歌の雰囲気に、率いていた男は震える足で逃げ出そうとした。

「あー待てこらー！」

フィオールがそれに気付くと、男は踵を翻して走り出す。

「部下を見捨ててやるなよ、」

男は何時の間にか目の前に立ち塞がっていたクリストフに驚き、その場に尻餅をついた。クリストフはにつこりと笑つて男の頭

を蹴り飛ばした。男は勢いよく屋台に頭を突っ込み、動かなくなつた。

「そいつから金田の物はすつたし、もう逃がしたかったのに… そうしたら伸びてる兵士をネタに一稼ぎできたぞ。」

カイザが男からすつた剣や金の紋章を手に文句を垂れた。

「さすがカイザ！なんかもう、職業病だな！」

「…お前こそ真の金の亡者だよ。」

関心するフィオールと呆れるクリストフ。三人を囲む住人達は歓声を上げて三人を褒め称えた。

「すげえぞ！」

「兵士共、やまあみろー！」

そんな中、人混みに逃げていた少年と女が駆け寄ってきた。

「おねえちゃんたち、格好よかつた！ありがとうー。」

笑顔で感謝する少年の頭を、クリストフは優しく撫でた。

「ボウズも格好よかつたぞー、な？」

クリストフが女に同意を求めるど、女は泣きそうな笑顔で頷いた。

「ありがとう、坊や。ありがとう、見知らぬお方。」

頭を深々と下げる女に、微笑む三人。

「なんかよくわからねえけど、いい事したし飲みなおすか！」

そう言つて歩き出すフィオールに続いてカイザとクリストフも歓声の中、女に背を向けた。

「うちで飲んで行きな！今日は気分もいいし奢るよー。」

氣前の良さそうな太った女性が三人に声をかけてきた。

「いいのか？」

クリストフが聞くと豪快に笑つて女性は言つた。

「当たり前だろ？坊やと妖精を救つてくれたんだからねえ！」

カイザとフィオールが顔を見合させる。クリストフは何かを知つているようであつたが、じつと黙つていた。

「あ、あの！」

カイザとフィオールが振り返ると、女が物言いたげに見つめていた。そして、黙つていたクリストフが口を開いた。

「…おばちゃん、あの妖精さんも一緒にじこ馳走してもらつてもいいか？」

クリストフの言葉に、カイザとフィオールは少女と女を交互に見つめた。

「よ、妖精？」

「あの美人さんが？」

困惑している一人を他所に、おばちゃんは景気よく言った。

「いいよいよ…四名様御来店ーー。」

そう言つておばちゃんが入つて行つたのは、カイザとフィオールが窓枠をぶち壊した店だつた。更に驚く一人。

「…俺、今酒飲んでたら絶対吹き出しちゃう。」

顔を引き攣らせてカイザが言つた。

「俺も…鼻から肉も吹き出てたよ。」

両手で顔を覆つて嘆くフィオール。女が妖精だと言われた驚きと、おばちゃんの店で窓の弁償を要求されないかという不安に二人の表情は何やら複雑だ。しかし、女を連れて重たい足取りで店に戻つた。住人達の歎声を、背中に浴びながら。

そんな男は女の涙に特に弱い

肩を窄めてもといった席に戻る一人だったが、おばちゃんは窓のことなど全く気にしていなかつた。大きな見た目に見合つた大きな器の女性である」とに安堵し、ホツと窄めていた肩を撫で下ろす一人。

「なーにーーーのくらい氣にしなくていいからじゃんじゃん飲みなー！」
「ありがとうおばちゃん…じゃあ、とりあえず酒でー！」

遠慮無しに注文をするフィオール。

「はいはい、いい酒が入つたから持つてくるからねー！」

おばちゃんは一瞬一瞬しながらその場を去つて行つた。

「いい人でよかつたな。
「本当だよ。」

もしもの事があつたら飯代も踏み倒して逃げるしかないと思つていたカイザは脱力して椅子に寄りかかっていた。フィオールの言つとおり、もうこれは立派な職業病だ。

「…それより名前、まだ聞いてなかつたな。」

クリストフが真剣な声色で言つた。安堵していた二人も、クリストフの隣に座る女を見た。女は名乗ることを渋つてゐる様子だ。

「そりゃあ、言えないよな…お前、人間だし。」

「…は？！」

グラスを手にするクリストフの言葉に、フィオールは声を荒げた。カイザは眉を顰めて首を傾げている。もう何がなんだかわかつてない。女は俯いてじつと黙り込む。

「お待たせーー！」

そこには、おばちゃんが葡萄酒の瓶と料理を持ってやってきた。

「…なんだい？皆して黙りして。」

テーブルの空気を敏感に読み取るおばちゃんに、フィオールは慌てて言った。

「いや、大丈夫だからー皆緊張してるだけだからー！」

「そうかい。あんたら見たところ余所者のようだし、妖精を見たのも初めてだろうしねえ。いろいろ話聞いて楽しんで行きなー！」

アイダのマスターといい、ここのおばちゃんといい…酒場の店員は侮れない。去つてゆくおばちゃんの背中を見つめて、そう、フィオールは思った。

「…なあ、あんたは何者なんだ。」

静かなテーブルで、カイザは口を開いた。

「…」

「店主は妖精と言つし、クリストフは人間だと言つし…」

女は困った顔をして、瞳に涙を浮かべる。カイザはそれを見てギョッとした。

「おい！泣かすなよ！」

フィオールがカイザの耳元で囁く。

「俺はただ…」

カイザもオロオロと困っていると、クリストフが溜息をついた。

「この女は妖精に見初められ、人間じゃなくなってるんだよ。勿論、完全な妖精でもない。」

クリストフがそう言つと、カイザとフィオールは表情を一変した。

「妖精に見初められたって…フィオールの話と同じ…」

フィオールがノーラクラウンで収集した情報は伝説と関係はない、国情勢についてばかりだった。その中に、城の塔に閉じ込められていた姫が妖精に見初められ、火事で燃え死んだという話があつたのだ。話によると、姫を妖精に差し出さなかつた事で妖精は怒つて火事を起こし、森の恵も受けられないようにしたんだとか。この話を知っていた三人は少年の訴えを理解していた。クリストフ以外は夢物語だと信じていなかつたが。

「…どうしたことだ？姫は死んで？この子が見初められて？名前が言えない？」

混乱しているフィオールに呆れるクリストフは、グラスの酒を飲み干し葡萄酒の瓶を取つてグラスに注ぐ。

「この女が、そのお姫様なんだよ。」

クリストフの言葉に、まだちんぷんかんぷんなフィオール。

「そうこうとか…」

「え？…どうこう」とだよ…。」

フィオールは一人で納得するカイザの肩を掴んで問いかけた。

「だから、死んだと思われていた姫は実は生きてたんだよ。そして、今は妖精としてここにいる。」

「…へえ…」

カイザの説明に腑抜けた返事をしてフィオールが女に目を移すと、女はポロポロと涙を流していた。

「ななな、泣かないで！俺らが泣かしたみたいになる！」

フィオールはあたふたして意味も無く手を動かしている。女はぐずりながらゆっくりと話し出した。

「…おっしゃる通り、わたくしは領主の娘ニアにござります。」

クリストフは泣いているニアにナプキンを手渡した。ニアはぺこりと頭を下げる、それを受け取る。

「皆さんの腕前を見込んで、お願ひがござります。どうか、塔に囚われた我が夫…火の妖精である夫と娘を…助けてください。」

嗚咽しながら弱々しく切願するニア。

「いいぞ。」

即答するクリストフに驚いてカイザは咥えていた煙草をボロリと落とした。頼んだ本人も驚いていた。

「ちょっと待てよ…」

「いいじゃねえか、カイザ。 美人が困ってるんだぞ？」

話もわかつていなかつたくせに何故かノリに乗つているフィオール。

「そうじやなくて、いいのか？俺達なんかで。」

カイザが聞くと、ニアはコクコクと頷いた。

「なんかつてなんだ。なんかつて。」

クリストフが葡萄酒の瓶を握り締めてカイザを睨んだ。

「だつて…なあ？あなたの隣にいるのは金に煩い山賊。俺の隣のこいつは短気な情報屋…」

カイザの酷い紹介に、ニアは不安気な顔で聞いた。

「…あなた様は…？」

「俺？俺は…」

「根暗な盗賊だ。」

クリストフがサラリと言つた。カイザは深く頷いて同意しているフイオールを横目で睨み、ニアに向き直つた。

「…とりあえず、こんなのはっかりだ。頼むなら他の奴にした方がいいと思う。それに…俺達はこれでも先を急いでいるんだ。」

ニアは一瞬黙り込み、フルフルと首を横に振つてカイザに真剣な眼差しを向けた。この時三人は、あ、こいつ今迷つたな、と心中で呟いていた。

「お急ぎのところ、図々しいことは承知の上でお頼み申し上げます。どうか…どうか夫と娘を！」

考えを変えさせたかったカイザは当てが外れて困つたようにな俯く。そんな彼に、葡萄酒を独り占めするクリストフが言った。

「いいだろ、妖精一匹と娘一人塔から連れ出すだけなんだ。帰りしながらでもやつてやろうじゃないか。」

ニアの表情がぱあっと明るくなる。それに反して、カイザの表情が曇つてゆく。

「田立つことはしない方がいいんじゃないのか？急ぐ身でありながら追われる身もあるわけだし。」

「そんな急いでもどうせダンテを探すのに時間はかかる。少しくらい寄り道をしてもいいだろ。」

クリストフの言動に、カイザは違和感を感じていた。どうもこのニアという娘に拘っているように思える。それに、彼女が隣に座つてからクリストフは一度も笑っていない。普段ならどんな時でも憎たらしくなる程ニヤニヤと笑っているのに。

「やうと決まれば作戦立てないとな…」

、
　　ファイオールは酒も入つて妙な張り切り方をしている。カイザは一つ溜息をついて、クリストフの言い分に折れた。

「あらがとうござります…監さん！」

再び泣き始めるニアに優しく微笑みかけるクリストフ。そんな少女を、カイザは煙草の煙越しに見つめていた。

幸せの先にも不幸の先にも死が待っている

「クリストフ、」

「なんだよ、眠いから話しかけるな。」

フィオールの軒が響く狭い部屋。そこはニアに案内された妖精の隠れ家であった。ニアを助けたことで町の宿に身を置くのは危ないだらうということになり、酒屋を出てすぐに移動していたのだ。そしてノーラクラウンを出る前にニアの夫と娘を助けるため、夜が明けたらすぐ塔へと向かう。

木の匂いが立ち込める窓一つない暗がりで、カイザは言った。

「なんであんな面倒を引き受けん気になつた。兵士を追つ払うのは訳が違つ。」

「…気まぐれだ。」

クリストフはカイザに背を向けて不機嫌そうに返事をした。カイザは低い天井を見つめながら、再び話しかける。

「お前は人助けなんてする柄じゃない。何か思うことがあつたんだろ。」

「…あたしは仮にも聖母だ。」

クリストフはモノモソとうつ伏せになつて枕元の煙管を探りで取つた。

「気まぐれで無償に人を助けもする。」

クリストフは煙管に火をつけた。

「お前は聖母なんかじゃない。」

煙を吐き出し、クリストフはそこにいるであろうカイザを横目に睨む。

「…ほんつとに失礼なことを…」

「お前は普通の女だ。」

カイザの言葉に、クリストフは一瞬固まつた。そして、鼻で笑つた。

「…何言つてんだよ。あたしが普通？剣をいとも簡単にへし折る女だぞ？この形で息子がいて、山賊を従えて…」

「生意氣で、ガサツで…たまに優しい、身内には。」

困惑するクリストフにカイザは淡々と話し続ける。

「困つた人間がいれば助ける…なんて聖人君子は想像の産物でしかない。人は何か心動かされるものがない限り、誰かを助けようなんて思わない。」

「…あたしが、人？」

「違うのか？」

暗闇で薄つすらと見える互いの目を見つめ合つ二人。その一瞬が、少女はとてつもなく長く感じた。

長い時間の波に揺られ、感情もボヤけて傲慢な誇大妄想だけが自分というものを保っていた日々。聖母として崇められ、ローザとして外に出て、少女は自分が人であることすら忘れて生きてきた。そんな少女が見せた、人らしく感情で動く姿をカイザは見逃さなか

つた。そして、今もこの暗闇で少女を見つめている。聖母でもなく、母でもない。少女自身を見つめている。

「…

少女は黃金色の皿を泳がせ、口元だけで笑った。

「…カイザ、エドガーとお前が出会ったのは偶然なんかじゃないかもな。」

カイザはゆっくりと身体を起こし、椅子に腰掛けるミハエルを見た。運命すら感じていた出会いだったが、他人に言われると不思議な気持ちになる。

「あたし達を人扱いするなんて、お前は変わってるよ。」

「…人が人である定義すら曖昧だ。ミハエルがエドガーだと知つても、死体だとわかついても、俺は…」

彼女が彼女の形を成してそこにある。それだけでカイザにとつては人であるに足る。いや、愛するに値する。それは彼女だからであつて、もしカイザがミハエルと出会わなければ寵愛を受けた美女達を人として見れたかは定かでない。全ては、彼女が基準となる考え方でしかないので。

「…そうか。わかつた。」

少女はカイザが詰まらせた言葉の先にある意を察した。カイザの都合のいい解釈でしかないそれすら、少女は嬉しかった。

「お前の言うとおりだ、カイザ。」

クリストフも身体を起こした。そして、ランプを取り、明かりをつける。すると、フィオールが渋い顔をして薄つすらと目を開いた。

「…なんだ？」

背後でのそのそと起き上がる彼を他所に、クリストフは真剣な眼差しをカイザに向ける。リノアの地下通路で見たときのよう、黄金色の目をテラテラと、鋭く光させて。

「教えてやるよ、あのお姫様を助けようと思った理由。」

「…そんな目をするなんて、秘められた真実でも明かすような雰囲気だな。」

クリストフは、眉を寄せて俯く。その様子にカイザはただ黙っていた。凶星であると、わかつたからだ。

「おい、どうしたんだ?」

目を擦りながら問いかけるフィオールに、カイザは言った。

「今からもう一つ、クリストフが明かしてくれるんだよ。」「明かす?」

カイザはクリストフの背後で首を傾げるフィオールを見た。

「…たぶん、業輪の秘密。」

カイザの言葉に、フィオールとクリストフは驚いた顔をした。

少女に至っては、恐れをなしているようにも見える。

「…何故、わかる。」

「勘だ。」

クリストフは驚いたことを悔いてムツとする。クリストフはチラッとカイザを見て、布団から立ち上がり一人に背を向けた。そして、左腕にしていた山賊のアーマーを外した。

「…これが、業輪を手にした者の運命…違うな、人外の者に見初められた者の宿命だ。」

声も出さずに見つめる一人。その視線の先には、赤黒い蛇の鱗のような痣が広がる少女の左腕があった。肩から指先まで痛々しく広がるそれは、今にも波打ち出すのではないかと思う程にくつきりと闇に浮かび上がる。

「クリストフ…それは…」

フィオールが声を絞り出して聞いた。クリストフは背を向けてまま、言った。

「…与えられると同時に、使命も課せられる。あたし達四人は部屋を開くためこの痛みを身体に刻むことを義務付けられた。」

少女の声は、酷く小さく、震えている。その様子から刻んだ痛みとやらがどれ程のものであったか、カイザとフィオールは漠然と思い浮かべてみるが…あの強気な少女が思い出すだけで震えているのだ、想像もつかない。

「なんで……神はお前達を愛しているんじゃないのかよ……」

フィオールが立ち上がり、強く問いかける。クリストフは左腕にアーマーをはめながら首をうなだれた。

「…

「なんで黙ってるんだよ！」

フィオールは少女の肩を掴んで無理矢理振り返らせた。そして、立ち尽くしてしまった。何故なら、少女が静かに泣いていたからだ。眉を顰めて涙を流すその姿を見て、フィオールは小さく首を横に振った。

「……お前が泣いているのに、なんで、神は……」

フィオールは、思わず少女を抱き締めた。背の高いフィオールの腕の中に、華奢な少女はすっぽりと収まってしまう。

「…

カイザは、ミハエルを抱いて部屋から飛び出した。すぐ表は月が明るく照らし出す森になつていて、本来ならば人が立ち入ることのできない森の一角……それが、妖精の住処。外の切株に腰掛け、カイザはミハエルを見つめた。固く閉じた瞼、薄い桃色の唇、陶器のような白い肌、胸元の紐の蝶結び。それを解けば、滑らかな肌が露わになる……はず。そう思いながらも、脳裏では写真を捲るようにクリストフの左腕が交錯する。そして、震える手で死装束に手を伸ばす。

「見ない方が、宜しいのでは？」

カイザが顔を上げると、森の影に人影が見えた。それはゆっくり近づいてきて、月の下で明るみに出る。

「…ニア、」

ニアは悲しそうに笑って、カイザに歩み寄る。

「あの方はわたくしを哀れんでくださったのです。」

「あの方つて…クリスマス、だよな。」

カイザの隣に座つて、笑顔で頷くニア。カイザはミハエルの服に伸ばしかけていた手を引っ込めて、その冷たい肩を抱き寄せた。そして、愛おしさうに頭を撫でる。

「…わたくしの命があと僅かだと、あのお方は察したのでしょうか。」

カイザは穏やかな声で言つニアを見た。彼女はやはり、笑っていた。

「クリスマス様やわたくしのように人なつざる方から寵愛を受ける者は、必ず使命を課せられます。」

「使命…」

「ええ。クリスマス様は生きとし生けるもの全ての罪や業を痛みに変えて償い、大地の歪みを正すのが使命です。業を司る蛇に蝕まれた左腕は、使命を遂行してきた証。そして、痛みの代償に特別な室を得た…」

真っ直ぐに森の影を見つめてニアは言った。

「わたくしも、父の罪を償わねばなりませんでした。そのためには人を辞めねばならなかつたのです。」

「人を辞めるのに、どうして死ななくてはならない。」

カイザが聞くと、ニアはふつと笑つてカイザを見た。真つ赤な瞳が、瑞々しい。

「…そればかりは、わかりません。しかし、人でもない、妖精でもないわたくしを束の間でも夫は愛してくれる…それが命の代償にわたくしが賜る、”特別な一室”なのです。」

カイザは辛そうな顔をして俯いた。

「…怖くないのか。」

「ええ。夫に出逢わなければ、愛も何も知らないままに一生を終えていたでしようから。短くとも幸せな日々を『えられた』ことに、感謝しています。」

遠い昔を思い出すかのように空を見上げるニアの横顔に、カイザはかつてのミハエルを重ねていた。あの時、ミハエルもこんな満ち足りた顔をしていた。幸せを噛み締め、死を覚悟しているニアのようだ…

北のダンテは大氣の穢れを払う。東のヤヒコは海の淀みを清める。南のクリストフは大地の歪みを正す。西のエドガーは月の姿を留める。業輪をもつて使命を果たし、四人の手の内で回すことによつて秩序と均衡を保つ。身体に刻まれし慰痕がその身を覆いし時、美女は永遠の魂を得て天界に住まうことを許される。

黒い雨が降る夏の日。少女の呻き声が屋敷に響いていた。

「母さん！母さん！」

痛みのあまり痙攣している少女の傍らで、ガトーが必死に呼び掛けた。少女はベッドの上で屈み左腕を抑えたまま時折小さく呻ぐ。

ガトーは今にも泣き出しそうな顔で少女を見つめる。

「…いやない。永遠の魂などいやない！」

少女はガクガクと震える手で枕元の業輪を掴んだ。乱れた髪、見開かれた焦点の合わない目。少女は形相を変えて叫んだ。

「いつまでこの痛みに耐えねばならぬ…20年もこの様だ…もう…
沢山だ！」

「母さん！何をする気ですか！」

業輪を床に叩きつけよとする少女を、ガトーが抑えつけた。

「放せ！」

「そんなことをしては、ヤヒコ様の痛みに耐え抜いた苦労が水の泡になってしまいます！」

ガトーがそう言つと、少女は大人しくなつた。茫然と涙を流しながら、首に下げていた鍵を手にした。鍵の装飾をなぞる細い指は、蛇が這いずる鱗の痕で痛々しく赤く腫れ上がつてゐる。

「……業輪が無くなつてしまつたら、世界は……もう……」

ガトーが荒い息を整えながら、少女の背中を見つめた。まだ、小さく震えている。

「……」

「変わつて差し上げられるなら、俺が……」

「よい。」

ガトーが顔を上げると、少女の震えは止まつていた。

「これを手放すには痛みを業輪に捧げて使命を果たし、部屋を開かねばならぬ。だつたら……その扉をこじ開ければよいではないか。」

「……何を、」

少女は業輪の鍵穴に持つっていた鍵を差し込んだ。そしてガチャガチャと回らぬ鍵を捻る。

「やめてくださいー壊れてしましますー！」

ガトーが慌てて止めに入るが、少女はその手を放そつとしない。泣きながら、叫ぶ。

「開け！開け！」

「今手放してもいづれまた回つてきます！俺が父さんに変わつてあげられるよつ頼みますからーだから…ー！」

母の悲痛な叫びにガトーは涙ながらに訴えるが……届かない。

「開け！」

その瞬間、固く動こうとしなかった鍵は…回った。

黒い雨が降り注ぐ中、一人は外にいた。灰色の雲を纏う、猛々しい山を見上げながら。

——今手放してもいざれまた回つてきます！——

生きとし生けるもの全ての業を、世界の秩序と均衡を保つための力に変える…終わりの見えない痛みとの闘い。それを思い出していた少女には、高い山が自分に使命を果たすよう威圧しているかのように見える。これを背負うならば、痛みも刻め…と。扉を開いて開放されるはずが、何故か、逃げられない絶望感に見舞われていた。雨に打たれながら、業輪を片手に開かれた門の前で立ち尽くす少女。ガトーは地面に蹲り、泣いていた。

「母さんをお許しくださいー・父さん…！」

ガトーの懺悔の言葉を背中に聞き、少女も泣いた。聖母にならねば…そう、自分を責め立てながら。

「それでもお前は…業輪を探すのか？」

「…」

嗚咽するクリストフの頭を撫でながら、フィオールは聞いた。

クリストフは彼の腕の中で、低く小さく。

「…もうとっくにあたしに回つて来てるはずなんだ。本当は。」

クリストフの息がだんだん荒くなつてゆく。

「でも…回つて来なかつた。何度もかの宴で…エドガーが持ち続け
ていたことを知つた。」

フィオールは少女をキツく抱き締める。

「あいつ…あたし達を氣遣つて部屋も開かずに墓守をしながら、ず
つと一人で。それに気付いていながら…あたし達はエドガーから業
輪を受け取ろうとはしなかつた！鍵戦争はそんなあたし達への罰な
んだ！」

クリストフはフィオールの服を握りしめる。

「妖精に見初められて死にかけたニアと自分を重ねたりして…あた
しはニアを助けたかったんじゃない！あたしは…！」

フィオールは叫ぶ少女の唇に、強引に唇を重ねた。クリスト
フは言葉を失つた。蠟燭が揺らぐ暗い部屋。静かに、フィオールは
唇を放した。驚きのあまり固まっている少女が見つめる先には、真
剣な眼差しを向けるフィオールがいた。その青い瞳が、少女の涙腺
をまた刺激する。

「…お前は充分苦しんだ。もう、聖母なんて辞めろ。」

少女はフィオールの優しい声に涙を流した。

「無理だ。そんなこと…山も失い、不老でもなくなる。」

フィオールはクリストフの両肩に手を置いたまま、眉を顰めた。

「あたし一人のせいで世界は崩壊する…」

「それでも俺がいる!」

フィオールは強く、しかし穏やかに言った。

「山が無くても俺がお前を食わせてやる。不老でなくとも、俺も一緒に老いていく。」

フィオールはクリストフを抱き締めた。

「世界が崩壊するまでの日まで…俺はお前の側にいる。」

「…」

彼の腕の中で、クリストフはカイザを思い出していた。ミハエルの死体を悲しげに見つめ、昔の想い出を、愛おしそうに語る…

「クリストフ…死ぬことだって、そう悪くない。」

カイザの気持ちが、なんとなく理解できるような気がした。そして、漠然とミハエルが羨ましいと思つていたことも納得がいった。少女は、人に愛されたかったのだ。愛されたうえで、許されたかった。

——お前は、聖母なんかじゃない。——

「… そうだな。」

少女はフィオールの広い背中に手を回し、その胸に涙を拭つた。

「でも、もう大丈夫だ。」

少女は涙を流しながら笑つた。

月が照らす赤い唇を緩ませ、ニアは言つた。

「夫と寄り添えるなら、何も望みません。そのためなら…命だって惜しくはありません。」

「お前が生きる世界のためならば、痛みにだつて耐えられそうだ。」

「幸せに死ねるなら。」

「お前が側にいてくれるなら…」

少女の笑顔がフィオールの目に映った瞬間、部屋の灯りが消えた。暗闇の中、フィオールは手探りでクリストフの唇をなぞる。クリストフも、フィオールの頬に手を伸ばした。そして、二人は顔を近付ける。

「…ニア、」

カイザはミハエルの肩を強く抱いて、聞いた。

「お前の目に、俺はどう映つている。」

ニアは少し考え、カイザを見た。

「…美しいです。美しくて…悲しい。」

「…」

「あなた様もわたくしも、なんら変わりない。自分の愛を貫きたいだけ…それは美しいことだけれど、時折、悲しいものです。」

清々しい笑顔で、頬に涙を伝わせるニアをカイザはただ、見つめた。赤い瞳の置くで燃える火が、本当は夫と末長く寄り添いたいという本心を訴えかけてくるようで…切なかつた。

重ねた唇を離して、フィオールが言った。

「…もう寝よう。カイザが戻つてくる。」

「そうだな…」

クリストフも暗がりで頷き、一人はもといた布団にゆっくりと戻る。そして、互いに背を向けて横になつた。

「…」

「…」

「…明日からどんな顔してお前と会えればいいんだ。」

「それを言つなよ！俺も迷つてんだから！」

ガバッと起き上がりつて恥ずかしさに頭を抱えるフィオール。クリストフは、小さく笑つた。そんな少女の笑い声を耳にして、フィオールは勢いよく横になり布団をかぶつた。

「もう寝ろ！」

「言わねくとも寝る。」

クリストフは笑いを堪えて、瞼を閉じた。

「…さつき言つたこと、俺は本気だからな。」

フィオールがぼそりと呟く。

「…あたしも、本心だよ。」

クリストフの言葉を最後に、沈黙が広がる。しかしその沈黙は僅かに熱を帯びていて、なかなか二人は眠りにつけなかつた。結局、疲れぬままカイザとミハエルが戻つて来た。川の字になつてうとうとする三人は、それに違つことを考えていた。フィオール

は業輪について、クリストフは自分の未来について、カイザはミハエルについて…それでも三人は共に旅をして行く。道を違える、その日まで。

知らない懐かしきは夢の果てに

まだ田の上がりきらない明朝未明。

「起きる。」

「…あやーつ!」

フィオールの悲鳴でカイザは眉を顰めてゆっくりと瞼を開けた。ランプの光が揺らめく天井から、声の聞こえた方へ視線を移しながら身体を起こす。

「おひ、お前!…いつから…?！」

視線の先には慌てふためくフィオールの布団に潜り込んでいるクリストフがいた。カイザは一瞬身を引いたが、昨晩のことを思い出して冷静になった。そして、あー…と氣の抜ける声を出す。

「そついえば、お前らはそつこいつ関係だつた…じゃなくて、そういう関係になつたんだつけ。」

カイザの咳きにフィオールが喉から変な音を出して顔を真つ赤にする。首だけ振り返るクリストフはニヤニヤしていた。

「ちつ、違つ!」

「あんなことしておいて冷たいこと言つくなよ、フィオール。」

「い、いや!…その!」

耳まで赤いフィオールを見て、カイザは布団から出でミハエ

ルを抱き上げた。

「…お前ら、何かあつたの？いや、したの？」

「何もねーよ！」

フィオールがカイザに枕を投げつけた。カイザはそれを叩き落として一人を睨む。すると、ケラケラと笑いながらクリスマスが言った。

「もう照れるなよ。一つの布団で寝た仲だろー、10分くらい。」

二人はぐりんと一斉にクリスマスを見た。少女は楽しそうに笑いながら立ち上がった。

「準備しろ。そろそろ行くぞ。」

「…もう少し驚かさないように起こせないのか？」

フィオールが頭を抱えてうなだれた。カイザもぐったりしている。

「もう面倒だから結婚しろよお前ら。結婚して新婚旅行でもなんでもいいから遠くに行つてくれ。朝がしんどい…」

カイザはミハエルを椅子に戻してダラダラと着替え始める。フィオールはそんなカイザの背中にバサツと布団を投げ飛ばした。

「俺だつて毎朝しんどいんだよー。」

「しんどいのか…？」

クリストフが包帯でグルグル巻きにした左手にアーマーをは

めながらフイオールを見た。

「ち、ちがつ……！」

フラフラと立ち上がり、フイオールは顔を赤らめる。カイザは深く溜息をついた。

「なんだよ、ハツキリしないな。男のくせに。」

フイオールはカイザの言葉に舌打ちをした。

「じゃあハツキリさせてやるよー俺はクリストフが……！」

「そういうばカイザ、」

クリストフがフイオールの言葉を遮った。フイオールは帽子を握り締めたまま固まっている。

「昨日の質問に……答えてなかつたな。」

「質問つて……」

荷物をまとめクリストフを見ながら、カイザは昨晩の事を思い返した。

——教えてやるよ、あたしがあるお姫様を助けようと思つた理由……

「ああ……」

「あれは、あたしが……」

「いや、いい。」

「いや、いい。」

クリストフはカイザを見た。カイザはベストのボタンに視線を落とした。

「ニアから、聞いたんだ。」

「…ニアが？」

「ああ、お前の口から直接聞いたわけじゃないが…いい。俺も、あいつの身の上を知っていたら頼みを聞いてやりたいと思つただろうし…」

「そうか。」

カイザはベストのボタンを締めて、アーマーを手にとつた。上腕部に描かれたプラックメリ―と同じ、鷺のシンボル。追われる危機感、追わなければならぬ焦燥感。本当はこんな事をしている場合ではないが…ニアの夫に対する気持ちに、カイザは心を動かされていた。

「…同情でしか、ないんだろうけどな。」

「…」

カイザの咳きに、クリストフは何も答えない。答えられない。助けるという行為自体は善でも、動機は偽善的なことがある。世にいう優しさなんてものも、偽善と隣り合わせの自己満足でしかない。ここで夫を助け出しても、ニアの命は残り短く、そんなニアを見捨てることは、似た境遇の自分を見捨てることになるようで放つておけなかつたのだ。神に見初められたクリストフ、美女の死体を愛するカイザ、美女に口付けをしたフィオール…ニアの境遇を他人事に思える者はもういない。

三人は何も言わないままに、部屋を出た。そして、目の前の風景に立ち尽くした。

「おはようございます。」

森を白く照らし出す淡い光が走る空を、赤い火が無数に飛び交う。よく見れば、光の一つ一つは小さな人だ。辺りをぼんやりと赤く照らすそれらが、虫のように空高くまで埋め尽くす。そこで、ニアが一人、ポツンと立っていたのだ。

「ニア、これは…」

空を見上げてカイザが聞くと、ニアは笑顔を浮かべて言った。
「クリストフ様とエドガー様に、長が挨拶致したいとのことで…」

クリストフはミハエルを背負うカイザの手を引いて前に出た。すると、ニアと二人の間に光が集まり、大きな火が燃え上がる。パチパチと火の粉が舞う炎の中から、一人の老人が現れた。紳士的な出立に白い髪。優しそうに細くなつた赤い目からは、何処か威厳を感じる。カイザとフィオールが目を点にして見つめていると、老人はゆっくりと会釈した。

「お会いできて光榮にござります。この度は我が息子を助けてください」と聞き、感謝の言葉を述べさせて頂きたく、参ったしだいにござります。」

「息子だったのか。それは、さぞ心配だったことだろう。」

クリストフがそう言つと、老人は少女に歩み寄つてその手を取り取つた。

「聖母様方の御加護の下にあるこの世界で、何を気に病むことがございましょう。」

クリストフは、老人が握る左手を見つめて悲しそうな顔をした。

「火の妖精より、心ばかりの祝福を…」

老人は少女の左手の甲に口付けをした。そして、カイザに歩み寄ってミハエルを見つめた。

「…」

カイザは少し身を引いて俯いていたが、老人は何も話さない。カイザが顔を上げると、老人は彼をじっと見つめていた。皺くちゃで細くなつた目の間から覗く赤い瞳が、真つ直ぐにカイザを射る。

「…あなたは、以前何処かで…」

目が離せない。老人のその赤い瞳がカイザの中の懐かしさを呼び覚ます。しかし、カイザははつと我に返つて言った。

「ここへ来るのは、初めてだ。俺も何処かで…あなたと会つたことがある気はするのだけれど。」

カイザは首を傾げて視線を逸らした。すると、老人は優しく微笑んだ。

「…そう、でしたか。」

老人はカイザの手を取り、その手に口付けをした。手からはなんの温度も感じないのに、ふと甲に当たる吐息は熱い程であった。

「あなた様方に、神の御加護があらんことを…」

老人はするりとカイザの手を放し、帽子を整えながら後退する。

「また、お会いしましょ。」

そう言つと、老人は激しく燃え上がり瞬く間に消えた。空を飛び交う光も無くなり、そこには二ア一人。

「では、門を開きます。」

ニアは鍵を空で捻つた。すると、鍵から火が出てそれが門の形を描き出した。その向こうには、高い塔が聳え立つ。

「…」

「カイザ、どうした。」

立ち尽くすカイザにフイオールが声をかける。カイザは慌ててミハエルを下ろした。

「いや、何でも…」

カイザは荷物とミハエルを切株の近くに置いて、門の前に立つた。

この時、カイザは気持の悪い感覚に陥っていた。会つた覚えはない。ないのに、目や感覚があの老人を懐かしむ。既視感、なんて漠然としたものでもない。記憶にはない何処かで、必ず会つている…そんな、気味の悪い感覚。

「さて、早く済ませて祝杯でも上げるかな。」

伸びをしながらクリストフがカイザの隣に並んだ。

「…おい、やっぱり俺も行つた方が…」

二人が振り返ると、不安そうに俯くフィオールがいた。クリストフはそんな彼に強気な笑みを見せる。

「もしもの時のためにお前には留守番を頼んだんだろうが。そんなしけた顔するなよ。」

「…でも、俺は！」

フィオールが顔を上げると、田の前には少女の顔があつた。驚いて言葉を詰まらせる彼を、少女はじつと見つめる。

「妖精一匹と娘一人を助けるくらい、本来ならあたし一人でも十分だ。根暗なカイザなんてただの開錠係だし。」

「おい、聞こえてるぞ。」

カイザが肩越しに少女を睨む。

「あたしを信じろ。必ず帰るから。」

クリストフは小さく微笑んでフィオールの手を握った。少女の笑顔を見てフィオールは困ったように笑い、頷く。その様子をじつと見つめるカイザ。

「…やっぱりお前ら、そういう関係なの？」

カイザの言葉に、フィオールはあたふたと何か言い始める。

「いや、その、心配で！」

「ふーん。すぐ帰るから。」

何やら理解のいいカイザに、フィオールはホッと胸を撫で下ろして頷いた。単純でよかつた、そう考えながらカイザに歩み寄るクリストフの背中を見送る。少女は、門の前に立ち、振り返った。

「じゃ、」

カイザも軽く手を上げて言った。

「ミハエルの」と、よろしく。

二人が門を潜ると、門は炎をあげて空に消えた。フィオールはそれを見つめながら、ふつと小さく息をつく。

「…まだ、心配ですか？」

ニアが切株に寄りかかるミハエルに歩み寄りながら言った。フィオールはじっと立ち廻くし、門のあつた場所を見つめる。

「…いや、あいつらなら大丈夫だと信じてはいるけど…」

森の端から、朝日が昇る。

「男ならやつぱり、女に頼りきついじゃあいけないような気がして。」

そつ言つフィオールの背中を見つめて、ニアは微笑んだ。

たとえそれで世界が終つてしまつたとしても

「おい、まだか。」

「もう少しだから急かすな。」

塔の前で伸びている兵士を足蹴にしてクリストフが苛立つて
いる。カイザは門の鍵を開けようと何やら作業をしていた。

「早くしろよ、待つのは嫌いなんだ。」

「静かにしろ。手元が狂う。」

クリストフは深く溜息をついた。

「こんな門いつもなら叩き割つてるのに……」

「そんなことしたら田立つてしょうがないだろ。」

カイザが氣だるそうに作業を続けていると、大きな南京錠が
ガチャリと音をたてた。

「…開いた。」

「よし。」

クリストフが慎重に門に手をかけた。男一人でも開くか不安
になる大きさだが、少女は難なく押し開く。カイザはもうその光景
に慣れてきたのか、開門は少女に任せて隙間の向こうをじっと見つ
めている。

「待て。」

「なんだよー。」

少女が手を止め、カイザを睨んだ。

「人が来る。」

カイザの言葉に、少女も隙間から中を覗き見た。塔から出でくる兵士が一人、こちらへ向かってくる。

「来るぞ、とりあえず寝てもいいつか？」

「馬鹿！ 門を開めろ！」

馬鹿呼ばわりされて渋々クリストフは音をたてないように閉め、開かぬように抑えつけた。

「どうすんだよ。」

「！」こつらは門の鍵を持っていなかつたし、開閉の申し出はできない。おそらく、外への伝言だ。やり過ごす。」

カイザとクリストフは息を潜めて兵士が来るのを待つた。そして、門を叩く音がした。

「…」

「…おい、返事をしろ。」

中から呼びかけられ、クリストフはカイザの頭を殴つた。

「は、はっ！ 失礼いたしました！」

カイザは頭を抑えながら返答する。

「じつかつしる。最上階より云言だ。サラ様がじつ懷妊なされた。国王陛下にそつお伝えしる。」

カイザとクリストフは顔を見合せた。

「か、かしこまりました！」

カイザが返事をすると、兵士が去つてゆく足音がした。

「…サラ様つて、」

「様付けするんだから、ニアの娘のことじやないのか？」

クリストフが、眉を顰めて言つた。

「懷妊つて、父親は誰…」

「あー、もうだ。」

兵士の声にカイザは慌てて言葉を飲み込んだ。

「医師が城へ戻る。鍵番も孚ふだおナ。」

「はー、」

そして、兵士の足音は遠くなり、聞こえなくなつた。

「…これから医者も来るだ。門番を伸すのは医者を通してからの方がよかつたかもな。」

カイザがうんざりした顔で嘆息し、クリストフは門をゆっくり開き始めた。

「いいだろ、娘の居場所も明らかになつたことだし。わざと助け
てすらかる。」

「はいはい、」

人が通れるだけ開くと二人は中には入り、クリストフは門を
閉めた。そして、塔の入口へと駆け寄る。

「どうだ。」

「今度は中から閉まつてゐる。南京錠が……3つ。一つは複雑に鍵と絡
まつてゐる。」

扉の隙間を覗きながらカイザは言つた。クリストフは渋い顔
をして舌打ちした。

「開くか？」

「やれないこともないが……」

カイザは扉から離れて塔を見上げた。

「あ、あそこから入る方が早い。」

カイザが指差すのは、塔の中間門側にポツンと一つだけある
小さな窓。

「じゃあそつから……」

「でもたぶんあそこは看守室だ。飛び込んでたら大騒ぎになる。」

クリストフは腰に手を当てて溜息をついた。

「… 盗賊ならなんとかしちゃ。」

口元に指を当てが、カイザがクリストフを睨んだ。

「それを今考えてんだよ。山賊ならどうするんだ？」

「普段ならバーンと入って脅しつけてる。」

カイザは少女と初めて出会った時のことを思に出した。

「… つまり、考え無しに突っ込むと。」

カイザの言葉にクリストフの皿つきが鋭くなる。

「考え無しとはなんだ。山賊はお前ら盗賊なんかと違つて『ソソ』
しないんだよ。」

「それが考え無しつて言つんだ。無鉄砲とも言ひ。簡単に言えば馬
鹿。」

「あー… その綺麗な顔をボッコボコに殴りたい…」

クリストフはカイザに背を向けて貧乏振りをし始めた。そ
んな少女を他所にカイザは塔を見上げて考え込む。医者が降りて来
るとなると鍵を開けている時間はない。医者を出してまた鍵を閉め
る兵士もいるだろうから入れ違いに入るのも難しい。門番に変装す
るにしても、やり過ごして鍵を開くにしても、三つの南京錠が行手
を阻む。その上、城と反対側である門側には看守室と思われる窓し
かない。

「… 医者が来るだ。」

苛立つクリストフは、腕組みをして貧乏振りをするばかり。

カイザは無言で塔を見上げるばかり。

ミハエルの横に腰掛け、膝に頬杖をついて盆^{はん}を揺すりをする
フィオール。じーっと火の門があつた場所を見つめていた。

「随分と苛立つている」様子ですね。」

フィオールがふと横を見ると、ニアが盆を持って立っていた。
盆には透明な水が入ったコップが一つ、並んでいた。

「苛立つてゐるわけじゃあ……」

フィオールは再び前を見た。

「そのわりには、落ち着きがありませんよ？」

ニアの言葉に、フィオールの貧乏^{ひんぱく}を搔^掻すりがピタリと止んだ。
ニアはクスクスと笑いながらフィオールに水を差し出した。

「……ありがと。」

フィオールはそれを受け取った。ニアはもう一つを手に取り、
ミハエルの横に置いた。

「……ニアが飲むんじゃないのか？」

「……エドガー様に用意したものですから。」

首を傾げてニアは微笑む。フィオールも釣られて首を傾げ、そり、と呟いた。

「…クリストフ様が、心配ですか。」

フィオールはコップを落としそうになり、慌てて両手で持ち直した。

「し、心配とかじやなくて…！」

「恋仲なのでしょう？」

ニアの微笑みに、フィオールは言葉を失ってしまった。困った顔をして、水を一口飲み込んだ。

「…心配、とかじやないんだ。ただ、なんか引っかかって…」

「恋仲は否定なさらないのですね。」

フィオールはうなだれて力無く呟いた。

「…しないけど、まだハッキリした関係とも言えないから勘弁してくれ。」

ニアはクスクスと小さく笑う。

「『めんなさい、とても仲がよろしいようでしたので…』

「…女の勘は鋭いな。」

フィオールも、小さく笑つた。そして、風が吹き抜ける森の影を見据えた。

「…俺、いいのかな、ここにいて。」

「…女性の誰もが守つてもうつひとを望んでいとは限りません。」

何故か得意げな二ア。 フィオールは視線を空へと移し、言った。

「やうだよな…あいつは自分で自分の身を守れる。」

二アは、真剣な表情でフィオールの横顔を見つめた。 彼は呆然として空を仰ぐばかり。

「…何も、わかつてらっしゃらない」様子ですので、恐れながらも言わせていただきます。」

フィオールが二アを見ると、二アはその赤く艶めく唇を一文字にして彼を見つめていた。 それが、ゆっくりと動き出す。

「自分を愛してくださる方がいる、苦しい時に支えてくれる方がいる、喜びを分かち合える方がいる…それだけでいいのです。 難しく女だの男だと考える必要はないのです。互いに、そういう相手であれば。」

「…」

「クリスマス様のような高貴なお方ならなおさらのこと、守つてくださる男性より、ただ一向に愛してくださる男性が恋しいのです。」

「…」

フィオールは目を点にして二アを見つめていた。 微動だにせず、じっと。 二アは彼がなんの反応も示さないので、何やら不安になつておろおろしはじめてしまつた。

「あ、あの、お気に障つたことを…わたくし、」

「…いや、ありがとうな、ニア。おかげで目が覚めた。」

フィオールは勢いよくコップを置き、立ち上がった。帽子に手を添えてかぶり直し、決意めいたような強気な笑みを浮かべている。ニアは何がなんだかわからず、困った顔をして彼を見上げていた。

「やつぱり、ソレにちやいけねえんだよ、俺。」

「え…？」

「ニア、門を開けてくれ。」

フィオールは商売道具が詰まつたいつもの荷物を手に、歩き始めた。

「ま、待ってください！」

ニアが止めるごとに、フィオールが振り返った。

「わたくしの話、じ理解いただけたのではなかつたのですか？！」

「した。」

「でしたら、なんで行くのです！クリストフ様はあなたがいてくださるだけでよろしいのですから、あの方を信じてこじで…」

「俺がここに残つたのは作戦上の理由だ。あいつがどうこうなんて話じゃない。」

フィオールは、何処で覚えたのか不敵な笑みを浮かべて言った。

「カイザはエドガーのために、クリストフは世界のために、俺はいつもらと生きていく道を探すために旅をしてるんだ。今ここで留守番なんかしても、俺の旅の目的は果たせない。あいつらと生きるが、あいつらと死ぬかのどちらかでしか、終われないんだよ。」

「だから、『自分のお役目を放棄する』とおっしゃるのですか？」

ニアは驚いたような顔でフィオールを見つめる。彼を哀れだとか、滑稽だとか、そんな眼差しではない。

「一人生き残つたといひで、あいつらと生きてくための俺の旅は：意味を成さないだろ？だから行く。エドガーや世界を背負つあいつらには悪いが…俺は、俺の目的のために動く。」

ニアの眼差しは、尊敬の眼差しだった。いや、共感とも言える。命と夫を秤にかけて、彼女は夫をとつたのだから。

ニアが涙目になつて見つめていると、フィオールは何かを思い出したかのように青ざめてゆく。

「あの、何か…？」

「いや、作戦なんてくそくらえだーなんて言つて俺が留守番放棄したら…後が怖いなと思って。クリストフのゲンコツ痛いんだよ。」

身震いをして怖がるフィオールを見て、ニアはクスクスと笑つた。あいつらが死ぬなら俺も死ぬ、なんて言つておきながら死ぬことなんて毛頭はない彼。あの一人を心底信頼している。してはいるが、彼にとつては共に生きてゆくことにこそ意味がある。保険のお留守番なんて彼にはなんの価値もない。

「…わかりました。」

ニアは涙を流しながら笑う。

「門を開きましょ。」

「おう、よろしく。」

「その前に…」

ニアは、にっこりと笑って立ち上がった。

「わたくしから、せめてもの贈り物をさせていただきたいのですが。

」

首を傾げるフィオール。ニアは、ニコニコと微笑むばかり。

「…一か八か。」

苛立ちがピークに達しているクリストフは、呟くカイザを横目に睨んだ。

「で、どうする。」

「その前に…」

カイザは塔の天辺から目を逸らしてクリストフを見た。

「お前つてどのくらい強いんだ?」

「象5、6頭よりは強いな。」

「…よくわからない。一個小隊相手にできるか?」

「なめるな。5分もあれば小隊くらい木つ端微塵だ。」

「へえー…」

カイザは再び塔を見て、言った。

「じゃあ、始めよつか。」

予期せぬ」とこも平常心を失つてはいけない

一つの足音。鍵を開ける音。そして、扉の開く音。

「では、失礼いたします。」

「お疲れ様でした、先生。」

兵士はぺこりと頭を下げて扉を閉め、ガチャガチャと鍵を閉める。その音を背中に聞きつつ、白衣の男は門へと歩き出した。男はどこか浮かない顔をして肩を落としている。

男は門の前で立ち止まり、トントンと2度、門を叩いた。

「私です。城へ戻りますので開けてください。」

返事がなく、男は眉を顰める。

「門を開け…」

「おやすみ。」

「」からともなく現れたクリストフが男のみぞおちに深く拳を沈めた。男はそのまま動かなくなつた。少女は男が起き上がらないことを確認して、門の外から鍵を持つてきた。

「カイザ！」

クリストフに呼ばれて周囲を確認しながら門へとカイザが走つてくる。カイザはクリストフから鍵を受け取り、内側から門に鍵をかけた。

「できた。行くぞ。」

「待ちくたびれた。」

二人は塔へと走り、壁の前で立ち止った。カイザは荷物から鉤爪を取り出し、アーマーの甲に取り付ける。それをじっと見つめるクリストフ。

「…お前、よじ登る気か?」

「当たり前だろ。」

「そんなことしなくても飛んで行けばいいだろ。」

少女に腕を掴まれ、何やら嫌そうな顔をするカイザ。

「飛ぶって、まさか…」

「そのまさかだよ。」

少女は地面を蹴った。地面はへこみ、砂埃を立てていて。それを真上から見ているカイザは、少女に腕を掴まれ空高く飛び上がっていた。

「ちょっと…高い!」

「もう到着だ!」

クリストフは窓を叩き割り、中へと飛び込んだ。一緒に転がり込んだカイザは向こうの扉に投げつけられ、思いきり頭をぶつける。

「なつ、何者だ!」

頭を抑えながらカイザが立ち上がるが、そこには数人の兵士がいた。やはり看守室だったようだ。窓ガラスが散らばるテーブルに立

ち、クリストフは不敵な笑みを浮かべている。

「賊だ！捕らえろ！」

兵士が剣を振り上げてカイザとクリストフに向かつてきた、が。兵士は次々と二人の前に倒れてゆく。見兼ねた一人の兵士が窓の外へ向け、大きく笛を吹き鳴らした。城に異常事態を知らせていたのだろう。背後からクリストフに蹴り飛ばされ、兵士は窓の外へ落ちていった。

静かになつた看守室で、カイザは鍵を探していた。

「…見当たらない。」

「こいつらも持つてないぞ。」

兵士の持ち物を漁るクリストフがカイザに言つた。カイザは少し考え、ある事に気がつく。そして、慌てて窓の外を見た。

「まさか…」

クリストフも外を見ると、門の前で伸びている医者が目に入つた。

「あいつか…」

「あたしが取りに行く！」

「待て！これから増援も来る！今は先に…」

「その足止めのために門の内側から鍵をかけたんだろうが…」

「あれは時間稼ぎのためにしたんだ！それに、取りに行つても鍵がある確証なんてない！」

クリストフが窓に足をかけると、看守室の扉が勢いよく開いた。

「賊か！」の塔へ何をしに来た！』

数人ぞろぞろと塔からぞろぞろと兵士が集まってきた。クリストフは舌打ちをして雪崩れ込んで来る兵士に向かつてテーブルを投げつけた。

「わかつたよ！先を急ぐぞ！」

先頭を切つてクリストフが走り出した。兵士を薙ぎ倒して扉から出ると、大きな螺旋階段が続いていた。上までは暗くなつていて見る事ができない。

階段の下と上から兵士が集まつてくる。クリストフはカイザの腕を掴んだ。そして、上に向かつて大きく飛び上がる。クリストフが踏んだ階段はガラガラと音を立てて崩れてゆく。

「帰りはどつするんだよ！」

「飛び降りればいい。」

「俺が死ぬ！」

飛び石のように上まで昇り、一人は最上階へとたどり着いた。そこには木製の扉一つしかなく、あとは石の壁が続いている。クリストフはその扉に向かつてカイザを投げ飛ばした。

「いてつ！」

再び頭を打ち付け、その場に蹲るカイザ。

「早く開ける。」

「…もう少し丁寧に扱えよな。」

カイザはブツブツ文句を垂れながら鍵穴を覗き込む。

「これ、どうなってるんだ?」

開錠の道具を鍵穴に差し込み、カイザは言った。

「…スカスカだ。何もない。」

「だったら開いてるんじゃないのか?」

クリストフが扉をガタガタと動かすが、扉は確かに鍵がかかっている。

「どうなってんだよ!」

「たぶん、この鍵穴は偽物で本物がどこかに…」

カイザは扉の周りを見回した。しかし、それらしき物は見当たらぬ。

「面倒だ! 開けるぞ!」

「待て!」

カイザが止めに入るが、クリストフは大きく拳を振り上げて扉を叩き割つた。木が破れる大きな音が塔に響き渡る。そして、その部屋は開け放たれた。

「…」

城が見える窓が一つだけある拾い豪華な部屋。白いレースのカーテンに、本革のソファア。そして、天井つきのフワフワしたカーテ

ンが靡くベッドの上で枕を抱き締め、驚いている少女が一人。赤い髪、赤い瞳…間違いない、ニアの娘だ。

クリストフが中に入ろうとする、娘は怯えながら窓際の瓶を取り上げて抱き締めた。その中には、それまた赤い蜥蜴が入っていた。

「…父親は何処にいる。」

扉の前でクリストフが聞くと、娘は怯えた顔で瓶を離そうとする。

「この子はあなた方を怖がっている。それに、舌を抜かれてありますので話すことができん。」

籠つた男の声がした。カイザは振り返つて見るが、下層で騒ぐ兵士の声しかしない。

「何用ですか。私達親子に。」

カイザは声の主を探していた。そんな彼の頭を驚掴みにして、娘へと向けるクリストフ。

「あの蜥蜴が、ニアの旦那だ。」

「…」

カイザは目を細めて瓶の中を見つめた。蜥蜴は数度瞬きをすると、クルリと回った。

「なんと、ニアを知つてらつしゃるのですね。」

「…蜥蜴がしゃべつてる。」

カイザは驚きの声をボソリと垂れ流す。クリストフは部屋に歩み

入り、娘から無理矢理に瓶を取り上げた。娘は泣き田になつて奪い返そうとする。

「大丈夫、この人達はお前のお母さんの知り合いだ。」

蜥蜴がそう言つと、娘は少し不安げな表情をしながらもおとなしくなつた。クリストフは瓶を見て眉を顰めた。

「…複雑な魔法で封じられているな。」

まだ扉の前で呆けていたカイザは、やつと我に返つてクリストフに歩み寄つた。

「魔法？」

「ああ、これ程の封印…誰がやつたんだ。」

「お前、どうにかできないのか？」

「無理だな。ダンテにでも見てもらわないと。」

二人が瓶を見回していると、蜥蜴が言つた。

「以前城にいた魔女が国王に命ぜられました。確かに、ダンテ様の弟子だったと申しておりました。」

「面倒なことしやがつて…」

「魔法といえば、その扉にも国王が何か細工をしたようでしたが…」

蜥蜴の言葉に、クリストフはピクリと眉を動かした。少女は瓶をカイザに押し付け、扉があつた場所へと歩いて行く。そして、ゆっくりとその場所に手をかざすと…

「…やられた！」

クリストフは何もない空をドンドンと呴く。異変に気付いたカイザも、出口に手をかざした。そこには、見えない壁のようなものが出来上がっていた。

「何だ、これ。」

「だったら窓から…」

窓に向かうクリストフに、蜥蜴が言った。

「窓も開きません。この部屋は国王の魔法で封じられています。」

「部屋に入る前に言えよ…」

「賊かと思いましたので。」

確かに賊だけど…カイザは溜息をついた。

「ここなど田舎でまさか魔法に出くわすなんて…」

クリストフが動かない窓を叩きながら叫ぶ。

「国王がかけたので簡単な魔法のはず…お一人のどちらか、解除魔法を「存知ないのですか?」

「…」

沈黙が流れる。すると、クリストフがカイザに振り返って言った。

「なんで盗賊のくせに解除魔法も覚えてねえんだよー。」

「お、俺は魔法の存在自体知らなかつた! お前こそ、ダンテと知り合になら留つとけばよかつたじゃないか!」

「宴でしか顔合わせない、殆どツチノコみたいな奴からビリやつて
習えってんだ！」

言い争う二人を娘は心配そうに見つめる。

「せめてこの瓶から出れたなら…私がどうにかいたしましたのに。
「…間抜けな蜥蜴だな。」

クリストフが瓶を睨んだ。その時、外で大きな爆発音が響いた。
カイザとクリストフは顔を見合させる。

「門を開けたようだな。」

「何か手はないのか、クリストフ…」

「さつき階段をめちゃめちゃにしたからまだ上がつて来ないだろ？
が…ここから出る手段を見つけないことにはな。」

少女はツカツカと壁に歩み寄り、石の壁を殴つた。やはり、扉や
窓同様にびくともしない。

「その壁は力技で突破できるような代物じゃない。」

知らない男の声に、クリストフとカイザは振り返った。

「…賊と聞いていたが、女の方は上玉じゃないか。」

怪しく笑う男を見て、娘はベッドの布団に丸まつて隠れた。クリ
ストフは男を横目に睨んで、鼻で笑つた。

「偉そうに。ここから出たらその二タニタ顔を泣き顔になるまで殴
つてやるよ。」

「強気な女は嫌いじゃない。」

男が杖をコン、と一回床をつくとカイザとクリストフはよろめいた。

「なんだ…？身体が痺れて…」

「…くそつ！」

クリストフは近くのスタンドを扉めがけて投げたが、男の手前で壁に弾かれ、スタンドは絨毯の上に転がった。

「おとなしくしている。もうすぐ兵がくる。」

男はそう言つて階段を降りて行つた。カイザとクリストフはその場に倒れ込んでしまつた。床を転がる瓶の中で、蜥蜴が叫ぶ。

「皆さん、しつかり！サラ！サラ！大丈夫か！」

狭い瓶の中できょろきょろと落ち着きなく動き回る蜥蜴を見ながら、カイザはクリストフに話しかけた。

「…魔法つて…便利、だな。」

「そんなこと言つてる場合か！お前なんて舌まで痺れてんじゃねえか！」

カイザはふつと笑つて、目を閉じた。

何にも囚われてはならない

人が沢山行き交う橋の上で、カイザは口をあんぐり開けて川の向こうを見つめていた。

「大きい…」

「そうね、国一番の橋だから。」

驚いているカイザを見てミハエルは微笑んだ。カイザは振り返つて橋の上を見渡す。

「出店もあるし、大道芸人までいる…祭でもあるのか?」

「いいえ、ここはいつもそういうのよ。」

「いつもって…毎日?」

「…ええ。」

こんなお祭騒ぎを毎日しているというのに、ミハエルの笑顔は少し、悲しそうだった。カイザはそれが気になつたが、ミハエルが何かに気付いたようにカイザの肩を抱いて向こうを指差した。

「ほら、アレ。見たことある?」

ミハエルが指差したのは、とある出店。ノース名物の菓子を売っているようだ。

「ない。」

「食べてみない?」

「うん!」

喜ぶカイザを見て、彼女は満面の笑みを浮かべた。

「よかつた。好きなんだけど一人だとなかなか買う気になれなくて。

「食べたかったら俺のこと呼んでよ。」

「そうね。」

いつもの憂いを秘めた笑みとは違い、子供のように照れ笑いをする彼女。カイザは、ミハエルには不思議な雰囲気だけではなく、こういった女の子らしい一面もあるのだと気付く。

「甘い物好きなのか？」

「たまに食べると美味しいのよ。」

「俺は甘いのもいいけど辛い物も好き。」

「あら、大人ね。」

他愛ない会話をしながら、一人は店に向かって人混みを抜けてゆく。お祭騒ぎの、橋の上。

そこは塔のちょうど中間程にある牢の中。狭いところに手枷をかけられた男が十数人集められていた。

「入れ。」

兵士にそう言われてカイザは大人しく中に入った。兵士はそれを確認して牢を閉め、鍵をかけると、おそらくすぐ上の階にあるであろう看守室へと戻つて行つた。

「捕まつたのか、兄さん。何したんだ？」

顎鬚を蓄えた汚らしい男がカイザに話しかけた。カイザは男を見下ろし、溜息をついて男の前に胡座をかいた。

「窃盗。」

「窃盗？！それでここにぶち込まれたのか。そりやあ随分な大物を狙つたもんだ。」

「そうなのか？お前は何をしたんだ。」

男は思い出し笑いをした。

「殺人だよ。あっちの男はマフィアの幹部、向こうの男は手足を切つたり繋いだりした女を見世物小屋でこき使つてた。」

「それはまた……」

カイザは牢を見渡して苦笑いした。

「で、この塔はどういった仕組みなんだ。」

「ここか？最上階の連中のために死ぬまで奴隸のように働く、死刑囚と重罪人が押し込められる塔さ。」

「最上階の連中？」

「ああ。ずっと上に住んでいる、この塔を仕切る看守長やその部下共。他には、国王がかこつてゐる愛人も住んでるつて噂だけだな。」

カイザは少し考え、言った。

「そいつらは普段何をしている。」

「看守は下層の作業場で監視をしたり、牢の見回りをしたり……飯を持つてきたり。」

男が頭を搔くと、そこからブーンと虫が出てきた。カイザはそれを見て身震いした。

「……で、その見回りや飯は何時頃だ？」

「見回りは仕事の交代の時くらいで、飯は一日に二度。さつき兵士が来たから、次の飯まではゆっくりできる。」

「そうか。」

カイザは立ち上がって牢の格子に歩み寄った。そして、キヨロキヨロと外を見渡す。この塔、看守室のある階から下が一重螺旋構造になっていた。内側の階段は看守室と最上階へ続いているが、外側の階段は看守室の一つ下の階までしか行けない、監獄になっていたのだ。その一つに、カイザは入れられた。こんな窓一つなく、表に門まで構えた閉鎖空間だ、そんなしょっちゅう見張りをする必要もないらしい。見渡しても誰もいない。

男が不思議そうにカイザを見ていると、彼の手枷がガチャリと外れて床に落ちた。男は驚いて、言葉を吃らせた。

「おっ、お前……！」

「すまないが、俺は忙しい。」

カイザはブーツに隠していた開錠の道具を取り出し、牢の鍵穴に差し込む。同じ牢に入っている囚人達が、手枷を外して鍵まで開けようとするカイザに気付いて集まってきた。

「お、俺のも外してくれ！」「俺も！」

カイザは振り返つて囚人達を睨んだ。

「…俺達は世間に出来るべきじゃないクズだ。諦めて」*ヒロ*「一生過ごしてくれ。」

「だったら」*ヒロ*「…何自分だけ自由にならうとしてんだ…」

さつきまでいろいろ教えてくれていた男がカイザに掴みかかる。カイザはその手を払って、言った。

「*ヒロ*から出して利用することもできるが…面倒なんだよ、もつお前らみたいなのと付合ひのは。」

「お前…」

「*ヒロ*の腕章…ブラックメリーの…」

「ギールの盗賊…」

囚人の一人が叫ぶと、牢の中はざわついた。カイザは俯いて、小さく笑う。

「…わすがマスター、こんな僻地にまで噂が届いてやがる。」

男は黙つて膝まづき、カイザに言った。

「…頼む、出してくれ。出して貰たらお前の子分になる。なんでもする。頼む…」

「無理だ。俺はもう、ブラックメリーの盗賊じやない。」

カイザは男に背を向けて再び作業を始めた。しかし、男は食い下がる。

「頼む…これは何かの縁だ…俺は、ギールさんに命を救つてもうひとつがある…」

「…マスターに？」

カイザの手が、ピタリと止まつた。

「昔、ウヨゴーの街で…その、追われてたんだ。他の盗賊団に。その時、助けられて…」

男は肩を震わせて俯いた。

「もう足を洗えと言われた。捕まるようなことをしなくても生きていける奴が簡単に盗賊を相手にするなと…それよりなら全うに生きると…言つてくれたのに、俺は…」

男は泣いていた。

「頼む…ギールさんこの首を差し出せるなら、もう一度外に出たいんだ！だから…！」

「…マスターはもういない。」

カイザが言つと、男は顔を上げた。

「マスターは俺が殺した。」

「…何で、それなのにアーマーを…」

「…俺が、マスターから後継者の証を受け取つたからだ。殺したのは俺だが、俺はマスターの意志を受け継ぐことにした。それだけだ。」

「

そう言つと、ガチャリと牢の鍵が開いた。

「扉は開けておく。だが、手枷は外さない。それでもよければここ

から出るなり好きにしろ。」「

「…あ、ありがと…」

「だが、「

カイザは、囚人達を睨んだ。

「お前らの顔は覚えたからな。間抜けにも捕まつてるとこころをせつ
かく自由にしてやつたのに、また追われるような罪を犯しているよ
うなら…俺がお前らを殺す。」

囚人達は黙り込んだまま、立ち去くる。

「マスターがよく言つていた。悪さして捕まつてゐるような奴は死ん
だ方がいいと神に判断されたクズ。捕まらずに生きながらえる奴こ
そ、神に見放されて悪魔にその身を守らされている本当の悪党だつて
な。わかるか?」この言葉の意味。」

囚人達は物言いたげな顔をしつつも、黙り込む。

「…」こんなところにいる本当の悪党でもないお前らは、善良に生き
るか、クズらしくとつ捕まつて死ぬかのどちらかしかないんだよ。」

カイザの言葉に、囚人達の表情は険しくなつてゆく。しかし、カ
イザは続けた。

「…」から出してやるんだ、神に代わつて俺がお前らの命の価値を
見定めるくらい、いいだろ?」

「自分も捕まつたくせに、偉そつなこと言つなー。」

囚人の一人が叫ぶと、カイザは笑つた。

「俺は自分で出られるからな。捕まつても生き残れるんだ。こんな塔の中で死ぬまでひーこら働く予定だったお前らと一緒にするな。」

カイザは囚人達に背を向けて牢を出た。

「待つてくれ！」

振り返ると、男がカイザを見つめていた。

「…わかつた。ギールさんがいないんだ、あんたにこの首を捧げる。」

「いらない、そんな髪だらけの汚い首。死んだ方がいいと判断したら殺しに行くから、それまでは好きに生きればいい。」

「あんた、名前は？」

「…カイザ。」

牢から出でているカイザを見て騒がしくなる通路。そこを堂々と歩いてゆくカイザの背中を、男はじっと見つめていた。

「…お前ら、どうする？」

「外に出てもギールの後継者が目を光らせてるんだろう？嫌だよ、俺…ここを出たらまた組織に連れ戻されるだけだ。」

「俺もだ…」

鍵が開いた牢の中で、囚人達がざわざわと話し出した。そんな中、カイザに言い寄っていた囚人の群から外れて一人隅で座り込んでいた少年が立ち上がった。

「…行くんでしょう？バツテンライさん。」

少年は、カイザに首を捧げると叫んでいた男に話しかけた。バッテンライと呼ばれた男は、少年を見て少し驚き、困ったように笑つた。

「… そうか、お前もこの牢だつたな。」

「僕も行く。あの人に凄く興味が湧いた。」

「カイザはお前に興味はないと思うぞ。」

「いいよ。恋も両想いより片想いの方が楽しい。追われるより、追いかけたい。」

少年は深くかぶつたフードの下で、ニヤリと笑つた。

「… カイザに一番最初に殺されるのはお前じやないかと俺は思つぞ、シド。」

バッテンライは溜息混じりに言つた。シドと呼ばれた少年は、ニコニコと笑うばかり。

カイザは階段を上がり、看守室がある階へ続く扉の前で止まつた。慎重に鍵を見て、仕掛けがないかを確かめる。確かめたところで魔法の知識もないが… 引つかかるよりはマシだ。鍵穴の仕組みと扉に繋がりがあることを確認して、そつと、道具をその穴に差し込んだ。

テーブルに並んだ豪華な料理、積み上げられた衣服や宝石。クリ

ストラはそれらをじーっと怪訝な目で眺めていた。

「…なんだかなあ、変な感じだ。」

クリストフがそう言つと、料理にがつついていたサラは食事する手を止めて少女を見た。どうしたの?とでもいう風だ。

「国王は大層あなたが気に入つたようです。サラと同じようにここに住まわせるつもりなのでしょう。」

サラの近くに置かれた瓶の中で、蜥蜴が言つた。クリストフは嫌そうな顔をしてフォークを手に取る。

「さつきの魔導士が国王か…まだ若いようだし、女が好きで当たり前か。」

「しかし、国王がここにサラとニア以外の人間を入れたのは初めてですよ。」

「…実の娘とその娘をここに住まわせるのは何故だ?」

「…」

クリストフが聞くと、蜥蜴は黙り込んでしまう。何も話さなければただの赤い蜥蜴になりきってしまう。その様子が、逃げられたようで少し腹立たしいクリストフ。少女はフォークを大きな鳥の丸焼きに勢いよく刺して蜥蜴を睨んだ。

「おい、なんとか言つたら…」

その時だった。轟音がしたかと思つと階が少し揺れて、何やら下が騒がしくなった。サラは気にせず食事を続けていたが、蜥蜴は扉の方を見ている。クリストフも、席から立つて扉に耳を当てがつた。

「…」

…イザ！

「…？」

…ストフ！

少女は強く耳を扉に押し付ける。

「カイザ！クリストフ！何処だ！」

聞こえた。その声は紛れもなく…

「フィオール！なんでここに…？」

驚くカイザの声も聞こえてきた。別室に囚われた彼も無事に脱出していったようだ。クリストフは呆然として、もといた席に戻り、震える手で煙管を手にした。

「…如何なさいました。」

蜥蜴の問いかけに、クリストフは小さく笑う。

「いや…カイザは放つておいても出でくるとわかつていた。でも…あいつが来るなんて。」

俯きながら笑うクリストフ。

「何でだらうな…言ひ事とも聞かずここへ来たことを叱りたいのに…凄く嬉しいんだ。」

「…気丈に見えて、やはりあなたも女性ですね。」

「つねせー。」

クリストフはキッと顔を上げて蜥蜴を睨んだ。少女の鋭い視線に慌てたのか、瓶の中でチョロチョロと動き回る蜥蜴。そんな蜥蜴を笑いながら、クリストフは煙を吸い上げる。囚われの身でありながらも喜びが溢れかえる、その胸に。

流水の如く至る場所へ落ち着く

轟音と共に、何やら轟がしくなる扉の向こう。カイザは耳を澄ませてその場に立ちつくす。

「また賊だぞ！」

「さつきの奴らの仲間か！？」

バタバタと兵士が走る音が聞こえた。そして…

「カイザ！クリストフ！何処だ！」

カイザは眉をピクリと動かし、慌てて鍵を開ける。そして、勢いよく扉の向こうに飛び出した。

階段の下を見ると、そこには兵士達と荷物一つで応戦するフィオールがいた。

「フィオール！何でここに！？」

カイザが下に向かつて叫ぶ。遠くて顔は見えないが、フィオールの帽子頭は確認できる。その頭がカイザの方を見た。

「無事か！」

「ああ！だが、クリストフが…！」

気配を感じてカイザが後ろを振り返ると、一人の兵士が剣を振り上げていた。

カイザは振り下ろされる剣を紙一重で避けて、距離をとる。兵士は兜の下で、何やら笑い始めた。

「昨夜はよくもやつてくれたな、盗賊の若造。」

「…？」

カイザが首を傾げると、兵士は兜を外した。兵士は昨晩カイザに金の腕章や剣を奪われ、クリストフに蹴り飛ばされた男だった。不気味に笑う男を見て、カイザは、あ、と小さく声を出した。

「…お前は、」

「一対一で正々堂々！」

兵士はカイザに斬りかかった。殺氣を纏い、激しく剣を振る。やはり、兵を率いていただけあってその太刀筋は鮮やかだ。ナイフや道具を奪われた丸腰のカイザは、一向に避けた。すると、先程の扉まで追い詰められ、逃げ道を塞がれてしまった。

「くそつ…」

左手のアーマーで兵士の剣を受け止めたカイザの視界に、兵士のあいた左手に握り締められている、もう一本の剣が飛び込んできた。カイザはハッと息を飲む。

「終わりだ！」

剣の切先が、カイザの心臓目掛けて伸びてくる。カイザは動けずに、素手の右腕一本で凌ぐうとした。その時、

「どけ！」

フィオールの声がした。兵士とカイザが思わず横を見ると、下層

から最上階まで火柱が上がった。そして、その中からフィオールが飛び出してきた。

「うわ！」

驚きのあまりよろめく兵士。カイザは、兵士の緩んだ手元を蹴り上げた。左手の剣が弧を描いて手摺を越え、火の海になっている下層へと落ちてゆく。

「…くつ…」

兵士が右手の剣を握り直す…が、続々様に繰り出される蹴りによるめき、手摺を越え、真っ逆さまに下層へと身を落としてしまった。そして、危機一髪のところで形勢逆転し、男の悲鳴を耳にしていたカイザに…

「…どけって！」

フィオールが突っ込んできた。正面からぶつかりそのまま壁に激突する二人。

「いつてえ…」

「わりーわりー…」

フィオールはよろよろとカイザの腕を掴んだ。

「いや…助かった。」

カイザは腕を引かれながら立ち上がり、下層を見下ろした。火はだいぶ小さくなり、パチパチと音を立てて石の壁に焦げ目をつけて

ゆく。

「二の火…お前がやったのか？」

「ああ。ニアが教えてくれたんだ。火の魔法、だそうだ。この指輪が俺の魔力を增幅させてくれる。」

フィオールは左手の甲を向けてその小指に光る金の指輪をカイザに見せた。

「糞みたいな魔力しかなくとも、この指輪があれば…」

フィオールは左手をギュッと握り締めて、階段の向こうに拳を向けた。カイザはそれを見つめていた。フィオールは、その拳をゆっくりと開く。すると、彼の手の中で小さな火が円になつてぐるぐると走り、それは一気に大きく燃え上がった。

「ちょうどいいところへ兵士が来やがったな。」

階段の向こうから兵士がぞろぞろとやってきた。フィオールは左手に火を宿したままニヤリと笑う。火に照らされて影を帯びるその横顔が、カイザには恐ろしく見えた。金の指輪をしたフィオールが何か、人外のものになつてしまつたような気がしたのだ。

「さて、一気に蹴散らして…」

フィオールが踏み出そうとした、その時、

「カイザ！」

「ぶつ…！」

後ろの扉が勢いよく開いた。フィオールは開いた扉に挟まれ、一瞬にしてカイザの視界から消えた。驚いたカイザが声の主に目をやると、そこにはフードを深くかぶつて嬉しそうに「コーコー」笑う少年と、牢で会った男がいた。

「お前らは…」

「よかつたあ、まだここにいてくれて。」

少年は手枷をガシャガシャ鳴らしながらカイザに歩み寄つてその手を取つた。カイザは困惑気味に男を見た。男も困ったような顔をしている。そこへ、扉の裏から額を抑えたフィオールがゆっくりと出てきた。

「いつてえな…いきなり開けると危ないって母ちゃんから留わなかつたのか?!え?！」

フィオールが少年に向かつて怒鳴るが、少年は「コーコー」と笑うばかり。見兼ねた男が話し出す。

「悪つた…こいつはシド、俺はバッテンライ。カイザに話が…」「シド？」

フィオールの表情が、変わった。

「そんのはあとにしよつよ。あいつら、やればいいんでしょ？」

シドと呼ばれた少年は階段を下りてくる兵士を指差した。カイザは面倒くさそうに溜息をついた。

「俺に構うな。脱出するなら今すぐここを出る。下層はフィオール

が粗方片づけたから。」「

「そう言わずに。僕があいつらをやるから、カイザは看守室に行きなよ。どうせ持ち物全部とられて丸腰なんでしょう？」

「…」

兵士の群れを見ているシドを、カイザは訝しげに見つめる。バットンライも複雑な顔をしてその汚い頭を搔いていた。シドはニッコリと頬笑み、踵を翻した。

「…なんだあいつ。」

手枷をしているとは思えないほど軽やかに階段を駆け上るシドの背中を見つめ、カイザは首を傾げる。そんなカイザに、バットンライは言った。

「あいつは、殺し屋だ。」

バットンライは嫌そうな顔をしてシドの背中から顔を背ける。

「カイザ、あんたのこと気に入つたらしい。」

「俺? 何で。」

「知らないが、関わらない方がいい。」

「…」

カイザはバットンライの真つ直ぐな視線を正面から受け止めた。

「…俺に、何かできることは。」

「ない。」

「さうか。じゃあ、俺は行くよ。どこかでまた会えることを願つている。」

「…その時は、酒の一杯くらい、付き合ひでやるよ。」

カイザはそう言つてバッテンライに背を向けた。バッテンライは少し驚いた顔をして、小さく笑つた。カイザの背中から滲む、かつての恩人の面影を見ているかのように。バッテンライは何も言わず、階段を下つて去つて行つた。背を向け合つたとしてもまた正面を向いて言葉を交わす運命にある一人は、こうして出会つて間もなく、別れたのだ。

「…で、看守室に行くんだろ？それはいいとして、クリストフと一緒にアの旦那と娘は。」

フィオールがカイザに話しかけた。カイザの視線の先では、シドが戦つている。軽快な身のこなし、狙いの正確さ、そして、残忍な笑顔。

「…看守室には、俺が一人で行く。フィオールはクリストフ達をなんとかしてくれ。」

「クリストフ達？」

「あいつら3人は最上階の一室に閉じ込められている。しかも、魔法で封じられた部屋だ。解除魔法というのが必要らしいんだが…」「…わかった。解除魔法は知らないが、なんとかしてみる。」

「頼む。」

フィオールは力強く頷いて、ふつと小さく息を吐いた。すると、火の橋が最上階に向かつて伸びてゆく。

「気をつけてな。」

そう言つて、フィオールは火の橋に足を掛けた。彼が乗ると、火

は彼を乗せたまま最上階に向かつて消えていった。

「…本当じゃ、魔法って便利だな。」

カイザは無表情でそう咳き、看守室へと向かつて走りだした。すると、何やらもう一つ足音が聞こえてきた。さらに、ガシャガシャと鉄が擦れる音もする。嫌な予感がしながらも、カイザはゆっくりと振り返った。

「僕も行く。」

やはり、シドが二コ一コしながらついてきていた。カイザは眉を顰めて前に向き直る。

「来るな。バッテンライはもう行ったぞ。」

「僕は君について行こうと決めてたから。あのおっさんはどうでもいいよ。」

カイザは看守室の前に立ち、扉に手を掛けた。その後ろにぴったりとくつしへシド。

「…おい、どうか行け。お前が何をどう決めようと勝手だが俺に関わることだけは許さない。」

「なんで？」

カイザはシドを見下ろした。

「俺はお前に興味ない。」

「僕はあるんだ。」

「邪魔なんだよ。」

「

「そんなことないよ、僕は役に立つと思つたな。」

カイザは舌打ちをした。

「いい加減にしろーついてくるなー。」

そして、カイザは看守室の扉を荒々しく蹴り飛ばした。飛び散る木片、窓から差し込む光。

「…なんだ、これ。」

血が飛び散る室内。四肢が散乱し、天井まで赤く染まっている。かつてクリストフが投げ飛ばした机の上に、一人の人影が見えた。逆光だが、明らかにその横顔は…

「化け物？」

シドが呟くと、その人影がカイザの方を見た。その手には長い刀剣と、血が滴る兜が。中には、きっと…

「…」

やりあつてはいけない。カイザは盜賊の勘でそう感じていた。しかし、ここに来たからには奪われた荷物だけは取り返さなくてはならない。その中に、ブラックメリーも含まれている。カイザは立ち尽くしたままに、人影を見つめていた。その狭い視界の中で、荷物を探す。

「…カイザ、僕がとつてきてあげる。」

カイザがシドを見ると、少年はにっこりと笑っていた。

「…やめろ、」

カイザの咳きも聞かずに、シドは部屋に駆け込んだ。そして、部屋の奥の棚にある荷物を手にした。

「シド！」

カイザが身を乗り出した瞬間、人影は机から飛び上がって兜を力イザに投げつけた。カイザがそれを払うと、シドの背後で刀剣を振り上げられている。

「カイザ！」

シドは荷物をカイザに投げ渡し、振り下ろされた刀剣をその手枷で受け止めた。しかし、少年の笑顔は、消えた。ギッと小さく音がしたかと思うと、鎖はバラバラに砕けてしまったのだ。

「死んじゃう。」

シドは、やはり二ヶコリと笑った。その小さな身体が頭から裂かれると思われた、その時。人影の頭に兜が飛んできて人影は棚に向かつて倒れ込んだ。バサバサと棚に収められていたものが人影の上に落ちてゆく。その隙に、シドはカイザの元へと戻った。

「ありがとう、カイザ。」

「…」

カイザは荷物からブランクメリーやを取り出して、構えた。

「もういい、行くぞ。」

「僕も一緒に行つてもいいの?」

「…」

カイザは少し考えた。そもそもだと人影が動き、キラリと刀剣が陰の中で光る。

「わかったよ、とりあえず今はついてこい。」

「やつたあ!」

シドは無邪気に笑つて走り出すカイザの後を追いかけた。

「…」

窓から光が差し込む部屋で、唯一息をしている人影は、ゆっくりと立ち上がった。そして、その仮面を外して窓の外を見た。

「見つけた。運命の至る場所・俺の、至るべき場所。」

肩まで伸びた黒い髪の頭頂部はまだ白く、光を激しく反射している。そして、男は仮面をつけた。

刺客は敵を回十と呼ぶ

フィオールは最上階に降り立ち、辺りをキヨロキヨロと見渡した。すると、その階には扉は一つしかない。そこだ。フィオールは扉へ駆け寄り、手のひらを扉につけた。

「燃える、」

手のひらから火が走り、扉を燃やしてゆく。パラバラと灰になつて崩れてゆく扉に向ひてには…

「フィオール、入つてくれるなよ。出られなくなるぞ。」

豪華な料理を田の前にしてふんぞり返るクリストフがいた。

「おい！ てめえ！ 人が必死こいてここまで来たつてのに何くつろいでんだ！」

「あ！」

怒り心頭のフィオールが部屋に足を踏み入れると、クリストフが声を荒げた。フィオールは驚いてその足を止めた。

「お前！ 入つてくるなって言つたのに…」

クリストフは頭を抱えて項垂れた。サラはもくもくと料理を食べている。

「…」

事を察したのか、フィオールは振り返つて部屋から出ようとした。
が、もう遅い。

「…出れねえええ！」

馬鹿みたいに見えない壁を叩くフィオール。

「だから言つただろうがー馬鹿か？！お前は馬鹿なのか？！」

クリストフはテーブルを叩いた。サラがびくっとして食べる手を止めた。フィオールは肩を落として苦笑いしながらテーブルに歩み寄つた。

「『』、『』めんな。留守番放棄した上、こんなこと…」

この時、彼は決意していた。クリストフに半殺しにされることを。しかし、少女はふいつとそっぽを向いて、言つた。

「…やつてしまつたものは、仕方ないだろ。」「…クリストフ、お前…」

フィオールは少女の肩を掴んで自分の方を向かせた。突然のこと。に頬を赤らめて驚く少女。

「なつ…！」

「…この料理の毒に当たられたのか？そんな、鬼のクリストフが仏のよくな言葉を…」

結局、フィオールは殴られた。

「それは…ニアの指輪！どうしてあなたが！」

床で伸びているフィオールに蜥蜴は聞いた。その声に驚いて我に返るフィオール。

「男？！」

「これだ、これ。」

椅子に座ったクリストフが瓶を掲げて見せた。フィオールは殴られた頭を撫でながら立ち上がり、瓶を手に取る。

「始めてまして。」

「喋ってる…」

フィオールは目を丸くして瓶を見つめた。

「その指輪、我が妻の物です。どうしてあなたが？」

「これは、出発の前にニアがくれたんだ。ついでに俺に火の魔法も教えてくれて…」

「そうでしたか。それはよかったです。どうにか出られそうですよ、クリストフ様。」

蜥蜴がそう言つと、クリストフはワイングラスをテーブルに置いて蜥蜴を見た。

「本当か。」

「ええ。彼に私が解除魔法を教えます。」

「フィオールじゃないと駄目なのか？」

「はい…残念ながら、クリストフ様とカイザ様には魔力を感じられ

ませんでしたので。指輪をした彼なら、なんとか。「

蜥蜴はフィオールに向き直り、言った。

「では、いきますよ。」

「あ、ああ。」

フィオールは緊張氣味に頷いた。

「では、まずあの窓に手をつけてください。」

フィオールは指示通りに窓へと向かい、そこに手を当てた。

「そして、火の魔法を使う時と同様に精神を集中させ、丹田に溜まつた魔力をその手に集めてください。」

「

大きく息を吐き、フィオールは閉じた目を開いた。

「最後に、硝子に杭を刺して割るイメージをして、呪文を。」

蜥蜴が呪文を言おうとした、その時だ。窓ガラスが割れて、室内に破片が飛び散った。フィオールは咄嗟に瓶を庇い、クリストフとサラは立ち上がった。

「…」いつ、「

フィオールが顔をあげると、目の前には一人の男がいた。上から片手で何かにぶら下がり、窓の枠に足を掛け、中を見ている。その顔には、おぞましい怪物の仮面。

「鳥天狗……？！」

クリストフが呟いた。男のマントが風に舞いあげられた。靡く袴に、腰に携えられた刀剣。そして、その背中には…

「…カイザ！」

フィオールとクリストフが振り返ると、そこには傷だらけの少年が肩で息をして立っていた。その表情は、仮面に優るとも劣らぬ形相だ。

「彼は僕のだ…返せ！」

二人は少年の言葉に再び男を見た。その背中には、ぐつたりとしたカイザの姿があった。

「カイザ！」

フィオールが彼を救うべく解除魔法を施そうとした時、シドは部屋に飛び込んで窓に向かってきた。しかし、見えない壁に阻まれてその場に倒れ込んでしまう。

「シド！」

「シド？」「いつが？！なんで…！」

シドを抱きかかるフィオールにクリストフは混乱気味だ。そこで、男は動き出した。あいた手を見えない壁に向け、小さく何かを呟く。すると、硝子が割れるような音が響き、キラキラと破片が散らばった。それはとても薄く、触れない。散ったかと思うと、空氣

の中に消えていった。

「解除魔法……」

蜥蜴が言つと、フィオールは暴れるシドを抱いて後ずさりした。

「何者だ、お前。」

クリストフが窓からゆっくりと室内へ入つてくる男を睨んだ。男は背負つていたカイザを壁に寄りかからせて、クリストフを見た。サラは怯えながらクリストフに抱きつく。

「…」

何も答えずに刀剣を抜く男。クリストフは言つた。

「それ、東の国の戦士が使つてる刀つてやつだろ。それに、そのなり…ヤヒコの家の人間だな。」

「…」

「…何をしに来た。鳥天狗の面なんかしてこんなところまで。」

「…」

「答えろー。」

男は無言でクリストフに歩み寄る。クリストフはサラを庇つよう立つて男を睨む。

「寄るな。」

「…」

フィオールがクリストフの前に立つた。男は立ち止まり、じつと

フィオールを見つめる。その背後では、シドがカイザに駆け寄ろうとしていた。男はそれに気付いて脇差を投げた。シドはそれをするに避けると、カイザの腕を掴んだ。男は踵を翻してシドに向かってゆく。シドは必死にカイザを動かそうとするが、瘦せた少年の力ではびくともしない。少年は意を決して投げられた脇差を手にした。

「お前の相手は俺だ！」

フィオールが後ろから殴りかかった。男は軽い足取りでそれを避けて流れるように切り上げた。フィオールはアーマーで刀を受けたが、鉄をも切り裂く刀だ。防ぎきれず、その腕に切り傷を負つてしまつた。フィオールはよろめきながら、口から炎を吹き出した。すると、男は後方に避けながら仮面を少しづり上げて、フィオール同様に火を吹き出した。互いの炎は部屋の中心でぶつかり合い、激しく燃え上がつて消えた。

「…」いつも、火の魔法を。」

「…あの男の小指、見えますか。」

蜥蜴に言われてフィオールは仮面の位置を直す男の手を見た。そこには、またしてもフィオールと同じ金の指輪があつた。

「…どううことだ。」

「わかりません。しかし、あれは確かに火の妖精と契約した者の指輪です。」

「契約？」

「ええ。業輪のようなものです。あれがあれば火の魔法が使えます。しかし…炎の指輪は父がダンテ様に、私がニアに与えた2つしかこの世に存在しません。もしかすると、あの指輪は…」

最悪の状況がクリストフとフィオールの頭を過る。男の小指で光る指輪は、ダンテのものかもしれない。すると、彼女は男の手に掛けられている可能性が高い。そうなると瓶の封印を解いてもらひつどころか、業輪探しの協力を仰ぐことすらできなくなる。

「お前、本当に何者なんだ。ヤヒコの差し金か?」

「イトサマは関係ない。」

仮面の下から籠つた低い声が響いた。

「イトサマ、ねえ。ヤヒコはイトサマになつたのか。それも予言通りだな。」

見下すよつに笑つクリストフを、じつと見つめる男。

「クリストフ、どうこうことだ。」

「後で説明する。とにかく今はここから出るが。瓶と娘は任せた。」

クリストフはそう言つと、背後に隠れていたサラを引っ張りながら、瓶と娘は任せた。 フィオールに押し付けた。そして、拳を大きく振り上げた。

「まさか…」

「そのまさかでしょうね。」

顔を引き攣らせるフィオールと諦めたような声を出す蜥蜴。クリストフは、その剛腕を赤い絨毯に向かつて振り下ろした。

「やつぱり!」

「崩れますーサラー!」

石の壁に罅が入り、床は絨毯や家具諸共落ちてゆく。ガラガラと天井からも瓦礫が落ちてきた。フィオールは瓶を抱きしめるサラを小脇に抱えて外に向かつて火の橋をかけた。落ちてくる瓦礫を擦りぬけて石埃の中なんとか脱出したフィオール。近くの森に身を隠し、崩れる塔を見ていた。

フィオールが脱出を図っていた時、男はカイザのもとへと走っていた。崩れる床を高下駄で渡り、今にも落下しそうなカイザに手を伸ばす。

「触るな。」

カイザの近くで宙ぶらりんになっていたシドが男の手を脇差で傷つけた。男は怯むどころか、シドがぶら下がっている手に刀を突き刺した。シドはぐつと息を飲んで痛みに耐えようとしたが、刀を抜かれるのと同時にその手を放してしまった。睨みつけながら落ちてゆくシドを見届け、男はカイザに手を伸ばした。しかし、その手は突如止まつた。何故なら、カイザが血を吐き出しながら男を鋭く睨んでいたのだ。

「…」

二人が立っていた床も崩れ、ふわりとその身が空に放たれた。男はカイザに手を伸ばしたが、届かない。男は魔法を使おうと左手に炎を作り上げる。が、

「残念、死ね。」

男の目の前には、シドとカイザを抱えて笑うクリストフがいた。少女は軽やかに落ちてくる瓦礫を足場に上へと昇り、天井であつた

であろう大きな石の上に飛び出した。そして、それを下に向かって蹴り飛ばした。

フィオールが見ていると、塔は不自然に潰れるようにして崩れ去った。隕石が墜ちたかのような強い突風が吹き荒れ、外壁までもが崩れてゆく。木陰に隠れてサラと瓶を守るフィオール。サラは小さくなつて瓶を抱きしめていた。

風がおさまり、フィオールはおそるおそる塔を見た。そこは、石屑が積み重なる荒れ地と化していた。その荒れ地に立つ、一人の少女。

「…クリストフ！」

フィオールはサラの手を引いて駆け寄った。クリストフもフィオールに気付いて笑顔で歩み寄る。

「カイザー！シドも無事か！」

「当たり前だろ。」

「あの男は？」

「…」これで生きてたら褒めてやるよ。」

瓦礫の山を見てクリストフは言った。フィオールも、辺りを見渡してみる。

「…よくも、よくも私の塔を…」

一人が振り返ると、兵士を引き連れた国王がいた。

「誰だ、あいつ。」

「国王様だと。」

クリストフが鼻で笑つて言つた。

「さあ、約束どおり、その顔を泣き顔になるまで殴つてやるよ。」「…その必要はない。約束は生者同士でのみ成立するものだ。これから死ぬお前との約束など、破綻だ。」

国王が杖を振り上げた。

「…また魔法かよ。」

クリストフが舌打ちをして後ずさる。

「もう目的は果たした。引いひつ。」

「ああ、」

フィオールに言われて渋々頷くクリストフ。一人は森に向かって走り出した。

「逃がさん！」

国王が杖をつくと、瓦礫が浮いて二人めがけて飛んできた。二人はチョロチョロと逃げまどいながらも森へと向かう。国王はぶつぶつと呪文を唱えて杖をついた。

「…いてっ！」
「フィオール？！」

クリストフが振り返ると、額を抑えて尻もちをつくフィオールがいた。

「どうした！」

「か、壁が……」

「壁？！」

クリストフが駆け寄り、フィオールの前を蹴りあげると、そこには最上階の一室と同じ見えない壁ができていた。

「くそつー。」

クリストフが壁を蹴るが、やはりびくともしない。フィオールは閉じ込められ、二人は壁で隔たれてしまった。

「一人逃がしたか。しかし、サラと蜥蜴を捕える事ができただけいいとしよつ。」

ぞろぞろと兵士を引き連れて国王が笑いながらフィオールに歩み寄る。

「お前達が何故ここに来たのかは予想がつく。ニアに頼まれたのだろ？？あの娘はどこにいる。」

「…教えたといひでどうにもなるまい。」

クリストフが国王を睨んで言った。サラを抱きしめ、フィオールも立ち上がった。

「どうにかなるぞ、妖精の門を開かせるために、その蜥蜴を生かしてあるんだからな。」

「…腐つてゐな、お前。」

国王は壁の向こうのクリストフを放つてフィオールを見た。

「その方、火の魔法が使えるそつだな。」

「…」

「私に使えれば此度のことは不問に処す。」

「…」

フィオールはサラを抱き寄せ、国王を睨んだ。

「どうだ？私がさらなる魔法を伝授しよう。」

「…うるさい。」

国王がフィオールに手を差し出すと、フィオールは口から火を噴き出した。国王は驚いてよろめくと兵士が国王を庇つて前に出てきた。そして、剣を抜いた。

「貴様！国王様に逆らうか！」

「別に俺の国じゃねえからなあ、ここは。そんな奴がどうなるつと知らねえよ。」

フィオールのつり上がった口の端から残り火が尾を引く。

「死にたくないけどっか行け！ほら！」

「いいぞフィオール！全員消し炭にしてさつさと出でー！」

クリストフに煽られ、フィオールは前方に向けて激しく火を吹いて見せた。火は瓦礫の下の家具や死体に燃え移り、メラメラと威力を増してゆく。国王は退散しようとする兵士の手を振り払い、叫んだ。

「やれ！あの男を…サラと蜥蜴を取り戻せ！」

「…」

兵士達は顔を見合わせる。国王よりも強力な魔法を使う男が相手では、鬪う氣すら起きない。しかし、国王は声を荒げて杖を振りまわした。

「やれと言つている！私の命令が聞けぬのなら…！」
「俺が、殺してやるう。」

低く籠つた声。国王の背中に戦慄が走る。その瞬間、瓦礫と共に周りにいた兵士が空に舞い上がった。驚いたフィオールは口に含んでいた火を飲みこんでしまった。

「な、なんだ？！」
「…あいつ！」

クリストフの目には映つっていた。火の海を刀一本で舞う、鳥天狗の姿が。悲鳴と恐怖が渦巻く壁の中で、国王は立ちつくしていた。一人、また一人と血を噴き出し、空中へと投げ出される兵士。姿の見えない、敵。ついに、その場に立っているのは国王ただ一人になつた。がたがたと震えて辺りを見渡すが、サラを抱くフィオールと壁の向こうのクリストフ以外、誰もいない。

「…な、何者…」
「…最後だ。」

背後からの声。振り返った国王の目に、鳥天狗の面が映つた。かと思うと、視界がぐるりと一回転した。そのまま、鈍い音がしたかと思うと視界は地を這い、暗くなつた。

首が落ちてそのまま崩れる国王の身体。それをじっと見つめる仮面の男。フィオールとクリストフは息を飲んでそれを見ていた。男が一人を見る。サラを抱きしめるフィオールの手に、力が入った。

「…その男と女をよこせ。」

「…誰のことだ? わからないな。」

クリストフは冷や汗を流しながらも笑った。

「お前と、その脇に抱えているブロンンドの男だ。運命の至る場所へ誘う鍵。」

「何なんだよ! お前は!」

フィオールが叫ぶと、男は刀をフィオールに向けて言った。

「お前こそ、何者だ?」

「俺? 俺は…西の情報屋だ。」

男はフィオールを少しの間じっと見つめて、言った。

「…お前に用はない。しかし、死にゆく同士に敬意を払い…この名を明かす。」

「同士…」

男は左手の甲をフィオールに向けた。輝く金の指輪が同士である証だと言いたいようだ。

「蘭丸、と申す。名も聞かずに切り捨てること、勘忍願いたい。」

そう言つと、蘭丸と名乗る男はフィオールの懷に飛び込んできた。

「逃げる！」

クリストフが叫ぶが、そんな余裕はない。かといって蘭丸の刀はアーマーでは防げない。ファイオールは苦し紛れに蜥蜴が入った瓶をサラから取り上げ、それで刀を受けた。すると、瓶は見事にその太刀筋を捕えて見せた。驚いて身を引く蘭丸の左頬に、ファイオールはカウンターで渾身の拳を浴びせた。蘭丸は吹っ飛び、瓦礫の中に倒れ込んだ。

「よくやった！今のうちに……！」

クリストフが出るよに急かすが、ファイオールは頭を抱えてしがみ込んでしまった。心配そうにおろおろするサラ。

「どうしたんだ、ファイオール！」

「あ、頭が……」

すると、蘭丸の仮面の下から呻き声が聞こえてきた。彼もまた頭を抑えている。ファイオールに殴られた左頬ではなく、頭。

「…何を、した。」

蘭丸が苦しそうに聞くが、ファイオールは答えられる状況ではない。蘭丸はようよると立ちあがつた。

「…」

そして、ファイオールを少し見つめて瓦礫の向こうへ消えて行つた。

「フィオール、フィオール？！」

「…クリ…ストフ…」

フィオールがゆっくりと倒れ込む。それと同時に、目の前の壁が音を立てて割れた。キラキラと空で光る破片。硝子のぶつかる音が小さく響く。クリストフはシドとカイザを横たわらせてフィオールに駆け寄った。

「じっかりしろ… フィオール！」

小さな光がぶつかり合い、空氣に消えてゆく瓦礫の上。少女の悲痛な叫び声だけが聞こえていた。虫の息の3人の男と一匹の蜥蜴。そして、唯一その足で動くことができる少女が一人。

「勝ったんだぞ… あたし達は！ おい！ 起きろよ！」

少女の涙がフィオールの頬に落ちる。それでも彼は目覚めない。魔法のようなことは、起きない。

少年はそれでも笑う

いつも感じていた。自分の価値や生きる意味、愛する人との幸せを求めている誰や彼もが、なんと哀れな存在であるか。その命に何の意味もないなんて知らずに、必死に生きて、呆氣なく死ぬ。それはまるで蠟燭の火だ。燃え続けて…ふと、消える。そこに残るのは垂れ流れる蠟と、仄かな香だけ。なんて哀れな存在であるか。なんて哀れな存在であるか。感情という毒に蝕まれてもがき苦しむ。誰も知らない。それこそが、神が与えた最大の罰であることを。誰も…いや、の方は知っていた。

「これからはエドガーとお名乗りください。」

黒い瞳の、白いお方。

「…ええ。わかりました。」

柔らかな笑顔の向こうで揺らぐそれは、諦めと、憂。彼女はわかつっていたんだ、全て。だからこそ、神も…

彼女が言葉を無くしてしまった今、誰も真実を知ることは叶わない。これから始まる長い長い輪廻の物語すら、意図するところも知らずに人々は巻き込まれてゆく。なんの、意味もないのに。

- - - - -

誰の声だろうか。それよりも、ここはどこで、自分はどうなつてしまつたのだろうか。目の前が真っ暗であることに気が付き、これは瞼であると悟る。それを開けば何かが見えるはず…彼は、ゆっくり

と瞼を開いた。

「…カイザ！」

田の前には、見慣れない少年の笑顔。何度か瞬きをして、彼はゆっくりと身体を起こした。節々が痛い。どうにか生きているようだが、どうどうな無理をしてしまつたらしい。

「シド…まだついてきていたのか。」「よかつた！よかつたよ！」

シドは鎖が千切れた手枷をガチャガチャ鳴らしながらカイザの手を取つて喜ぶ。状況がわかっていないカイザはまだ混乱氣味だ。頭の中で記憶を整理するが、どうしてもこの妖精の隠れ家まで戻つて来た記憶がない。

「俺は…」「記憶喪失か？」

顔を上げると、酒瓶片手に扉に寄りかかるクリストフがいた。

「クリストフ…」

「なんだ、ちゃんと覚えてるじゃないか。」

「…そうだ、あの男は！サラと蜥蜴は無事なのか！」

大声を出して傷に触ったのか、カイザは胸を抑えて俯いた。シドが背中を擦ればいいのか迷つておどおどしている。

「あの男は去つた。サラと蜥蜴は無事だ。」

クリストフがそう言つて近くのソファーに座つた。

「そ、うか……じゃあ、お前とフィオールが俺をここまで運んでくれたのか。」

カイザは苦しそうに笑い、部屋を見渡した。クリストフに、シド。隅の椅子にはミハエルが座つている。

「……フィオールは、どうした。」

「……」

「……クリストフ？」

クリストフは眉を顰めてそっぽを向いている。その様子に、カイザの顔から血の気が引いてゆく。

「嘘、だろ？ そんな……」

「おい！ 俺の酒持つて行つたろ！」

勢いよく開かれた扉。そこに立つていたのは……

「あれ、カイザ起きてたのか。」

「フィオール……」

骨付き肉を片手に仁王立ちする、フィオールだった。カイザはクリストフを睨んだ。

「生きてるじゃないか。」

「なんだよ、生きてたんだよ。」

クリストフは嫌そうな顔をして酒を飲んだ。

「なんだよ！一人して俺が死ねばよかつたみたいな態度して！」

フィオールが骨付き肉を握りしめてカイザを見下ろした。そんな彼の後ろから、クスクスと小さな笑い声が聞こえてきた。

「みんな死んでしまった、とクリストフ様は子供のように泣いてらして大変だったんですよ？」

フィオールの後ろから、瓶を抱きしめて笑うニアがひょっこりと顔を出した。クリストフは酒を噴き出して顔を真っ赤にする。

「ひ、人が死んだら悲しいだろ！」「勝手に殺すな。」

フィオールが開き直ろうとするクリストフにピシャリと言い放つた。ニアは楽しそうに笑いながら部屋に入り、カイザの近くに座つた。

「体調はいかがですか？」

「ああ…おかげさまでなんとか生きている。」

ニアはについつと笑ってクリストフを見た。

「本当に、ありがとうございました。」

「礼はいい。あたし達の方こそ、大事な指輪を貰つてしまつて…悪いな。」

「気にならないでください。ろくに使いこなせぬ私が持つてているより、才のある方が有効に使つてくださる方が指輪も喜びましょう。」

「

クリストフは困ったように笑つてフィオールに言った。

「才のある方、だつてよ。」

「ニアは見る目があるな。」

得意げなフィオールを呆れたように見つめるカイザ。その隣で、シドはニコニコと笑っていた。

「しかし、気になりますね。」

ニアが表情を曇らせた。

「東の使者が何故…クリストフ様とカイザ様を狙つたりなど。」

「東の使者…あの男か。」

カイザが聞くと、クリストフが言った。

「ああ。蘭丸と名乗つていた。あのなりは東の装束だし、あの武器は東の戦士が使う物だ。それに、あの鳥天狗の面は…ヤヒコの家にあつた物。間違いない。」

「ヤヒコって、美女の一人だろ。」

フィオールはクリストフの隣に腰掛けて聞いた。

「そういうえばお前、予言通りだとかなんとか言つてたけど…」

「…カイザは寝ていたから知らないと思うが、蘭丸はヤヒコをイトサマと言つていた。イトサマってのは東の国王を指す呼び名なんだ。」

「伝説ではヤヒコは東の女王と謳われてる。それがどうした。」

「どうしたも何も、あたしが会った時ヤヒコはまだ王位を継いでいなかつた。今だって、ヤヒコが女王になつたという報告は入っていない。」

フィオールとシドは顔を見合させて首を傾げた。カイザは何か考え込んでいる。そして、ゆっくりと口を開いた。

「……ここ最近で伝説の通り、ヤヒコは女王になつて……それを機に蘭丸という男が何らかの目的で送り込まれた可能性があるってことか。」

「蘭丸はヤヒコとの関連性を否定していたがな。」

クリストフは面倒臭そうに言った。フィオールは頭を搔きむしって叫んだ。

「あー！ いつもいつもお前らだけで理解して！ 僕はちつともわからねえ！」

「いつもいつも、お前は馬鹿だな。」

クリストフが横目にフィオールを見た。

「とにかく、目的はわからないがヤヒコは敵である可能性が高い。それに、ダンテのことも心配だ。」

「何があつたのか、北の魔女に。」

カイザが聞くと、クリストフは溜息をついた。

「理解のない男に、大事なところで伸びてた男……それに、赤の他人。」

「

クリストフが面倒くさそうな視線を送る中、シドは「一二一」と笑っていた。クリストフはカイザが気絶していた間にわかつたことを一から説明した。ついでに、そこから導き出されたこともフィオールにわかるよう、丁寧に。まだ王位を継承していなかつたヤヒコが最近になって伝説のとおり女王になつたこと、蘭丸がヤヒコの家臣であること、その蘭丸の狙いがカイザとクリストフであつたこと、蘭丸の指にはダンテとフィオールしか持つていなければ指輪がはじめられていたこと…

「わかつたか？ フィオール。」

「…まあまあ。」

フィオールは難しい顔をして頭を搔いた。

「運命の至る場所へ導く鍵…とか言つてたな。あの言葉は。」「知らん。」

クリストフはフィオールの問いかけに即答した。

「ダンテの安否も定かでないなら、急いだ方がよくないか。ヤヒコが敵だとしたら業輪がまだ大陸にあるうちに手にしてしまわないと…」

カイザが眉を顰めて言つと、クリストフは酒瓶に視線を落とした。

「ああ。何もわからぬいうちにヤヒコの手に業輪が渡ることだけは避けたい。」

クリストフは不安そうにしているニアを見た。

「再会できたところ悪いが、その蜥蜴借りていぐぞ。」

「…」

「どうせダンテにでも見せないと瓶から出られないんだ。あたしに任せておけ。」

「…はい、」

悲しそうに俯く二ア。

「僕も行く。」

「そうだ、忘れるところだつた。なんでお前がいるんだ？ シド。」

笑いながら元気に手を上げるシドをクリストフは冷やかに見つめる。

「クリストフ、知り合いなのか？」

カイザが聞くと、クリストフは小さく溜息をついた。

「まあな。」

「僕は知らない。カイザ、この人誰。」

シドが問いかけると、カイザは言った。

「あいつはリノア鉱山の山賊を束ねるマザー・クリストフ。ついでに、伝説の美女の一人だ。」

「あ、なんだ。前に僕、あの人に殺されかけたんだ。」

シドの言葉にクリストフの目が吊り上がった。

「お・ま・え・が！ あたしを殺そうとしたんだろうが。」

「…何があった、この一人に。」

間に挟まれて迷惑そうにしているカイザ。フィオールが骨付き肉の骨をゴミ箱に投げ入れ、言った。

「聞いたことがある。鉱石の商談で失敗した連中がクリストフを恨んで優秀な殺し屋を送り込んだって。計画は失敗したらしいけどな。」

「返り打ちにしてやるかと思つたのにまんまと逃げやがつて、このクソガキ。」

舌打ちをしてシドを睨むクリストフ。

「返り打ちにして半殺しにした拳句、僕の事調べ上げてガトーとかいう強い人送りつけてきたじゃん。ひどいよ。」

「てめえだってあたしを殺そうとしただろ！」

「でも恐怖で逃げ出したいたいけな子供に追手を払うなんて、非人道的だよ。」

「どの口がそれを言う。」

「言いあう二人にフィオールが割つて入った。

「シド、お前の事調べてクリストフにちくつたの俺なんだけじよ、」「あ！ひどいよ。殺していい？」

「殺し屋組織、ホワイトジャックでも一目置かれてたお前が何であるなところに捕まつてたんだ？」

シドの無邪気な脅しを受け流し、フィオールが聞いた。すると、シドの笑顔が引き攣つて固まった。

「ホワイトジャックのシド？」のガキが？

カイザが驚いてシドを見た。シドは黙つたまま、何も言わない。

「そうだよ、あの小さな死神ってのはこいつのことだ。」

シドを睨みながらクリストフが言った。ニアは少し怯えて身を引いている。

「…一晩でシアトリアムのマフィアを一人で全滅させたっていう、小さな死神だろ？」

「ああ。」

「…小ちつて、単に身長のことじゃなかつたのかよ。」

カイザは驚きが隠せないらしく、じつと田の前のシドを見つめた。ついに、シドの笑顔は消えて無表情になつてしまつた。

「そんな奴が、なんである塔に。」

「だろ？俺も気になつてたんだ。」

カイザとフイオールが話していくと、シドがその重たい口を開いた。

「ホワイトジャックの人にはめられたんだ。」

幼く小さな声が響く。

「…みんなも、僕を殺すの？」

カイザが振り返ると、少年は俯いている。

「みんなも僕が…邪魔なの？」

少年が顔を上げると、部屋の温度が一気に下がった。無表情。しかし、その目には確かな殺意があった。殺意と、不思議な威圧感。まだ11、12歳の少年が放つそれは、確かに培つてきた殺し屋としての力量を物語る。カイザは後ろ手にブラックメリーを探していた。フィオールも、小脇の荷物に手を伸ばした。ニアは、恐怖で動けない。それぞれが少年の殺気に対し、無意識に動き始めていた。そんな中、

「次、あたしを殺そうとしたらその時こそぶち殺すけどな。」

酒を飲みながらクリストフが言った。怖気づくことを知らない、不敵の聖母は少年の殺氣にも動じない。その雰囲気に安心したのか、カイザとフィオールは臨戦態勢を解く。先程までの冷たい雰囲気はどこへやら、少年は拗ねたように俯いた。

「あれは仕事だったから…もうホワイトジャックにも戻れないし、しないよ、そんなこと。」

「だったら邪魔どころか役に立つんじゃないのか？カイザ。こいつはお前に懐いてるんだろ？」

クリストフがカイザに聞くと、シドはチラッとカイザを見て再び俯いた。

「…」

「カイザ、僕…」

シドは顔をあげ、ニッコリと笑った。

「居場所がないんだ。」

その笑顔は、悲しかつた。

「行く場所もなくて仕方なくホワイトジャックにいたけど…僕、カイザに会つて初めて思ったんだ。この人と一緒にいたいって。ここを居場所にしたいって。」

カイザの脳裏を、バツテンライの言葉が過った。

-あいつとは関わらないほうがいい…

死神と言われる少年は、カイザの目には孤独に怯える哀れな少年にしか見えなかつた。しかし、バツテンライの言葉の意味を知るのは、次の瞬間。

「誰と一緒にいてもみんな死んじゃうから、結果的には何の意味もない無駄な願いだとはわかってる。」

少年は何の悪意もなく言う。

「カイザが明日死んじゃうとしても、誰に殺されるとしても…それでも僕、一緒にいたいと思つたんだ。」

笑顔で俯く少年を、呆れたように見つめる3人。

「…おいクリストフ、シドは本当にカイザに懐いてるんだろうな。」「何で俺が明日死んだり誰かに殺されることが前提になつてるんだ。」

クリストフは溜息をついた。そんな3人を見て、シドは首を傾げる。シドがおかしいのは、死生観だ。少年には生きている者の死が真つ先に目に映る。動いているものや人は全て、”まだ死んでいない者”に他ならないのだ。

「…お願いだよカイザ。僕を連れて行つて。きっと役に立つてみせるから。」

カイザは塔でのシドを思い返した。

「死んじゃう。

そう言つたあと、蘭丸に刀を振り下ろされて笑っていた少年。フィオールは部屋に飛び込んできたシドの顔を思い出していた。

「彼は僕のものだ…返せ！」

へらへらと笑つている今とは違う、鬼気迫る雰囲気。

クリストフは崩れる塔の中のシドの姿を振り返つていた。

「…触るな。

手を刀で刺されても、その身が瓦礫と共に落ちてゆくのも、悲鳴一つあげない少年。

3人にはやはり、少年は狂気に満ちた存在に思えた。生まれながらの殺し屋であり、幼いからこそ残酷で無慈悲な価値観を植え付けられている。そんな少年を、連れてゆけるのか。

「…お願ひ、だよ。」

笑顔の少年の目が、潤んでゆく。

「…わかつたよ。」

カイザが小さくそう言つと、少年は驚いたように固まつた笑顔を解いた。その瞬間、その目からは静かに涙が流れた。

「連れていく。旅が終わつても、とりあえず俺が面倒みてやるよ。」「カイザ！」

クリストフが立ちあがつた。カイザが少女を見ると、その顔は極めて険しい。

「なんだよ、お前がシドは役に立つって言つたんだろ。」

「鍵戦争でなら…まず、戦力として申し分ない。ただな、育てるつていうなら別だ。ペットじやないんだぞ。そんな軽々しくそいつの人生を背負うなんてお前は馬鹿か。」

「いいだろ。俺は独身だし…結婚する予定もないし。」

「女の問題じゃねえ。ガキは金もかかるしこういう大変なんだよ。」

涙を拭つて俯くシド。それを見て、カイザは憐れむよつにシドのアシテントの頭を撫でた。

「どうせ世間に出了たところでシドには居場所はない。だったら、俺と一緒にいれば寂しくもないし敵から逃げるにも協力しあえる。一人にしてしまう方がよっぽどためにならねえよ。こいつにも、世間ににも。」

「だから…」こいつや世間のことを語つてんじゃねえんだ。お前自身

の！」とだよー。」

クリストフが声を張り上げた。隣のフィオールも驚いている。

「ガキ一人を育てあげたあたしが言うのもなんだけどな、子供ってのは結構な重荷にもなるんだよ！…そいつがしたことはお前の責任にもなる！自分の時間がなくなる！まだ若くて、ましてや死体に拘つたりするお前が、誰かのために自分を犠牲になんてできない！」

「…」

カイザはシドを見た。シドは、不安そうに俯いている。

「…だ、そうだ。」

「…」

「…そう言われても、なあ。」

カイザは困ったように笑った。

「クリストフ、それでもお前はガトーを育てた。マスターも、俺を育ててくれた。ミハエルだつて…そうだ。」

守つてもらうばかりだった少年は、もう、青年になっていた。

「そろそろ、俺が誰かを育てる番なんじゃないか。みんなが苦労したことわざ、俺が担う。」

「お前な…」

「誰かが必ず、自分を犠牲にして何かを守っている。業輪だつてそうだ。お前らなんか、顔も知らない世界中の人間を生かすためにその身を犠牲にしてきた。」

「…」

「業輪に比べたら、俺がこの無邪気な殺人鬼をもう少し人らしく育てるこことくらい…どうつてことないだろ。」

カイザは知っていた。悪事に手を染めねば生きてゆけない幼子がどんな思いをその胸に秘めているのか。シドも、生きるために恐怖や罪悪感を押し殺して生きてきた。自分を押し殺して生きてきた。それによって歪んでゆく価値観や道徳観。しかし、そんな真っ黒に染まりかけた心の中核では幼いながらの本能、愛情を求める本能が脈打っている。手を差し伸べられるだけで、抱き締められるだけで、それが黒を白に変えてくれることも。

「とは言つても、自信はない。俺が嫌になつたら、いつでも離れていいからな。」

「ううん、その時はカイザを殺して僕も死ぬ。」

嬉しそうに笑う少年の頭を、カイザは苦笑いをしながら撫でた。それを不満げに見つめるクリストフ。

「いいじゃねえか。好きなようにやらせてやれよ。」

フィオールがそう言つと、クリストフは鼻を鳴らしてソファーに座りこんだ。

「殺されてもしらねえからな。」

「カイザなら大丈夫だろ。それに…あいつは變つたよ。」

「…まあ、最初に比べれば…」

クリストフは諦めたように溜息をついて、シドと話すカイザを見つめた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4141z/>

Akashic Records ~Edgar~

2011年12月26日22時01分発行